

榎忠

オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with  
Enoki Chū

## 榎忠オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with Enoki Chū

インタビュアー：江上ゆか、池上裕子

2012年2月10日	3
2012年4月10日	43
2012年4月23日	103

---

榎忠（えのき・ちゅう 1944年～）

美術家（彫刻、インスタレーション、パフォーマンス）

金属加工会社に勤務しながら、旋盤工としての技術を活かして鉄の廃材を利用して制作した作品や、半身の体毛を全てそり落としたハンガリの身体表現、パーのマダムに扮したBAR ROSE CHUなどで知られる。2011年の兵庫県立美術館での個展を担当した江上ゆか氏を聞き手に迎え、1回目の聞き取りでは香川での生い立ちから神戸での就職、1970年のグループZEROの結成と活動について、2回目では身体を使った表現活動とグループZERO脱退後の活動、3回目では廃材を使った制作や、近年の活動について語っていただいた。

## 榎忠オーラル・ヒストリー 2012年2月10日

神戸市西区の榎忠アトリエにて

インタビュアー：江上ゆか、池上裕子

書き起こし：永田典子

池上：今日は榎忠さんにお話を伺います。よろしくお願いします。

榎：どういふところから？

江上：できたら、すごいさかのぼって、生まれた時から（笑）。

榎：生まれた時から？

江上：子どもの時から。順番にね、年代を追って話をちょっと。

榎：年代とか、分からへんわなあ。小っちゃいとまのこと。

池上：一応お生まれの年からお聞きしていきたいんですけども、1944年の7月11日にお生まれということ。

榎：そうそう。セブン・イレブンね。コンビニや、誕生日（笑）。

池上：私、実は同じ誕生日で。

榎：誰が！

池上：私です。勝手に親近感を感じてたんですけど（笑）。

江上：そうなんですか。私の兄も一緒なんです。

榎：ほんま。へえ。そんなことあるんや。

池上：それで、香川県の善通寺のお生まれなんですけども、この辺りってというのはだいたいどういう雰囲気のところですか。

榎：もうほんとに田舎でね。善通寺という町があって、そこはまあお寺さんいうんか、弘法大師が生まれたところで。大きいお寺があるんよ、五重の塔があったりなんかしてね。そのすぐ近くに自衛隊とかの、基地があって。昔の陸軍の、第11師団か何か知らんけど、そういうところで。裏側というか南側の方に金毘羅山いうて、船の神さんというのか、そういうのがあって。その間にある、ほんまに田舎で、何にもない、田んぼとか山とかそういうところで。学校も南部小学校いうてね、ほんとに山にある学校で。その時の思い出いうかな、やっぱり学校行っとったら面白いのは、山やったから、山で遊ぶとか。学校のすぐ裏が山やから、だから家庭科の時間とか、飯盒炊さんなんかかまどから作っていくわけ、山の中で。

池上：かまどそのものを作るんですか。

榎：だから1時間か2時間、家庭科の時間があったら、最初の週はかまどを作るところから始まってくわけ。それで、焚き木取ったりなんかして、そこで次の週にはかまど作って、次の週はカレーを作ったりとか、いろんなことを山でするわけ。そういうとこで、その辺の食材は、みんな農家やから持ってきたりなんかして、いろんなことやるんやけどね。

そしてまあ田舎やから、農繁期があるんや。春と秋に麦刈りと稲刈りとか。そういう時は1週間ぐらい学校休んで。「非農家」いうて農家やってないところは学校へ出て、自習とか、いろんな遊びとかして。僕らんとこは山やったから、木の上に登って本を読み合いっこしたりとか。そういう授業というか、遊びやなあ。それがいまだに面白かったなあと思って。遊び相手いうたら鳥とかね、その辺の動物とか、そんなのと遊んだ。掃除なんかでも、講堂なんかにいっぱいスズメが集まるとるわけ、僕らが昼間授業しとる間に。で、掃除の時間に行ったら、日向ぼっこみたいに、寒い時に、スズメがいっぱいその講堂の中におるわけ。僕らはまず入ったら、窓をばーっと閉めてしまうわけ。スズメがもう逃げようとするけども、窓閉められてしもて逃げられへんわけ。それを追っかけて捕まえたりとか、そんなんして遊んどったなあ。

池上：結構残酷そうですけども（笑）。

榎：そういう、ほんまに自然いうんか、僕らの子どもの時分は遊び道具もないし、探検に行ったり、山に行って、秋になったらキノコ採りに行ったりとか。カラスウリいうて、アケビみたいなのがあって、そんなの採りに行ったりとか。いろんな小鳥を捕まえる、「おとり」いうてね、そういう木の実を潰して接着剤みたいなそいうのを作ったりして。ほんま自然と遊んでた。そういう中で僕らは、もちろん戦争終わった後やから、昔の防空壕とか、昔の軍隊がおったから、そういう施設がいっぱいあるわけ、そういうとこへ探検に行ったりとかね。だから深い洞穴とか行って、コウモリを捕りに行くとか、そういう探検やったりとか。

池上：そういうものは結構いろいろ残ってた。

榎：残とったねえ。今はもう封鎖されてしもてね、入れなくなってるけど。そういうとこに自衛隊の基地みたいなのがあってね。自衛隊いうたら公務員やから、僕ら日曜日とかそんな休みの時を狙って、弾を（取りにいった）。本当は取りに行ったらあかんわけ。

池上：ですよねえ。

榎：危険いうことでね。それを僕らは友だちと潜り込んでね。弾が土の中へ埋まるとるわけ、弾頭とかそんなんが。それを取りに行ったりなんかして。僕ら小遣いとかそんなんもらえないから、そういう銅とか鉄とか、金属を種類分けに分解して、弾を鍋に入れてね、熱するわけ。そしたら鉛とか銅とかそいうのに分解できるわけ。それを僕らは鉄砲の弾とか弾頭やと分からないように潰して、よそへ売りに行くわけ。で、それを小遣いにしとった。そんで僕の好きな漫画の本とかを買う、小遣いにして。

池上：よくそんなのご存じでしたね、熱したら分かれるとか。

榎：それはやっぱり、僕らの遊びって、みんな兄貴がおるわけ、村に何人か。いつもリーダーみたいなのがおって、いろんな遊びを教えてくれるわけ。

江上：小学校ぐらいの時ですか。

榎：そう、もう小学時分から。まあ結構昔は兄弟が多かったから、兄貴とか、兄貴の近所の友だちなんか、そういういろんな遊びを教えてくれるわけ。だから山へ、小鳥を捕りに行くんでもね、そういう人がいろんなこと教えてくれる。トリモチみたいな作るわけ、自然のやつを。時期によっては川遊びとか、水遊びとか、魚を捕りに行くとか、カニを捕りに行くとか、そういう名人がおるわけ、その兄貴分にね。そういう人がみんな教えてくれた。で、僕らが高学年になったら、今度は下の子に、弟とか若い子に教えていく、そういうことを。だからいつも5人から10人ぐらいがぞろぞろとそんな遊びやってた。

池上：自然に学んでいくという感じですね。

榎：そうそう。

池上：何人兄弟でいらっやいましたっけ。

榎：僕んところは5人かな。だいたいその頃は5人とか7人とかね。

池上：榎さんは何番目？

榎：僕は上から3番目、4番目か。下に弟がいて。その間にも二人程おっらしいけど、戦争とかそんなで、ああいう時代やったから、亡くなったとか。そんなんは聞いたりしたことあるんだけど。

池上：お家はじゃあ農家をされていたんですか。

榎：農家やとったんやけどね、うちの親父がなんか、「農家イヤヤ」いうてね。

池上：そうですか（笑）。

榎：田んぼあったんやけど、なんか売ってしもてね。自分で、なんか豆腐屋みたいなのをやり始めてね。豆腐とか揚げとか、どう言ったらいいか、コンニャクみたいなんとか。

池上：お豆腐屋さんですね。

榎：うちの親父は、ところてんとか、そういうもん作るのが好きでね。だからそういう、甘酒とか麴とか、海藻をものすごく大量に仕入れて、夏になったらところてん作ったり羊羹作ったりして。もう田んぼは売ってしもて、そういうことやとったんだけど、戦争で、そういう機械類とか金属類を全部没収されたんや。供出というのか。それでも商売はできなくなってしまって、近くにある農事試験場いうてね、農林省の試験場へ勤めに行き出したらしいんやけどね。

戦争の時も軍隊がおったから、そこへ憲兵隊として軍隊の方へ手伝いに行っった。だから戦地には行っていないわけ。四国にも捕虜とかいて、徳島とかで、保護なのか捕まえとったのかどうか知らないけど、捕虜を収容してた。そういう施設の面倒みとって、それで戦争は免れたというのは聞いたな。だから最後に、戦争が激しくなると、日本がもう負けそうになった時、ほんともう終戦前に召集があったんかな。横浜の方に行っらしいんやけど。そこから沖縄とかあいうとこへ本当は行くはずだったんだけど、行く船がないんや。それで結局は行かずじまいで、戦争が終わってしまった。

池上：そういう中で終戦を迎えられた。

榎：そうらしい。そういう話を聞いたんやけどね。だからよっぽど、全滅するぐらいの覚悟でやっとなったような感じでね。だけでも物資もないし、行く船がないんや、戦いに行く。最後の方、むちゃくちゃな戦闘になってもうたんや。特攻隊とか行っても、帰りのガソリンがないとか、行くだけ行ってね。そんなひどい戦争しotta時代。そもそも負けるんは当然やと思うわ。後からそんなことを親父に聞いたりしたんだけど。そういう中で、戦争の時は、そういうところに勤めottaから、みんなは食べ物がないとか言いながらね、親父が軍隊の方からわりと食料を持って帰ってきよった。僕は赤ちゃんやから知らないんやけど、缶詰とか何かそういうのが配給されて、兄貴なんかはいいもん食べたらしい。だけどもあ周りは大変やった、というのは聞いたことあるけど。そういう時代で、戦争のこと知らないんだけど、結構そういうことをいろんな人が教えてくれるわけ。こういうことがあった、どこどこの人が亡くなった、どこどこで亡くなったとかいうて。

だから僕ら子どもの時は、やっぱりね、アメリカに仕返しをしようと思ottaわけ。それだけもうめちゃくちゃにされてね、こういう貧しい国になって、生活が大変で。大きくなったらみんな兵隊になるか警察になるかとか、なんか国のために役に立つような仕事をしよう。僕は小さい時から絵が好きで、漫画も好きやっだし、いっぱい描いottaんだけど、子ども時分によく学校からアンケートで、「大人になったら何になりたい」とかあるわけ。本当は僕、漫画家とか挿絵画家とか、そんなんになりたいんやけど、そんなの書かれへんの。というのは、みんなは、警察になるとか、軍隊に行くとか、やっぱり日本のためにといい感じで、職業なんかでも選んどotta時代やった。だから漫画家とかそんなの書かれへんの。だから、何かの運転手になりたいとか、船に乗りたいとか、そういうことしか書けなかつたんやけど。

池上：漫画家とか書くと、不真面目と思われる。

榎：不真面目。そんなのあかんねん。だからやっぱり国のため、みんなのために働くような仕事がいいというか。

池上：戦争が終わってからは、お父様はまた別な仕事をされたんですか。

榎：その公務員というのか、試験場の方へ行って。

池上：じゃあ、その続きというか。

榎：うん。うちの近くにその農事試験場があつて、大きい土地で山の半分ぐらいは国の持ち物やっだから。森林関係とか、動物とか家畜とか、田んぼの農作物とか果樹とか、そういういろんな分担があるんだけど。うちの親父は果樹部で、ミカンとかモモとかブドウとかそういうのを育てていく。だからそこへ時々遊びに行つてね、馬に乗つたり牛に乗つたり、豚に乗つたりして遊んどつたな。山の中で、ばーっとものすごい広いところで、豚の背中に乗って走りまわつたりとか、子どもはできるわけ。それで、家で飼つてもいいの。試験場で飼うんでなしに、「家で飼わないか？」いうて、子どもをもらえるわけ。それで豚なんかずーっと世話して、一年、二年とどんどんものすごい大きくなる。でもある日、大事に飼いよつた豚が亡くなつたんよ、病気がなんかで。そうしたら、一応うちで好きなようにしていいんだけど、試験場から、やっぱり研究のために、なぜ死んだかを調べに来るわけ。それで白衣着た人が5人ぐらい来てね、ばーっと解剖してね、なんで病気になつたか調べるわけ。まあ僕ら何年も飼つてたやつやからね、もう泣きながら見てて。病気調べてくれるんから、解剖したりなんかするのかわいそうやけど許して、見守つottaわけ。それはいいんやけど、終わった後ね、その豚をみんなで食べるんよ。

二人：(笑)。

榎：それでもうものすごく怒ってね。「大人ってもう、すごくひどい」って。そのおっさんらに石か泥みたいの投げつけて。「ヤメーッ！」言うてね。でもみんな一杯飲んでね、なんかやっとなるわけ。もう腹立って、腹立って。

池上：本当に研究に来たのかな(笑)。

榎：それから僕、肉食べられへんようになってもうてね。田舎のサラリーマンやから肉食べるっていっても、月に一回、月給日か何かの時にほんまに少し、100グラムかなんか買うてきてすき焼きにするとかやけど。あとは自分とこの鳥の肉とか。だから肉なんかあんまり食べたことないからね、みんな喜んで食べとるわけ、大人は。こっちはね、大事に育てて、病気で亡くなったから、もう泣きながら見守ってんのに、みんなでわいわい言いながら食べて。それで肉がもう食べられなくなってもうて。

池上：解剖の動機があやしいですね(笑)。

榎：そんなことあったなあ。

池上：そうでしたか。お母様はどういう方だったんですか。

榎：お母さんは、おとなしい人でね。畑に行ったり、田んぼして、よう仕事する人やったなあ。でも結構、口うるさいのな。親父はわりとニコニコしてね、ほんまに怒ることもないし、おとなしい。いろんなものができたら、近所の人に配ったりとか。珍しいもん作るんよ。さっき言ったように、あんまり田舎にないようなところてんとか、そんなん作って、近所に配ったりなんかして。だから結構うちはね、農家をやめて商売やとったから、納屋とかいろんな広いところがあるんだけど、日曜日とかは休みやし、普段何もやってないわけ。ただ、家で食べるぐらいの米とか野菜なんかは作ってるんだけど、そんなんも近所からもらったりとか、あげたりしながらやってた。だからあんまりお金はないんだけど、食べたりなんかするのは、僕らそんなに(苦労したと)思わなかったかなあ。

池上：自然環境が豊かで。

榎：うん、そういう中で、うちのお袋もそんなんやけど、ごっつう人がええいうのか。周りはみんな農家やねん。だから仕事の合間とかに話をしに来るんや、うちの家へ。いつも来とんの。朝はね、年いった、もう80とかそんなお婆さんが来てね、姑とか嫁の悪口を言いに来るんよ。そんで午後からは、そこの娘さんが姑の今度は悪口を言いに来るんよ。その聞き役ばかり、うちで。なんか子ども時分のそんなんが記憶にずっとあるなあ。

池上：でも慕われてた。

榎：うん、何か知らんけどね、いつも人が集まっとった。子どもなんかでも、うちへいっぱい集まってね。とにかくみんな言うんよ、「榎へ遊びに行け」いうてね。あそこは何もしてないから、みたいな感じで(笑)。

江上：うちは農作業やるからって。

榎：みんな忙しいからね、「榎のとこで遊んどけ」いうて。一日中、夏休みとか休みの時やったら、朝からいっ

つも十何人家の中でゴロゴロして。

池上：楽しいですねえ。

榎：そしてさっき言うた兄貴とかは、魚を捕まえたりとか鳥を捕まえたりがものすごく名人で。僕は後を引き継いだ時、何をするかいうたら、僕は絵が好きやったから、漫画の本読んだりとか、仲間で組み合わせて四コマ漫画を作ったりして。僕は探検とか冒険が好きで山へ。うちの近場は結構、いろんな遺跡とか古墳がいっぱいあるんよ。縄文時代とか、縄文時代より弥生の中期から後期ぐらいのものが、いっぱい山にボコボコあんの。それが昔、何でそんな大きい石をね、どうやって人間の力で石を運んでこんなの作ったんかなあと想着、不思議で不思議で、いつもそういうところを探検に行ったりして。山の方へ畑仕事に行ったら、畑の中にそういう古墳がぽんとあるわけ。で、昼飯とか、弁当持って行ってから、農作業の後にそこで、石室うんか、石棺の中やね、石を組んだ中で弁当食べたりなんかするわけ。そこが結構冬は暖かいしね、夏は涼しいんよ。

池上：古墳ってそう言いますよね。

榎：そうそう。そこでいつも昼休みに昼寝したり、弁当食べたりなんかしてね。何でこんな石を積んだんかなとか想像しながらね。で、いっぱい苔が生えとんの。古くて大きい石に苔がいっぱい生えてて、それが何とも言えん世界うんか。そこでいつも見る夢があってね。そこで寝たら必ず夢見るんよ、なんか不思議な夢をね。磁石みたいな感じの部屋がいつも出てきてね。神さんが磁石みたいな世界を作ってね、なんかじりじりする、そういう中で、水とか、石棺みたいな置いたところがあって、そこはいつも雨が落ちてくるの。そこに何とも不思議な窪みがあって、周りに苔とかそんなのがあってね。もう不思議な世界で。いつもそこで、そんな変な、不思議な世界の夢見たり。何の夢見たんかよう憶えてないんやけど。鳥居とか神社行ったら、手洗いがあるやん。水がいっぱいあって、手洗ったりうがいしたりとか。ああいう感じの、すごい世界があんの。じりじりした中に水がばーっといつも溢れとってね。何か不思議な世界で、いつも夢見んの。そこがまた楽しみでね。怖いんだけどね、その夢が。

池上：なんか神秘的ですね。

榎：何かそういうことあった。そういうのがね、今の作品につながってるのが結構多いの。そういう世界、何の世界か言えないんやけど、じりじりする、磁石が痺れるような、チクチクするような痺れがね。なんかそういうものがずっといまだに残ってる。それが何か言われへんし、どういう光景やったんか忘れたんやけど。

池上：原体験というか、原風景みたいな感じですか。

榎：そうそう。僕らは石棺なんかをね、このぐらいの石棺を見つけたこともあるの。子どもの時分で。僕らのいた学校で、小さな山やねん。海拔 100 メーターあるかな。もっとあるかも分からんけど。長さは 1 キロぐらいはあるんだけど、前方後円墳みたいな感じの山やねん。いつも僕らがチャンバラごっことかそんな遊びをやってるところに、砂山があってね。周りは木があるんだけどそこだけ砂山みたいになってて、いつもその上にピコッと、水が溜まってるんよ。ちっさい時は分からなかった、みんなも。「いつもこれ水があんなー」いうて、みんなで。ちょっと高学年になって、やっぱりみんな気になるから、「いっぺん掘ってみよう」いうことになってん。そしたら掘ったらね、石棺出てきてね。このぐらいの幅かな。1 メーター 70 か 60、ちょうど人が入るぐらいの。それでもちょっと小さめ。そこにね、くにゅっとした、このぐらいの大きさかな、ちょうど頭置くような感じで、首のへんがクッと曲がってるんや。ちょうど頭置くような感じになってるの。「ウー！！」言うてね。「何やる」て。校長先生はそなん好きやったんよ。うちの近くは、さっき言うたように、昔から

そういう古墳があったりして、ちょっと穴掘ったら磁器が出て。陶器が出てくるの、昔の。それを持っていったら、校長先生が好きでね、そんなん。褒めてくれるんよ。「どこで見つけた」いうから、先生連れて行って、「ここにあった」って。そこでまた調査やるんやけど。割れたやつでもいいわけ、校長先生暇やから。校長室で、セメダインかなんか知らんけど、接着剤で復元するんよ。そういうの知ったから、「あっ、これ、校長先生言うたら喜ぶかもわからん」いうて。

池上：大発見じゃないですか。

榎：うん。それで僕らが、陶器なんかは学校の資料室に「発見は榎忠」とかね、榎忠（えのきただし）になるとるわけ。どこどこで発見したいうて。そんで、僕らも喜んで。校長先生は、持ってったら褒めてくれてノートとか鉛筆くれるわけ。「また見つかったら言えよ」いうて。でもその石棺のことを言うた時はね、校長先生に、「先生、あれどこ行ったん？」言うたら、「あれは市のほうがね、持って帰ってしもうた」って。それで僕らの遊び場がもう封鎖されてしもてね、その辺掘ってしまう、いうてね。立ち入り禁止になって遊べなくなってしもたんや。「先生、あれどうなったん」言うたら、「いや、あれは市のほうへ行ってしもた」いうて、「そんなん、教えてくれなあかんやん」いうて。行ってみたらそれが校長先生の発見になるとるわけ。「先生、あかんわー！」って、「卑怯や」いうてね（笑）。

池上：手柄を取られちゃいましたね（笑）。

榎：発見者、日笠校長先生いうたけどね、いまだに名前憶えてるわ。

池上：豊かな環境で育っておられると思うんですけど、お絵かきはずっと好きで、その中で美術というものを意識されたことってというのは。

榎：ない。全然ない。

池上：漫画とかお絵かきと美術というのはまた別というか。

榎：そんな環境も全然なかったなあ。

池上：そういうものがあるっていうことも。

榎：知らない。油絵具も知らなかったもん。中学になってね、僕の先生が、彫刻のほうやっとならしいんやけど。速水史朗（1927—）っていう彫刻家で。

池上：ああ、はい。

榎：その人が、1年生の時やったかな、中学の担任になってね。その先生との出会いがおもしろかったんやけどね。先生はその頃、焼き物でお化けみたいの作ったりしてて。僕らの子どもの時分はもっと違った、彫刻らしい彫刻作ってたわけ。石膏で作ったりとか。で、僕が行った中学が、新しい校舎ができた時やったんや。合併してね、今まで行ってた学校と分かれて、新しい東中学校っていうのを作った。その時校舎に、クラブ活動とかのレリーフを作るいうて。高さ3メートルか4メートルで、横が10数メートルの大きいレリーフ。それを先生が担当してやっとならしたわけ。レリーフ作るのに、まず粘土で型を作って、野球とか柔道とかいろんなスポーツのクラブ活動を、いろんな形で立体的にやっていくわけ。レリーフやからまあ、半分ぐらいな感じやけ

ど。それをやるのに、寒い時に講堂でね、大きい板に粘土をひっ付けていくわけ、ずっと。野球やったらバット構えてたりとか投げてるとか、そんなんをずっと作っていく。それを何か月も手伝わされたの。寒い時にね、粘土練ってね。

学校でなぜそれをやらされるかいうたら、学校で悪いことしたらね、先生の言うこと聞かなかったり、宿題していかなかったり、学校で禁止されとることを隠れてやったりして見つかったりして、先生に怒られるやん。罰としてそれをやらせるねん。粘土練らされたりね。

池上：榎さん、じゃあ悪いことばかりしてたんですか（笑）。

榎：ようやとったんや。人がしたらいけないこととかな。弾拾いに行くんでも、したらいけないことやん。禁止されとるわけ。そんなん見つかるわけ。そんな時にそういうことを罰としてやらされるわけ。それも学校の授業終わってからやからね。そうすると、学校から帰るのが遅いんよ、やっぱり。いつもだいたい3時か4時に学校から帰るとんのに。その頃、家に帰ったらいつも子どもは手伝いがあんの、家の。洗いものするとか、用意せなあかんわけ。そういう仕事がいっぱいあるわけ、家帰っても。勉強よりかまず手伝いせなあかんの。それから勉強とかやって、食事になるいう感じやった。それがもう学校に残されとるからね、帰ってけえへんから怒られるわけ、「何しとったんや」いうて。で、「先生に怒られて手伝いしとる」って言われへんから、黙って「いや、ちょっと友だちと何とか」いうてごまかしたりするんやけど、それが続くからごつつう怒られてね。「先生に言いに行く」いうてね（笑）。先生はそんなこと知らんと手伝わしとったから。

池上：手伝っていたのは主に榎さんばかりだったんですか。

榎：そういう悪い友だちがね（笑）。ほかで悪いことやったやつとかね。

池上：悪ガキたちが（笑）。

榎：悪ガキたちが粘土こねたりね、やってるわけ。でも、僕はそういうの好きやったから、わりと苦にならんかったわけ。

江上：罰になってない（笑）。

榎：焼き物とかそんなのが専門的な先生やったから、大きい釜を作るいうてね、耐火煉瓦を作って。煉瓦から作っていくの。

江上、池上：へーえ！

榎：粘土とそれと組み合わせて、壺とか、大きい釜を作るわけ。そんなんやらされたりね。そんな時に、隣の中学の先生は、大久保先生かなんかいうて、大坪やったかな、油絵描いとる人でね。それで僕らの速水先生は彫刻で、市民会館みたいなところで展覧会やとるいうてね、その時初めてそれを見に行ったんかな。先生の彫刻はまあ学校に置いたりしててちょっとは見とってんけど、大きな作品は見たことなかったんよ。でも彫刻の方は、先生の見とったからあんまり衝撃なかったけど、油絵みたいのは初めてやったんや。

池上：隣の中学校の先生の油絵も一緒に展示されてて。

榎：二人展みたいなのやとったわけ。その頃は小さい町やから、そういうギャラリーとか、美術をやってる

ところなんて全然なかったし、あったとしても知らなかったわけ。ほんで、そんなんやっとならいうて初めて見に行ったらすごい絵やねん。50号か100号か知らんけどね、「こんな大きな絵があるんや」と思ってびっくりして。それで、「わー、絵ってこんな世界があるんやな」と思って。それからかな。

池上：その時に、美術というよりは絵っていう感じで。

榎：絵というか、美術と絵と、あまり別々にも思ってなかったし。そういうのがあるいうことを知らなかったもん。それで学校では教科書とかで、いろんな歴史的な、昔の有名な絵を見たりするんやけど、それはあんまり絵描きとかそういうのに結びつかなかったわけ、なかなか。

池上：そっちはお勉強という感じで。

榎：うん、勉強。

池上：一応美術の授業ってあったんですか。

榎：あったよ、もちろん。美術いうのも、2時間ぐらいあったのかなあ。それでまあそういうのを知って、どんどん。僕も一応美術クラブに入っとった。僕は結構クラブいっぱい入っとったんや。子どもの時分ねえ、小学2年の時に病氣してね。肋膜炎いう病氣でね。何の病氣かよう分からなかったんやけど、とにかくええもん食べて、動いたらあかんねん。

池上：いい病氣ですね（笑）。

榎：うん。だけどね、時々熱が出るの。40℃近い熱が出てね。ばーって寝汗いうんか、それで大変な時期もあったんやけど。そういうので、調べたら肋膜炎いうて、その頃は不治の病で、治らないって。それで1年間ぐらいは学校へほとんど行ってなかった。友だちがいろんな勉強のことを伝えに来てくれたり、その頃給食が開始した頃やったんかな、パンなんか持ってきてくれたり。そんなんがあって、病氣が一応治って、3、4年ぐらいから学校に行き出したんかな。でも行ったら、体操もできないわけ。だからみんなの、体操服の番やねん。みんなの服なんかを置いて、そこで風で飛ばないようにとか留守番するぐらいで、体操できなかった。何もできなかった。

それで、一応中学入ってから元気になったんかな。元気は元気なんよ。でも止められとるんよ、医者から。学校に言われてた、急にきついこととか、そんなんはやらしたらあかんって。でも中学入って、一応そういうことも解禁になったんや、体操とか。それでクラブにいっぱい入ったんや。水泳部入る、卓球部入る、珠算部入る、美術部入るね。それでもう思いっきりやった。

池上：忙しいですね。

榎：忙しい、もう。僕は小さい時からものすごい元気やったんや。アホなこと言うて人を笑わしたりね、勉強いうてもあんまりでけへんしね。だけど結構友だちはいた。だいたい学校って三つぐらいに分かれるんよ。勉強できる子と、勉強できない子と、何にもできない、どっちにもつかなくてジーンととる子と、三つぐらいに分かれるの。僕は結構暴れん坊で、勉強もできるわけでもないし、できないわけでもないんやけど、だから、先生に怒られてしたら勉強できるぐらいの感じやったんかな。だから自分でもいつも、「本当の僕って何かな」と思いながら。まあ賢い子と賢くない子と、悪い奴とに分かれるわけ。悪い奴も僕を誘いにくるわけ、「一緒に遊ぼう」というて。「おまえがおったらおもしろいから」という感じで。そういう賢いクラスの連中も僕を誘いに

くるわけ、「一緒に面白い遊びつくってくれへんか」とか。文化祭とかあれば、「こんなんやりたいんやけど考えてくれへんか」とか。僕は絵を描くんが得意やったから、年表とかね、そういういろんな絵を描いたりして、歴史的な絵とか、そんなの描いたりするんが得意やったし、好きやったんよ。だからみんなも「榎、やるうや」いうて一緒に来てくれるわけ。だから僕はいつもね、小さい時から、本当にどっちなあいうて。そういうとこで、ものすごく自分はいいい加減ていうのか、中途半端でね。悪くもないし、ええこともないしね。なんかそういうとこでいつも宙ぶらりんみたいなのとこにおって、何かなあ、いうのがずっとどっかにあって。そういうように過ごしたったんかな。遊びにしたって、勉強にしたって。

池上：美術部というのは当時何をされてたんですか。

榎：何しとったんかなあ。(笑)

池上：顧問は速水史朗先生ですね。

榎：もちろんそう。あまり記憶ないなあ。あまり憶えてないのは、行かなかったからね。僕ら田舎の方の小学校と、町の小学校とか、なんぼかの学校が集まって中学になってるわけ。僕らは南部いうんやけど、中央とか、東部とか西部とかの小学校が集まって、そこの中学校に来るわけ。で、中央いうんは町のヤツやねん。町のヤツいうたらおかしいけど(笑)。そしたらやっぱりね、油絵具持っとるやつが多いんよ。

江上 へー、中学生で？

榎：中学生で。うちなんて言うたって怒られるぐらいで、買ってもくれないし、言えないしね。へーと思って。絵具なんかでもね、ちゃんと水彩の絵具を持ってるやつもおるし。そんなものなかなか買ってくれとも言えないような時代やった。だからあんまり行ってなかった。何しに行とったんかな。美術部に籍は置いとったんやけどなあ。行ったんがあんまり記憶にない。一人ね、すごく賢いやつで大久保いうてね。親父が警察とか自衛隊に剣道教えに行っててね、その辺ですごい強い人やねん。そこの息子が大久保いうて、勉強もようできるの。そいつが美術部やねん。そいつがおったから余計やらなかったんかもわからん。そいつが油絵具持とんや。そんで、いろいろ話が飛ぶけど、僕も美術の高校みたいのに行きたくて、普通の高校は行きたくなかったわけ。でも、もうみんな就職やねん。その頃は半分ぐらいは就職やね。

池上：皆さん、地元で就職されるんですか。

榎：まあ県外行ったりとか、その頃はよっぽどできる子とかそんなんじゃなかったら進学しなかった。ほとんどは集団就職で。

池上：そういう時代ですよ。

榎：で、長男とかそんなんは残って、学校へ行く子とかもおるんやけど。うちみたいに三男とか四男いうたら、みなどっか行ってしまふ。で、少し金があるところは、高校行ったり。大学なんてとんでもない、いう感じやな。それで僕も高松工芸(香川県立高松工芸高等学校)いうて、普通の高校ではないんやけど、そういう工芸学校みたいなのがあって、そこ行きたかったんやけど、やっぱりそこはクラスに5番以内にいなかったら通らないようなところやったわけ。

池上：結構難しかったんですね。

榎：難しかったんや。僕も頑張れば行けるいうんは、速水先生にもね、「おまえは勉強したらできるんけど、せんだけや」言われて、「したら行けるんやから、頑張ってみるか」って。「いや、僕は頑張るんは嫌や」いうて。その大久保いうのが行くからね（笑）。あいつはクラスでも級長とか、委員になったりなんかする。あいつは通ると思うとった。だから「あいつがおるんなら行かん」いう感じで。本当は行きたかったんやけどね。頑張っ  
て行こうかな、という感じもあったんやけど。

池上：「行きたい」と言えば行かせてくれる感じではあったんですか。

榎：ない。うちはそういうお金はなかった。うちの兄貴は、勉強いうんかそんなの好きで、高校の時分から自分でバイトしながら高松の方へ行って、英語が達者やったん。それでバイトで、高松に栗林公園いうのがあるんやけど、そこに外国の人が来たら通訳で案内するとか、そういうのをしながら大学入ったわけ。親戚から学費を半分送ってもらったり、そういう感じで。僕はそんなに勉強できないからそういうことも言えないし。で、僕は神戸の方に行った。会社をやってる親戚がいて。そこから仕送りなんかしてくれよったわけ、兄貴なんかは。でも僕はそれほど学校行って勉強するのは何もなかったし。

池上：ちょっと高松工芸高校も行きたいなっていうのは。

榎：あったんよ。だけど行かんと決めたのは大久保が行ったから（笑）。

池上：親御さんに遠慮されたわけじゃないんですか。

榎：遠慮というか、もう分かってんの、うちは大変やって。絵具にしたってね、「買うてくれ」言うたら、無理言うたら買うてくれるかも分からんけど、そんなん言えるような状態ちゃうから。うちが貧乏いうの知らなかったわけ。みんなが貧乏やったんで、その時代。ただそういう判断して、周りがそんなんやから、友だちとか見て、「ああうちはお金ないんやな」とか、「こういう無理なこと言うたらあかん」とか。親が働いてるのもね、なんであれだけがむしゃらに働くんかなあと思うたら、やっぱり子ども多いから食べさせていかなあかんやん？　そういうところあるやん？　子どもの時分は分からんけど、何となく「うちはこんなんやなあ」と思て。だから貧乏やからいうて、そんな意識はなかったな。ただ親に無理なこと言えない、いうのは分かっとった。そういうので、悶々しながら。

池上：それで卒業されて、神戸に出て来られるのが、16歳。1960年。

榎：15の終わりやったかなあ。その時、まあ親戚の会社やし、絵の勉強したいんやったら働きながらでも、都会というか、神戸やったらできるから、いうて。

池上：親戚の方から声をかけてくださった。

榎：そうそう。神戸の会社ではデザインやってる人もいるから、その人に付いて習いながら、もし時間があれば、行く気があるんやったらそういう学校へ習いに行ってもいいんちゃうか、ということで。先生も、「それやったら実体験や社会の勉強もできるし、そういうのがいいんちゃうか」いうて。「べつに無理して工芸学校行かんでもええんちゃうか」って。「じゃあそうするわ」、ということで。

池上：神戸に出てこられて、最初はどこに住まわれたんですか。

榎:そこの親戚のうちに、居候したわけ。そこの会社やってるから。結構最初はよかったんよ。小さな会社やったけど200人ぐらい使ってた。

池上:決して小さくはないですよ。

榎:もう朝晩送り迎え、社長はね。で、僕も社長と一緒に(笑)。迎えに来るんよ、車が。それに乗って出勤(笑)。

池上:ついでだから。

榎:そんな感じがね、半年も続かなかったかな。

池上:その会社はなんていう会社だったんですか。名前といただけますか。

榎:会社の名前はね、「松葉工業」やったかな、何かそんなん。須磨の方にあったんよ。鷹取駅の近くやけどね。

池上:社長と一緒に出勤されて、そこでは何をしてたんですか。

榎:うちの会社は、ケミカルシューズいうてね、ゴムの靴なんかの輸出もんをずっとやとったわけ。それで従業員とか下請けとか入れたらかなりの仕事やとったわけ。

池上:まさに神戸の地場産業ですね。

榎:そうそう。それでその靴のデザインとか。

池上:それでデザインが関わってくるんですね。

榎:そう。僕はデザインって何のことかよう分からなかったんやけど、いろんな靴の絵を描いたりとか。おもしろい靴とか。ほとんど最初は靴のサンプルとか、そんなの作るのに絵を描いたり。絵は描くの得意やったから、結構、デザインの先生より俺の方が、見た目にはちゃんと描けるような感じやった。そしたら発表会とか、そんな時にイラストみたいの載せたりとか、そういうの添えるやとったかな。そしてデザインは、ただ絵を描くだけでなしに、それを分解して、組んで、いろんな型をとって、それを組んだりとか、縫っていったりとか、貼りつけたりとか、型取りしたりして、そんなん全部やってくわけ。

仕事は面白かったなあ。それはよかったんだけど。ちょうどその頃、60年安保が何かでアイゼンハワーが来るいうて、その時ものすごい反対が何かあって。その時、うちの貿易関係のが、それに関わったのか何か分からないんだけど、貿易がストップしてしまったの。それで、今まで作ったやつとか全部出荷できなかったのかどうか知らんけどね、そんな状態。それで、まあ言うたら倒産いうんか。

池上:そうですか。

榎:その時、弟が専務やとったんやけど、その人がちょっとええ加減にやとったところが後で分かったんやけどね。まあそういう状態になって。それで大変な世界を見てしまったわけや。

池上:ちょっと16歳の少年には厳しいですね。

榎：うん。もうあの時に何億の負債いうんか。そしたらもういろんな下請けから、うちの会社だけでなしにいろんなところがあるから、取り立てすごいよ。もうヤクザとかそんな。それで僕は家へ帰ったって——社長はもう裁判終わるまで家へ帰って来れないから、秘密のホテルかどこかに泊ってるんだけど——その間は僕がこの家族を見て。子どもが小さかったんよ、社長の子どもが。まだ小学校とか幼稚園の子やったし。寝たきりのお母さんがおって、その人を社長の奥さんが面倒みたりしよったから。もう、怖いのはいっぱい来るんよ。家まで来るんよ、会社だけでなしに。だから戸締りして、雨戸閉めて、何かあったらすぐ近くの交番所へ。家にも入ってくるんは入ってくるんやけど、暴力とか、なんかそれ以上のことをしたら警察に連絡するようにして、それが僕の係になって。それがずっと続くし。電話の音でもうびくっとしたり、ものすごく怖い世界。会社もたまに様子見に行ったりなんかしたら、来るんや、やっぱりそういう人が。オートバイとかで乗りつけてきてね。もうこんなね、事務のいろんな書類をめちゃくちゃにして。ボンボンって上がってきてね。映画みたいや、もう。グワーンって。

池上：怖いですねえ。

榎：それでもっと怖かったのはね、人間が信じられなくなった。今まで調子のいい時は、会社、下請けとかそういうとこと、みんな社長と一緒に毎晩ぐらい飲みに行くぐらいね、親戚以上の付き合いみたいのしとるわけよ。いろんなもん持ってきてくれたり、いろんな面倒みてくれたり。でもそうなったらパーンと分かれてしまうの。そんな人が鬼みたいになってしまう。信じられへん。あんなようしてくれた人がなんでかな、いうぐらいね。そらみんな生活があるから。そこにもやっぱり家族とか従業員がおるから。

池上：取り立てないと、今度は自分がね。

榎：そうそう。そういうものすごい怖い世界やったなあ。それでもう人間とか大人とか社会とかお金とか、そういうものがものすごい嫌になったんやな。それでそういうことが長いこと続いて、1年後くらいに一応裁判で、そういう借金の払い方とかそんなのがみんな決まったんやろね。だからまた再開せないうことで、社長は今まで車の送り迎えとかそんな感じで会社やってたのに、その人がまた会社を立ち上げて。これから借金返さなあかんから。それにはもういっぺん会社立て直す。で、その時は、ケミカルシューズ、靴の方は止めて、工業用の新しい仕事、その社長も関わったことない新しい仕事やるいうて。やっぱり神戸は、ゴムとかそういうのがわりと入りやすい。原料として入ってくるいうのがあったし。その頃時代はちょっと変わりだして、合成ゴムとかパッキン類とか、そういうものが入り出したわけ、合成樹脂とかプラスチックとかね。そういう中で、靴は、神戸にこれだけたくさんあるしね、無理やと見切ったんかな、新しいことをやっていくいうて。それがたまたま、社長の昔からの知り合いでそういう関係の人がおったわけ。それでその仕事始めるのにやり始めたわけ。その社長の姿が、今まで蝶ネクタイして、料亭行ったり、お客さん来ているんなところへ連れまわしたりしとったんが、ほんまに泥だらけになってね、真っ黒になって働くんや。この人、ほんまに仕事とか会社とか好きなんやなあ思て。この人とやったら一緒にまた、もういっぺんやってもいいかなと思て。

このあいだ、機械なんか拾ってきてやったやん？（注：2011年の榎個展「榎忠展 美術館を野生化する」2011年10月12日—11月27日、兵庫県立美術館）あんな泥だらけの機械を安く買ってね、それを錆から落として。機械、動かないんよ。それを修繕して、きれいにして、動けるような機械にして、仕事し始めたわけ。そういうところから僕らずっと手伝って行って。その人やったら、どれだけいろいろあってもやってけるというか。で、徐々に、機械1台とか2台とか、新しい機械入れたりしてやってくんやけど。その頃は新しい仕事やったから、仕事もいっぱい来出したわけ。それも最初はよその仕事の下請けみたいな感じでやりよったわけ。大きい会社やから、元請けのところは小さいことできないわけ。そういう実験的なことや、難しい仕事はうちへ来るわけ。だから初めての仕事ばかりがくるわけ。その時、向こうの技術者が来て教えてくれたりするんや

けど。だからもう毎晩徹夜とかね。その頃まだ市電があったんや、神戸に。もうギリギリまで仕事やって、バツと飛んで帰って、また朝早くから来るんやけどね。もうそんなのずっと繰り返し。

その時、仕事は新しい仕事ばかりやし、次々仕事が変わって。自分で作ってく仕事やから、自分が考えたりいうんでなしに、図面が来たりして、今度こういうのやってくれいうて、それを型を作って。元からやるわけ。金属から掘り起こしてやる。そういうところからやっていくから、できた品物も見れるしね。だからその辺のね、仕事をやったうれしさいうんか、楽しみとかいうのは、自分がやっただけいいところも悪いところも、実際現れて見えてくるから、そういう楽しみがあったから、仕事も面白かったんだけど。

だけど毎晩（仕事）。月に1回休みがあるかどうか、最初は月に2回ぐらい、日曜日が休みやったけど、それもなくなるような感じ。毎晩遅いわけ。だんだんそれが3年とかそんなになってきよったら。なんでね、こんな一所懸命働いて、まあたしかに給料もらえるけど、それも親戚に全部渡して。まあ貯金してくれてるんやと思うんやけど。小遣いもろて、映画が好きやったから映画行ったりするんやけど。なんかどっか自分の気持ちいうんか、「ほんとに働いて何かな」とかね。子どもの時分、勉強しとる時もそうやった。何のために勉強しとるんか。結果も何も見えないし。見えたって、テストの結果だけやん。そんなんで、「勉強して何かな」とかそういうとこで。仕事もそう。何のために仕事してるん。給料もらうだけでね。何かなと思て。小遣いもろうて、ただそれだけかなと思て。なんかそれがおかしいなあと思て。なんか中途半端いうんか。

それで、機械とかオートバイみたいなのが好きで、友だちなんかも乗とったし、その時オートバイにはまっていたというか。休みとか夜にパーッと、カミナリ族いうんか、音出して飛ばしまくったわけ。

池上：六甲山の方とか行かれるんですか。

榎：六甲行ってね、知らん人と。下に集まって来るとこあんの。須磨とか須磨浦公園とか、そういうとこに。どこの誰か分からんやつがね、ヘルメットかぶって、覆面みたいなのしとんのがいつも集まって来るの。そこに僕らも、知らんもん同士ばかりが集まって、いろんな競争するの。今度どこに行こうとかね。六甲もそう。六甲の摩耶山とかに集まって、再度山の麓とか。そういうやつと競争しようとか。何分で上がって降りてくるかとか、賭けをやるわけ。これがもう命懸けのレースでね。別にお金賭けてるとかそんなんちゃう。そういうので、命懸けた遊びみたいのやとったな。今みたいに道路はアスファルトじゃないから、砂道やねん、山なんか。ごっつうクニャクニャ曲がってるやん、六甲山なんか。だからドーッと滑るんよ、ドーッとズズッって。変なとこで滑ったらもう谷やん。今みたいに柵とかないから。そういうスリルを味わってたんかな。自分でケガするとか、そういうのはようあったけど。

池上：バイクはお給料で買われたんですか。

榎：うん。買ったやつもあるし、もらったやつとか、そんなんでやってたかな。会社のオートバイもあったわけ。それでまあ通勤してたんやけど。そういう時代に、オートバイで、何か悶々した（ものを晴らそうとしていた）…… まあ言うたら無茶するんや、僕は。そういうのやり出したら。三宮センター街でもね、みんな買い物とかで人がいっぱいおるやん。今みたいに広うなかったんよ、センター街。で、今はスポーツセンターか何かになっとんかな、突き当たりが。そこまで人がいっぱいいたの、ぎっしり。その時もオートバイでね、みんなが買い物とかでセンター街にいっぱいなのを、オートバイで飛ばしていくの。ワーって。

江上・池上：危な〜い。

榎：みんなまさかね、こんなとこオートバイ入ってくると思わへんやん。安心してそういうとこ行くとるやん。だから「安心してな」ということ伝えたかったわけ。腹立つの、僕、ああいうの。もういつ何が起るかわからんのに、悠々と買い物したり、ダベってね。そういうのをバツと行って脅してやろうとかね、どっかにそう

いう気持ちがあったんやと思う。そういういたずらとか悪いことしよったな。

池上：捕まって怒られたりは？

榎：捕まったこともあったよ。それがよう分かったんはね、長田の方の山へオートバイで行った時ね、ドーンと、さっき言うた砂道でこけたんよ。こけた時、足が挟まって、オートバイは重たいから、起こされへんわけ。その時、娘さんとおばさん、お母さんと思うんやけど、ちょうど下りてきて。助けてもらおうと思たんやけど、その人ら知っとったわけ、僕がむちゃくちゃ走っとったいの。だから助けてくれないの（笑）。

池上：「あの無茶ばかりしてる子や」と。

榎：それでもう、これは自分でやったことやから人に頼んだらあかんと思て。僕はその時助けを呼ばなかったんや。見たら分かるやん、オートバイひっくり返るとるの。助けてとも起こしてとも言わなかったわけ。その時に、こんなことしとったらこういうバチが当たるいうたらおかしいけど、ああそうやなあ、と自分でも思て。足はどうなってもええと思て引きずり出して。とにかく帰らなあかんから。その時に、「ああ、こんなことしとったらこういうことになるんやな」と思て。自分がケガするのに、懲りずにまだガンガン乗っとったんやから。

ある日、そういう時に、おじいさんををはねて。はねたというか、僕の風圧を怖がって自分でひっくり返ったんやけどね。長田の尻池いうところから、川崎重工へ向かう坂道があるんの。そこは下る時に、スピードがよくなるよ。バーッと尻池を上がっていったらスピード出るから、ドーンと行って。ちょっと雨が降っとったんだけど、その時、夕方頃やったんか、ちょっと薄暗い時やった。ちらっと黒いこうもり傘を差した人が見えたんや。その時ドーンとその人がひっくり返ったのが分かったし、僕も反射的にオートバイを切った。その時は100キロ近く出とったんかな。それで飛ばされて。僕もドーンと、一回目に地面に落ちた時はどっかにメガネが飛んでいった。スローモーションみたいや。ワーンて飛んでいってね。その一回目はドーンとメガネが飛んでいって、ちょっと起き上がろうとしても起きられへんで、ズーツと滑ってきよる、僕はボーンと流されていきよるわけ。オートバイだけドーンとひとりで走っていきよるわけ。その時顔がダーンとやられてしまっ

て。それでそのおじいさんどうなったかなと思て振り返ったら、後ろの方に白いのが見えとるから、僕も右半分やられとったけど、そこまで走って。雨降って、そのおじいさんは白いワイシャツ着とったの。何月頃やったかなあ、5月か6月頃。そしたらもう血の海。雨と白いワイシャツやから。「ウォーッ」いうてゆすって、全然、ガクーンなってしもうて。「うわー死んだ」と思て。その間に人が集まって来て、その人らが、たまたま走ってたパトカーを止めて、とにかく病院へ運んだ。僕は死んだと思て、どうしようかも分からへんで。とにかく警察にだいたい状況を話して、僕もたぶん病院にパトカーで行ったんやと思う。

そして、おじいさんを運んだ1時間か2時間後に、もっと後やったんかな、行った時に、いっぱいおじいさんの家族が集まっててね。お孫さんとか子どもさんとかばーっとみんな泣いてるわけ。その時、そのおじいさんが退職やったんや。誕生日で、会社の川崎重工の定年退職で、田舎で娘さんや孫が集まってお祝いで、ケーキか何かごちそう作って待とったんや。今みたいに電話がない時代やから、垂水の方の交番所から警察がそこへ行って、おじいさんが神戸で事故起こして入院しとるということ聞いて、みんな家族が来て泣いてるわけ。そういうとこへ僕が行ったわけ。もうどうしていいか分からなくなってしまっ

て。まあその人は案外軽かったの。自分でこけて、頭打って、脳しんとう起こして意識がなかったいうんか。だからグッタリして、全然ウンともスンとも言わなかった。僕は、死んだと思とったから。で、僕の方がひどくて、1か月ぐらい入院しとったんかな。おじいさんは2日か3日ぐらいで帰ったらしい。2、3針縫うかたかなんかで。僕は1か月ぐらい入院して、よくなってからそのおじいさんとこへ訪ねて行って。謝りに行って。それで、いろいろ話した。

その人はわりと温厚なひとで。僕はまだ19か、20歳になる前やったかな。話したら、「そら好きなことやるんはいいからな、エネルギーが有り余っとんやろう」って。「だけどやっぱり人に迷惑かけたらあかん」いうてな、何するのでもいいから。「ほかに何か好きなことないんか、映画とか、そういう趣味ないんか」って。で、「小さい時は漫画とか絵が好きやった」って言うたら、「そんならなんでその好きなことやらへんの」って。僕もその時ふと「なんでかな」と思うて。なんでそんなにオートバイにはまったんか分からなかったんやけど。絵をするために行ったのに、どこか変なところで、大人の世界というのか、社会というのか、会社にいるうちに、なんか知らん間に絵のこと忘れとったんやなあ。なんかそういうので気がつかなかったんか。その人に言われてから、「ああそうやな」と思うて。で、そのおじいさんにいろいろお礼を言って、謝って。

それから、どうやってそういうのを始めたらいいんか分からなかったんやけど、その時もまだ親戚の家はずっと居候しとったわけ。そこへ、毎月お寺さんが来るわけ。命日かなんか知らんけど、月に一回か、何か月に一回来て、お祈りしていつも帰るんよ。その人が、たまたま僕が絵が好きやうのを聞いて、話し出したんかな。家の人が、絵の勉強についてその人に聞いて。その人は絵描きさんやってね。絵描きになりたかったわけ。親父が死んで後を継がなあかんようになって、嫌々やってる坊主やったんや（笑）。その人がすごい面白いというか、不思議な人でね。日本美術院で日本画やってる人で、すごい絵がうまいの。デッサンでもすごいデッサンするしね。

それからかな、「描いた絵とかあれば持って来い」って。その人が来るのはだいたい決まってるから、いつ来て分かったら、僕がその辺でデッサンしたのとか、ちょっと絵を描いたやつを置いておいたら、その人が巻紙にダーッと批評を書いてくれてるわけ。この絵はこう、この色の使い方はどう、だけどなんとか、っているんなこと書いてくれとるわけ。これはモノを見て、写真を見たりして書いた絵や、それはダメや、いうて。実際の、本物を見て描かなあかん、いうて。そういうところから、一から、ものを見るということから勉強せなあかんいうて。で、「うちへ来い」いうて、お寺さんへ。「描いたものを持って来い」いうて、おる時に。その時は給料もらってるから、その時初めて油絵具を買って。もうドキドキしながら、今でも覚えとるけど、日本額縁っていうところへ買いに行ったんよ。何を買っていいんか分からへん。だけどセットを買って。それでちょこちょこ、その辺の船を描いたりとか、家の中にあるものを描いとったんやけど。風景でも、写真見たり、いい写真を見て描いとったんやけど、さっき言ったように、描いて持って行ったら、「これは写真見て描いとるからダメや」とかいうてね。そんなのを何回か繰り返して。

そこの家がまたすごいとこでね。ポロポロのお寺やねん。お寺いうても普通の家の大きいとこでね。そこに仏さんとかあって。檀家の人があるから、家は広いんよ。障子なんてポロポロで、穴が空いて、猫が、捨て猫がいっぱい来るんや。またそんな人やから、猫をほかしに来るんよ、そのお寺へ。だから猫が、話しとる間でもいっぱい来てね、もうウロウロしとるわけ。障子の穴から出てきたり。

畳でもね、きつない畳や。これはね、普通の人や檀家さんが来たら、「この畳汚れとる」って言うわけよ、「きたない」とか。「お寺やったらもっときれいにせなあかん」って言われるんやけど、「でも私にはこれが全部模様に見えるんや」いうて。だから汚いとかそんなの、今までのものの見方であって、私なんかこの模様がなぜこうなったんか、こういう模様はなぜついたんか、そういうとこがあって素晴らしいと思う、いうて（笑）。ああ面白い言い方もあるなと思てね。

さっきの猫でもね、入ってくるけどね、「穴があるから入ってくるのであって、あれをふさいどいたら入ってけえへん」いうて。「それでいいのか」って。「もっと猫のこと考えてやらなあかん」とか、ものすごい発想が面白いんや、とにかく。時々、いろんな檀家さんが来て、お酒なんか仏さんの飲んどるわけ、いっぱい、一升瓶で。普段その人お酒飲まないんだけど、僕が行ったら飲ましてくれるわけ。コップにボーン持って来てね。私は酒飲まんやけど。僕もあまり飲まないからいうことで。オートバイで行とったんかな、オートバイで行ってるからあまり飲まない。でもちょっとぐらいは。その頃は少々酒飲んだってどうっちゅうことなかったんや。僕もコップに半分入れてもうたりして。僕は「弱いから」いうてちょっと飲んで。お酒なんか、僕は弱いと思うから飲まんけど、水みたいに飲むの、その人。カブーって。何杯も。「お酒やと思うから酔うんであって、お酒と思わなかったら酔わへん」って。そんな感じの人やねん。

池上：すごい面白い人ですね。

榎：すごい面白いの（笑）。そんなのがずっと続いてね。太山寺（たいさんじ）いうてね、古い寺がこの近くにあるんよ。原生林があってね。「そこへよくスケッチに行くから、今度一緒に行くか」いうて。「ほな一緒に連れていってください」って。時間待ち合わせしてね。僕はオートバイで行くわけよ。その人、長田から歩いてくんの。ゲタ履いて。すごいよ。

池上：すごいですね。何時間かかるんでしょうね。

榎：何時間かかるんか知らんけど、時間までには来るわけ。檀家回るんで普段から歩き慣れとるのは分かてるけど。ゲタ履いてね。寒い時でも足袋はかないしね。その人の言い方一日聞いとったら、もう信じられんような、もう仙人みたいな感じ。で、そこの原生林ですっとスケッチとか、ものの見方とか、根気とかね。どういふふうに見つめるとか、なぜ見つめるのかということとか、いろんなことを。小さい虫を描くのもね、虫の生活とかそんなのを想像して描くとかね。木の枝はなんでこういうような感じになったとか、そこまで深く見なあかん、いうて。それを想像しながら描かなあかん、いうて。そしたらその木が生きた木になるいうて。なんかそういう教え方かな。

池上：それが、初めて本格的に絵を描く勉強というか、勉強じゃないですけど。それが初めてですかね。

榎：うん、それはまあ、絵の勉強かどうか知らんけど、その人がすごいからね。それでその人に聞いたのが、街にそういう研究所があるはずや、いうて。街へ行ったらギャラリーみたいな展覧会やってるところがあるから、そういうところも見たほうがええいうて。

池上：普通のお絵かきの勉強とは全然違いますよね。もっと本質的というか。

榎：人間性いうんか、ものの見方、根性みたいなもんね。で、手を動かす。ただ思うだけじゃなくて、動かす。

池上：ただのテクニックとちょっと違うことを教えてくれたんですね。

榎：それはすごく、しこまれた。

池上：それで街のギャラリーに。

榎：ギャラリーを最初見たのが、大丸の前に末積画廊ってあったんよ。画廊というか、額縁屋やけど、ほんとに幅が狭いギャラリーがあったわけ。そこに初めて行った時にけったいな絵があって。縄使ったり、絵具のチューブの蓋とか、その辺のビールの栓に描いたようなやつとか、変なんがあるわけ。これ展覧会かなと思って。額縁屋の横やし、「画廊」って書いてるし、展覧会やなと思って。そんな中にへんなおっさんがおるわけよ。その人は高橋ノブオいうて、ニコヨン画家で暴れん坊の絵描きやったんや（注：ニコヨンとは、日雇い労働者の意。1949年に日雇い労働者の日給が240円に定められたことに由来する）。そなん知らんから、「わー、これも絵かな」と思って。それでそのおっさんと話しよったら、ものすごいおっさんでね。汚ったない袋の中からいっぱい、食べもんは出てくるわ、絵具は出てくるわで。いつもリュック持ってね、中身がいっぱい出てくんの。それで、研究所なら美専堂というのが加納町にあるから、そこへ行ったら、二紀会の人とか、年寄りが絵を教えるとか、デッサンとか人体デッサンとかそういうのがあるんちゃうか、いうて。

池上：その高橋ノブオさんという人が教えてくれた。

榎：教えてくれた。そういうところへ行ったらデッサンの勉強できるからって。それで訪ねて行ったのが美専堂の2階、3階やったかな。寒い時やったから、モデルさん寒いから、もう薪ストーブに薪をくべて、暖房して、そこでヌードデッサンしとったのかな。それで行った時に、二紀会ってあるんやけど、その青木一夫(1907—1978) いう先生にデッサンを教えてもらった。その人のデッサンは、もうほんまにアカデミックというんか、ものすごく素直で、的確ないうんか。ちゃんとていねいに教えてくれるし。

池上：じゃあ今度は技術的な勉強というか。

榎：うん、デッサンの、絵の描き方みたいなのをね。木炭の使い方とか鉛筆から。

池上：お坊さんのほうは、なんか心構えみたいなことを教えられて。

榎：そうそう。デッサンは、結構その時も10人が15人ぐらい、ほかにも習いに来てる人もいて、それでやってたんだけど、なんかねえ、なんかおもしろくないねん(笑)。たしかに自分でも分かるんよ。うまく描ける描き方というのがあってね、あれも。こういうところに置いて、反対の斜めの線を入れるとか。そういう、理屈というたらおかしいけど、うまくなってるのかわからないけど、そういう描き方したらうまく見えるんよ、立体的に。筋肉とかそういうのも。なんかそういうので描いとったら、たしかに自分でも「ああ、うまく描けてるな」いうのが分かるし。

池上：上達はしていくわけですね。

榎：他の人を見たら、なかなかうまくならない人もおるし、うまくなる人はうまいんよ。なんかそういう人もおるし。時々、なかにすこいやつが来るわけよ。ものすごくうまいやつが来んの。六三(ろくさん)、山本六三(1940—2001) いうて。

江上：ああ、六三(むつみ) さん。

榎：あいつはうまかった。こうやって髪長うして、黒い服着てな、黙々と。ものすごく速いの。僕らがイーゼルでやってるとちがう。シャーッと、こう、すごい。

池上：結果が断然うまいんですか。

榎：僕らがやってるデッサンと違うの。その人はデッサンを習いに来るのでなしに、自分の手をならしに来るいうか、勉強しに来るいうのか。勉強いうたって僕らが勉強するのと違う。そういう感覚をつかむために。裸婦とか、そういうモデルさんってなかなか(見つけるのが) 難しいやん。それで来てたんやと思う。その人なんかと、帰りに飲みに行ったりしたんだけど、うまい人はおるわけ。そうしとるうちに若い子が、松井憲作(1947—) いうのが入ってきて。丹下(幸男) とか、若い連中が入ってきて。青木先生も時々展覧会をやるので、そういうのを見に行ったりするんやけど、なんか僕らが思うてるのと違って、おとなしいというか。もっと面白い世界やと思とったんや、絵の世界って。それが全然。たしかにうまくなっていくけど、理屈みたいなものばかり覚えていく感じで。絵はこう描かないかんとか、こういう感じやなかったらあかんとか。どこの展覧会見に行ったらって、そんな絵ばかり。ほとんど具象的で、その中に抽象的な絵がポチポチ出だした頃やったかな。

そんな時河口（龍夫、1940—）さんがやってるグループ「位」とか「具体」（具体美術協会）のことを聞いて、大阪のほうに見に行くと、「ああ、こんな世界もあるんか」って。

池上：二紀会の人たちはそういうのは興味がなかったんですかね。具体を見に行くとか。

榎：ないない。

池上：ないですよ。

榎：僕らも、先生は二紀会やったから、二紀会のほうに出品し出したかったのか。

池上：ちょっと違うなと最初から思いつつも。

榎：うん、知らないからね。展覧会というの知らないし。二紀会って、本展は東京であるんだけど、そこで通った作品は関西展というて関西へ来る。そしてまた関西展が終わったら神戸展があるわけ。二紀会って結構大きかった。

池上：全国的に。

榎：全国的にも多かったわけ。で、昔から神戸で田村孝之介（1903—1986）とかそういう有名な人もおったわけ。鴨居玲（1928—1985）もおって、後から出会うんやけどね。そういう中で僕らはそういう展覧会に入選するために——展覧会に出す以上入選せなあかんわけ——いろんな先輩とか審査員になってる人が近所にもおったし、そんな人の話を聞きに行ったり、絵を見て回ったりするわけ。いろんな先生がおって、特にそういう展覧会の在り方とか、展覧会に入選するために——まず入選せなあかんわけ、そうしないと飾ってくれないから——どういう絵を描かなあかんとかね。二紀会はこういう芸風とか、具象でもこういう具象が好きやとか、通りやすいとか。そういうことを教えてくれるわけ。

で、僕の友だちで、今も絵描いてるんやけど、そいつがそういうことをよう知って。僕はもう全然知らないから、一から教えてもらって、展覧会に入選するために取り組むわけ。彼はアトリエを持って、展覧会のために泊まり込みで僕は絵を描きに行くわけ。こういう絵にせなあかん、そういう絵描いたらあかん、とか、この色の使い方は、ここに色置いたら見る人はこういうところから見ていく、とかね。なんかそういう、ほんとに「展覧会に通るための絵」というもんを教え込まれるわけ。それはものすごくありがたかったけど、大変やった。

僕は昼間、働いとるわけ。彼はふらふらしとってね。週に1回か2回子どもに絵を教えたり。僕が帰ってきたら、うちの親戚の家でそいつが待っとるんや、家で。「おっ、帰ってきたか」いうて。僕が働いて帰ってきたら。そこの親戚の家で、そいつもご飯食べて、一緒にそいつと絵をやりに行くいうんか。飲みに行くのでも、その日に子ども教えたら、500円やったんかな、月謝が。それを持って、「おっ、今日は月謝が入ったから飲みに行こう」とか「食べに行こう」という感じで、ずっとつきおうとった。展覧会でも、そいつはアトリエ持っとるから、今度はアトリエ合宿や、泊まり込んで絵を描くわけ。そんで僕は昼間働いとるやん。あいつはふらふら昼間寝とってね、僕が帰ってくるのを待って制作を始めるわけ。そんなのが1週間ぐらい続いたかな。もうフラフラ。

池上：大変ですね（笑）。

榎：全然寝えへんの。もう寝んと絵描いて、フラフラになって、何描いとんのか分からへん、3日ぐらいしたら。

ぼーっと描いとるだけ。そいつは「おっ、このぼーっとしたとこがええんや」いうてね。そいつがうまいこと言うんや。あまり頭で描くんでなしに。「だからおまえは一生懸命昼間働け」いうて。夜うち来て描けいうて。

江上：疲れてるぐらいがええって（笑）。

榎：僕が働いた小遣いが入ったら、飲みに行こうという感じで、うまいこと言うやつでな。で、最初展覧会に入選したんや。まあ東京まで見に行つて。

池上：それは初めて応募して、それで同時に入選した（1965年）。

榎：うん、入選した。なかなかやっぱり難しかったな、その頃入選するのは。

池上：それはどんな絵だったかというのは覚えてらっしゃいますか。

榎：どう言うたらええんやろ。僕は結構細かい絵描くんが得意やったんやけど、そいつは、そんな絵描いとつたらアカンいうてな。なんかわけのわからん心象風景みたいな。抽象でもないんやけど。

池上：1点だけ出されたんですか。

榎：2点出して、1点通ったんかな。自分でも、こんなんでええんかなと思ったけど。僕はもう一個のほうか、ちょっと形があるような、何の形か分からんけど、ボリュームのあるような感じのものにして。あとは自然いうんか、宇宙いうんか、動物みたいの中にガーッとあるような感じでな。

江上：形というのは、わりと抽象的なイメージみたいな？

榎：今言うような抽象でなしに、ドローツと絵具が溶けたような、なんとなく精神的な世界いうんか。もっと分からないような世界を描いた。何か真ん中が抜けとって、クーッと向こうへ行くような感じで、周りに何かがあつて。何かは分かんないんだけど。それが通つて。あっちのほうか、僕は、描いた感じがしとったんやけど、あんなんが通らんで、こんなんが通るんかなとか。だから「展覧会ってこんなもんかな」と思って。でも何回か出したんかな。

池上：そのお友だちのほうはいかがだったんですか。

榎：彼も通ったんかな。彼はもう何回も通つとったから。だから要領知ってるいうんか。通らない時もあるんやけどね。それもいろいろ自分らで反省したり、展覧会について考えたりするんやけど。そうしてうちに鴨居玲いう人がうちの研究所へ、デッサンをやりたいと言ってきて。さっきの六三ではないけど。彼はスペインとかフランスの方へ行つとって、いつも年に1～2か月、年末に帰ってくるの。姉さん（鴨居羊子、1925—1991）が芦屋の方におつてね。それで帰ってきたら、僕らの先輩で、研究所を立ち上げた古川（清）いう人がおつてね。その人が芦屋の方の田中千代洋裁学校に丸本耕（1923—）さんという人と一緒に教えに行つたりとって、鴨居さんなんかと出会いがあつて。鴨居さんが日本へ帰つて来てる時に手を動かしたいいうんか、レッスンやりたいいうか、僕らのとこへ紹介されたわけ。なんかそういう場所つくってくれへんか、いうて。僕と松井君と、もう2、3人おつたかな、そんな子らともう一個研究所つくつたわけ。僕が行つとったんは青木教室いうんやけど、その研究所つくつて、デッサン教室いうものをやつて。そこで好きな人、誰でも来る。

鴨居さんというのは男前で、カッコええやつでな、もう腹立つぐらいもてるんよ（笑）。芦屋の田中千代と

いうのは洋裁学校で、もう一個子供服をやってるのがあったんよ、有名なとこ。そこの生徒なんかも来るわけ、デッサンを習いに。もういっぱい若い子が来んの。もうデッサンは50人とか、そんな感じ。僕らのとこは、月謝は一応払うんだけど、先生とかそういうな人に報酬はあげないの。その月謝とかを積み立てとってね。その時にZEROというグループで「ゼロから始まるう」ということでデッサンの研究所ZERO（「デッサン研究所ZERO」）いうのをつくってやり始めたんやけど。それは二紀会の人もだいぶ来とった。それで若い人でワイワイパーティやったり、ほとんど飲みに行っただけ。

それで3、4年やった時になんかお金がたまってね、研究所の。40万ぐらい貯まったんかな。先生たつて、みんな上の人が下の者に指導してるので、先生っていないから、入会金とか月謝を全部積み立てとったんやな。「ZEROの活動に使おう」というて。ZEROの研究所のデッサン展とかそういうのを企画したり。僕は鴨居さんにも二紀会、昔出しとったけどいっぺん中断しとったんよ。また二紀会の方に出して。その頃、鴨居さん、ものすごい賞もらって。安井賞ちゃうわ、何やった？

江上：安井賞。

榎：安井賞取ったり、昭和会賞取ったりして、結構絵がボンボン売れ出したんかな、その頃から（注：鴨居玲は、1969年に昭和会賞と安井賞を受賞した）。だから僕らは、飲みに行っただけでみな鴨居さんのおごり。もう毎晩ぐらい宴会よ。そんなんで、僕はまだその時絵描いとったから。展覧会にも出しとった。東京では入選して、関西の方でも市長賞か知事賞かなんか、もらったんやけど。一番の最高賞は、二紀賞っていうのがあるんやな。その候補にも挙がとったんやって。僕はその頃は絵って、あんまりちゃんとした額縁に入れてない。木を黒く塗ったり、木を貼ったりしただけで。その時言われたんや、鴨居さんに。絵と額縁そんな粗末に扱ったらあかんて。鴨居さんは自分でカネ出して、額縁屋に頼んで、すごい額縁を作ってくれてね。

江上・池上：えーっ！

榎：これに入れ替える、いうてね。まあ間に合わんかったんやけど。けども大切に入れ替えして。一応候補に挙がとったしね。審査員も、やっぱり自分の教え子がそういうところに、候補に挙がとったら、まあ情があるし、どっかに欠陥があつたらハネられてしまうわけ。例えば額縁とかね。額縁まで神経が行ってないとか。絵はいいんだけど、そういうのがあるとかが教えてくれるわけ。

池上：なんか理由をつけるわけですね。

榎：そうそう。それでやっぱりそういう絵の展覧会とか賞の在り方とか見えてきて。やっぱり賞を取る人は先生にいろんな、おべっかとか、何かお供え物持って行くとか（笑）、上納金かなんか知らんけど持って行って機嫌ととるのがほとんどや。見えるんや、そんなのが。やっぱりおべんちゃら言うて、うまいこと。僕はそんなの嫌いやねん。そんなまでして出したくない感じ。そんなんが見えてくるし。

で、さっき言ったように、東京展があつて、関西展、神戸展。神戸展は、その頃「さんちかギャラリー」というのが出来た頃やってん。神戸国際会館にもそういうギャラリーがあつて。そういう大きな展示ができたんや。その時に手伝いで、いろんな設営とかパネルを作ったり、作品を運んだり、全部僕らがやるの。そうして、なんでみんな、そういう展覧会に関わってこないんかとかかと。自分たちの展覧会を見せるわけやん、みんなに見てもらはんやん。そんな大事なものを、なんでみんな興味ないんかかと。上から言うだけで。「同人」とって中間の人もいて、幹事みたいに動いてくれるんやけど。そういう人は分かるんやけど、上の人は全然そういうもの、展示、展覧会とかに興味ないの。

池上：若い人にやらすだけみたいな感じで。

榎：やらすだけやらして。やらしてやっとなるねん、みたいな感じで。だんだん展覧会とか、絵とか、「なぜ展覧会やるんか、あの人たちなぜ展覧会やってるんかな」とか、そういう自然な疑問が出てきて。なぜ絵描きになったんかとか、そういうの聞きたかったし。

池上：そういうことは話にはならない感じなんですか、二紀会の偉い人たちというのは。

榎：ならない。それはもう先生は先輩やし、飲みに行ったって、「いやあ先生の今回の絵、いい色でしたね」とかそんなうまいこと言うばかりや（笑）。僕らはそんなん分からへんから、絵のことはあんまりうまく言えないし。ある程度やってる人やったらうまいこと言うわけやん。「いやあ、あの額縁は良かった」とか。アホなことばかり言うとな。そんなんもう嫌で嫌で。それでもうだんだん。鴨居さんもそういう人で、わりとそういうことを聞いてくれる人やったから。僕らの仲間でも二紀会に出したい、言う子もおるけど、どう出していいんか分かんない。僕らは何回か出しとるから、いっぺん二紀会の組織について聞いてみるいうて、質問状を作って。自分たちが疑問に思てることとか不思議と思てることを描き出してね、何十項目か。それで二紀会の人をみんな集めて、話し合いいうんか、討論した。

池上：それは神戸二紀。

榎：神戸二紀の人。それで向こうは嫌がとったわけ。「おまえら、クソ生意気や」というて。「おまえら生まれる前から絵描いとるんや」というて。いちいちそんなこと言う必要ないっていう感じで、話にならん。相手にしてくれないわけ。で、僕らは、組織として二紀会に対して質問をちゃんとしたいから、書類で回答してくれ、いうてね。こういうのをやりたいから集まってほしい、いうて。国際会館借りてね。もう向こうは70人ぐらい集まってくんの。80歳の人とかね。

池上：でも、ちゃんと来るのは来られたんですね。

榎：来た。向こうもね、何言うとなのか、いうて興味があったんかどうかわらんけど。全部が全部は来なかったけどね。

池上：若い子が何か言ってる、という。

榎：80人やったか、5、60人やったか忘れたけど、とにかくすごい。小笠原誠次（1927—）とか、そういう委員の人が前にずらっと並んでね。あとバーツと同人の人が並んで、一般の人もずらっとおってね。僕らは6人ぐらいおったんかな。

池上：榎さんはその代表みたいな感じで。

榎：僕は代表をさせられてもうてね。僕が質問を読み上げて。

池上：ちょっとこわくなかったですか。

榎：こわかったよお。ドキドキ。僕は普段もうきたない格好して、絵具がついたようなボロボロの服着とるのに、背広着て、ネクタイしめてね。書類持ってバツと読み上げて。僕らの仲間が5、6人おって。そんな中で読み上げて、質問して、回答してもらうんやけど。うーん、なかなか、向こうはバカにしたような感じの回答ばかりで。

池上：その場では話し合いにはならなかったんですか。

榎：そういうふうに回答はあるけど、あまり話できなかった。結局、向こうは、「こういうことはやめてほしい」という感じで。

池上：あまり真面目に取り合ってもらえなかった。

榎：僕はね、たしかに絵とか先輩はもちろんそれなりにいいものもあるし、尊敬してるけど、彼らは展覧会というもの、発表ということに対して、絵と発表、作品と発表をまた別に彼らは考えてるみたいなの。別に考えてるのか、考えないんよ、展覧会のことを。ただ入選して、通ったら、いう感じでやってる。

池上：絵を掛けるだけの場ですか。

榎：そう。展覧会ということを考えてないの。その辺は、僕はものすごく不思議やった。展覧会する以上は、見に来る人はみんなが絵の好きな人とか、絵描きになろうとする人ばかりと違うんや。絵の知らない人も見に来るやん。なんかそんな人のことを思わないかなと思うわけ。そういうところがものすごく不思議やったし。

池上：二紀会の中で認められるということの方が目的になってる。

榎：うん。それはそれでね、そういう人たちにも、新制作とか行動美術とか、いろんな派があるんやけどね。なんか派で美術が分かれてるのは、僕はものすごく不思議やったわけ。だから絵はそれぞれ個性なのか、個人的なもんだけど、それを発表するときには、狭いところで、個人個人のものの考えで絵が生まれてるのか。それで僕はちょっと、展覧会というのは、おかしいなと思ったわけ。それで、そんなこと言うたら怒られるしな。そしたら、僕らで一緒にそういうことを考えるデッサン教室を作ろういうてね。デッサン教室いうてんけど、ZERO 研究所いう研究所、そういうことを考える場所にしよういうて。基本的にものを見るとか、絵を描くという手の修練とか、そんなんを大事にするということは、僕らもしとったわけ。そういうことをやりながら、実践的に社会の中で発表したり、行動していくことをやるいうことで。さっき言った松井君とか、先輩だった古川さんという人が。古川さんいうのは武蔵美出た人でね。丸本耕いうて、その人は抽象的な彫刻とか、面白いものやってた。そういう人が一応僕らの先輩、顧問みたいになっていろんな話をしたりとか。ただデッサンでなしに、別の日に、そういう美術について、現代美術いうんか、「現代美術」いう言葉があったんかどうか知らんけどね。

池上：まだそういう感じじゃなかったかもしれないですね。

榎：そういうものについて話し合いをしたんかな。その時、丸本さんとか、絵描きの人でなしに、乾（由明、1927—）さんとか。

江上・池上：ああ。

榎：乾さんとか木村重信（1925—）とか、高橋亨（1927—）やったかな、大阪の方の人とか。そんな人たち呼んで。

池上：当時の若手の先生たちですね。

榎：それとか、僕がハンガリーへ行った時（1977年）、向山（毅）さんいうて、京都大学の物理学者で、原子核とかそういう研究しとる人がおって。そういう人と呼んで。数学者とかね、音楽家とか舞踏家とか。そういう人呼んで、週に1回とか。僕らの研究所からそういう人にお金を渡して、2時間ぐらい話して、あとみんなまでワイワイ飲みに行ったり、勉強会をずっとやとった。そういうなかでだんだん、そういう勉強だけでなしに、それをやっぱり実践していくんよ。それで僕らはまた金出し合って、シンクタンクみたいな、事務所みたいなのを一人10万円ぐらい出して、6人ぐらいで。

池上：結構大金ですね、当時10万といたら。

榎：大金よ。まずそういうのに出して。そこで小さなレストランとかで油絵を先輩が教えて。僕は会社勤めしとるからできなかったんやけど。そういうとこでまた別な活動を始めて、だんだん外へ向かって表現していくのが、ハプニングというのか、街の中、都市の中で行動を起こしていくことに。

池上：ちょっとだけ話が戻るんですけど。そのちょっと前に個展をされていると思うんですけど、ギャラリー新光っていうんですかね（1968年5月18日—24日）。

榎：個展はねえ……

池上：個展「生成」っていう。

榎：そうそう。

池上：すごく面白い絵を出されていて、ちょっとそのお話もお聞きしたいなと思ってたんですけど。

榎：絵を描き始めた時かなあ。

池上：1968年ですよ。

榎：うんうん。

池上：こういう。

榎：だいたい最初ね、こういう感じをもっと分からない感じやったんかなあ。一番最初ね、二紀会の時、これやったかな。それが入選したんかな。

池上：（資料集を見せながら）これが二紀会に入選した作品ですか。（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu 榎忠』、青幻社、2006年、10頁に掲載。）

榎：うん。それはね、宇宙みたいな中にね、胎児というか、なんか生命が生まれてくる。宇宙の中でそういうのが、生まれてくるという。

池上：これもさっきおっしゃってた作品と似てますね。

榎：そうそう、そういう感じ。

池上：わーっと向こうに抜けていくような。

榎：二回目はね、もっと、こんな形がなかったわけ。これはまだ形があるんやけどね。なんかそういう世界やった。だんだんこういう形が見えてくる世界になってくるんやけど。

池上：こちらのほうは、なんかちょっと終末的なのというか。

榎：そうそう。これなんかは、いろんな地球の自然、そういうところからずーっといろんな芽が吹き出して、成長して、水とかそういうのが生まれて、天に上がって、それがまた天に循環していく。そういうのをずーっとやとったわけ。

池上：なんか生命の輪廻みたいな。

榎：うん。そういう中で原爆とか、世界大戦があつたりして、いろんなとこで分かれていく。だけどいつかまたひっついて、ずーっと繰り返していく。なんか一つの花が生まれて、睡蓮の中から花が生まれてきたり。こっちとこっちはいがみ合ってるんやけどね。これは神さんというか、この花がひとつの何かを持っていて、そのいがみ合いを調整してるっていう。

池上：統合してるという。

榎：うん。それは、どこを見ても怪獣とかお化けがおったりね、なんか油断したらもうガーッと襲ってくるわけや。だから油断できん世界やねん。

池上：そういう世界なんですね。

榎：そういう世界。これもそうだけどね。

池上：この絵はこの写真をベースにしてらっしゃるんですか（『Everyday Life/Art Enoki Chu』、11頁）。

榎：この子にモデルになってやってもらったんやけどね。こういう、おんなじ絵を描くだけどね。これはちょうど万博のマークやねん、これが。

池上：あー、ほんとだ！

榎：ちょうど僕がお腹にマーク入れた時ぐらいやったかな。

池上：でも68年ということは万博よりは前ですけど。

榎：これは個展ではない。個展はこの間ぐらいかな。これとこれの間ぐらい。

池上：ああそうですか。こっちはべつに個展に出てるわけではないんですね。

榎：個展に出たやつは全部なくなった。

池上：あー。このへんの女性の。

榎：これはもう最後の頃かなあ。

池上：この辺はまだ残ってるんですか、こういう絵は。

榎：これは残ってるかな。あるかどうか、ちょっと分からんな。

池上：でも、この背景にこっちの絵が描き込んであったりして。

榎：あるでしょ。外の風景がこういう風景で、風景画を飾ってるわけ。壁が厚いわけ、すごく。それは、世界はもう第三次世界大戦で、放射能が蔓延しとってね、出られへんわけ、家から。自給自足やねん。編みもんしとんの、この女の人。火をおこすとか、果物、自分で作っていくの。編み物も自分の食べ物も、自分で編んで作っていきよるわけ。

池上：それを食べて生き延びていくという設定なんですね。

榎：そうそう。外はそういう感じでね。外も出られない。外はそういう風景やから。こわいし、それに犯されてしまう。

池上：怖い設定ですね。

榎：後ろに大きい万博のマークのなにながあるんやけどね。これも生と死いうのか。なんかそういう中で滅びていくいうのか。

池上：この個展の反響というか、どういうふうに受け止められたかというのは。

榎：どうやったんかなあ。忘れてもうたけど。ちょっと変わった、細長い、1メートルの4メートルとか、すごく変形のカンヴァスにこういう世界をダーッと、放射能に犯された自然を描いとったんやけどね。いろんな花があるんだけどね。全部変形してて。

池上：テーマ的にはつながっているわけですよ、ずっと。

榎：ずっとつながってんの、うん。花も放射能で犯されてね、異形いうのか。そういうのが変形したとか、いまままで小さいもんが大きく変形したりとか、そういう植物とかね。動物って、具体的には見えないの。動物なのか、植物なのか、石なのか、なんか分からんような世界かなあ。

池上：やっぱり原爆のこととか、第五福竜丸が被曝した事件（注：1954年、ビキニ環礁で第五福竜丸という漁船がアメリカ軍の水爆実験の放射能を浴びた事件）とか、そういうことについて考えて？

榎：あんまり僕は考えへんの。そういうことになったらどうなるんかということは、結構ずっと田舎でおって、何の世界か分からんような、ジリジリいうような世界って何かなというところが、原爆とわりとひつつくところが

あるわけ。だから僕が小学校か中学校か忘れたけど、広島原爆の映画とか、あんなん見て。すごい川の中で焼けただれて死んでいくとか、そういう映画観たり。映画館に入ったら、演出かなんか知らんけど、消毒の、病院のにおいがするわけ、映画館で。

池上：えーっ？

榎：それは記憶に残ってんの。映画館でするはずないのにね。

池上：すごいですね。

榎：なんでかなと思てね。それから、暗い建物の中で、真っ黒になった建物の中で、看護婦さんが、死体がいっぱいあるところで手当とかやってる。なぜ川へ入るかというたら、熱いし、もうとにかく水が欲しくなるいうのか、そういう中でみんな川で死んでるわけ。なんかそういうすごい怖い映画を観た。そういうのがずっとどこかにあるのかな。べつに実際に広島原爆の現場見に行ったんでもないし、福丸もただ新聞とかニュースで知ったぐらいで、あんまり深く興味はなかったんやけど、そういう映画観たら、子どもの時分に洞窟でそういうのを見た世界を思い出すわけ。

池上：なんかどっかでつながってるんですね。

榎：うん。想像するいうたら、体験した感じのものしか想像できないから。知らないものは想像できないし、感じないから。だからそういうのがずっとつながってるのかなあ。だから絵にもそういうのが出てくるし、そういう世界ってなかなか描けないよね。こんなじゃないんやけど、これが近いかなとか。だから変形して描いたりするの、こういうふうに変形するのかなとか。花は、いままではいろんな虫が来やすいような色やけど、それはやっぱり、この花は「危ないよ」とか、そういうサインを送るためにこういう変な色や形になったんじゃないかとか。「これを食べたらいけない」とか。「花粉を食べに来い」というんでなしに、この花を食べたら、放射能が連鎖していく。だからこれは食べたらいけないとか、なんかそういう想像の仕方で作っていく。

池上：じゃあ具体的な、原爆に対する声明というのではなくて、なんででしょう、想像力のきっかけになるような感じ。

榎：僕もそう思うね。だいたいみんな、根っこにそういうもんがあるわけ。だからそれを作品にしようとか、展覧会へ出そうとかいうのは、僕は最初からイヤやったわけ。だからこの万博のマークとか、ああいうのやったけども、全然あの時の記録もないし、何もとってない。その頃はそういう写真を使った作品が多かったわけ。身体測定とかね。いろんな体を測定したりとか、身体を裸で見せたりとか、そういう行為を見せる作品で。写真の作品って、そういう作品が多かった。僕がやってるハプニングというのは、作品とは違うわけ。僕は「ハプニング」というか、体を使った身体表現はものすごい大事やと思ってるわけ。単なる作品でなしに、やっぱり自分の体を晒して、いろんな人と会って、その人の顔を見て何を思うか。そういうことをやってきた。

たまたまあとになって、いろんな版画にしたやつとか、《ハンガリー国にハンガリ（半刈り）で行く》が「痕跡」展（「痕跡——戦後美術における身体と思考」（東京国立近代美術館、2005年1月12日—2月27日／京都国立近代美術館、2004年11月9日—12月19日）とかああいうのに載ったりするんだけど。だから今になって、あとから作品に。まあ、作品は作品なんだけど、展覧会とかああいうのには僕は入れなくなかったわけ。そうすると見る人は作品と思って見てしまうでしょ。「あっ、これは面白い」「あっ、これでも美術か」「これが作品か」って、こういうことやとつたら美術やと思う。だけど僕はそういうのは。うん、それもあるよ、表現の仕方。写真とか、映像を使ってやるとか、いろんなの。今の新しいのを使ってやるのもいいと思うんだ

けど。だけどそう思ってしまったってわけ、みんな。「ああ現代美術ってこうか」って。

池上：その枠の中で理解しちゃうんですね。

榎：そう、枠の中でモノを見るやん。僕は、それは勘違いであるし、見る人もそういう見方したらいけない、ということで。僕は、大砲とか銃とかあんなんでも、ものすごく具象的にそのままのものを作るわけ。あれを抽象化して、「これは作品」みたいにデフォルメしたり、漫画チックにしたりするのは、僕はちょっと。見る人が見たら、「あ、これは芸術作品や」と思って見てしまうわけ。そしたら僕がやろうとするのと違うわけ。だから僕は、やっぱり怖いとか、重たい、冷たい、触ってみよう、というのがやっぱりやりたいわけ。そういう中で「美術」いうもんは、あとから考えてくれてもいいと思うの。そこで見た瞬間、「あっ、こいつはなるほど、版画にしてるな」とか、「あ、こういうのが身体表現か」とか。今やったら「そういう作品かな」って、そこで終わってしまうわけ。想像力とか、ものを見るとか、美術というものに対して。

だけどほんととはそうではないんだけどね。もっと見る人はちゃんと見る、そういう見方とか想像力はあると思うんだけど、多くの方はそうになってしまう。特に美術を知らない人はそういうように思い込んでしまう。僕は、美術を知ってる人は、それぞれがやってる仕事やからいいと思うの。放っておいてもいいの。だけど僕がやろうとする美術は、子どもであろうが、現代美術を知らない人でも、美術いうもんに入ってほしいわけ、とっかかりいうのをね。それを知るにはどうしたらいいんかいうことを、やっぱり僕は考えるわけ。単なる作品作って、「これは彫刻です」とかいうのでは、なかなかそういう人は分からない。見に来にくいと思うの。だからよう言うやん、「現代美術分かん」とか。行ったって分かんへん、何しよんか分かんへん、何考えとんかな、と思う。それはたしかにそうや。僕もそうやもん、今の現代美術。みんな何やろうとしとるんかなって。作品は分かるよ。何をしようとか。何をしよるんか。なぜ美術でやってるんかなって。何を表現しようとしてるんかなと。

池上：根本的なこと。

榎：根本的なことがね。美術って何かなって、ずっと僕も探してるし。探しても、あるもんでないと思うんやけどね。作り出していくもんやと思うの。だから、不思議やから面白いんちゃうかなと思うわけ。全部そういうものに引っかかってくるから、行きつくところはどうしても、子どもの時感じたもんとか、怖かったもんとか。それは世の中知らなかったからものすごく怖かったわけ。だけど今やったらいろんな情報が入って、あるいはいろんな数字まで出てきて。何ミクロンとか、これ以上吸うたらあかんとか、そういう数字で判定してしまうやん。そういうことは僕は分かんへんし、そんなんで信じられへんし。そういう数字を使う人は嘘つきやねん。要は学者とかそういう専門家は数字使わなやっついていかれへんわけ。納得させられないわけ。だけど数字は正直なんよ、数字やから、ちゃんとしたもんやから。使う人がものすごく悪人やねん。悪人やから、嘘つきやから、それがみんなに伝わっていく。僕らはその数字しか判断できないんや。その数字がどんなもんか分かんないけど、ただそれしか分かんないというのがものすごく怖い世の中やねん。

池上：そうですね。被曝量がどれぐらいだとか言っても、その数字をどう使うか。

榎：なんかそういうところが美術なんかにもあるんちゃうかなと思うわけ。だから僕はどうしたらいいかいうことをやっぱりやっていきたいなと思うわけ。この間ね、展覧会会期中に、田舎のね、小学校の同級生が10人ほど見に来てくれたんよ。葉莢とか銃弾とかあったわけ。「ああ、行ったなあ」いうて、「拾いに行ったなあ」いうてやな。

池上：昔の仲間はそういうふうに見てくれるわけですね。

榎：そういう子はね。

池上：「おまえ、まだ同じことやってんのか」みたいな。

榎：竹の大砲も置いとったわけ。そんなん一緒に遊んでおったわけよ。「へーっ、まだそんなことやっとなか」  
いうて（笑）。

江上：「まだ」というのがね。

榎：まだいうか、「鉄でやっとなか」いうて。

江上：「グレードアップしてんな」って。

池上：「それで仕事になってるんや」っていう（笑）。

榎：「そら仕事になっとったらいいんや。仕事にならんからもうおもしろいんや」いうて。

池上：たしかに。先ほどおっしゃっていた、根本的なことまで考えて二紀会を結局は脱会されたわけですけども（注：1970年）、この後はもう油絵って全然描いてらっしゃらないんですか。

榎：描いてない。

池上：まったく？

榎：描いてない。

池上：なんかこう、描いてみたくなったり、油絵の感触が懐かしくなったりとかいうのもなかったですか。

榎：ない。僕は、さっき鴨居さんに会って、研究所で積み立てとった言うたやん。その時は、目的があって貯めとったんでなかったわけ。それが貯まったわけ。その頃40万円ってごっついよ。

池上：すごいですよね。

榎：その頃、1960年代の終わり頃やったから。そうしたら、鴨居さんはやっぱり金沢の美大に行くのに、大学の時バイトしよったんやって。映画の看板描きやったりとか、苦勞して大学行ったり勉強しとった。だから、若い人が一生懸命勉強して、こういうように貯まったんやから、そんな苦勞せんとね、パーティ開いて、あみだくじで誰か洋行さそうって。ZEROから外国に派遣して、絵の勉強させようって。僕らまだその頃絵を描いとったから。

池上：いいものを見せてあげようという。

榎：うん。とにかく外国へ行くというのが条件で、好きなように使っていいいうことで。それはあみだくじやったんよ。その時に、研究所に1年間以上在籍しとる人がそのあみだくじを引く権利があるわけ。僕はその時幹

事をやっておったわけ、そのあみだくじの。それでいろいろ、最初は50人ぐらいおったのかなあ。

池上：そんなにいたんですか。

榎：それで20人に絞るわけ、第1回戦は。それで20人残って。僕も残ったわけ。それで今度は10人選ぶわけ。その時、兵庫の原田の森（注：当時の兵庫県立近代美術館）でムンク展やとった（1970年11月18日-1970年12月20日）。伊藤誠（1929—2012）という人が神戸新聞に勤めておって。あとで姫美（姫路市立美術館）に行った人やけど、その人がいっぱいチケット持ってきてね、20人残った人に入場券をくれるかなにかして。それでまあ進行していくわけ、あみだくじを。今度10人残るわけ。その時女の人が8人残ってね。僕も残ってん。もう一人男の子、デザイナーかなんかが残ってん。男の人は「オレ仕事があるから、もし当たったら行かれへん」いうて辞退したわけ。それでもう一人男が入ったのかな。結局、あみだくじをまたダーッと、ワイワイ飲みながらやるわけ。「アーッ」とか言いながら。で、最後にね、僕が幹事やから、みんな残ったやつを僕がやるわけ。最後にパッと引いて。その時鴨居さんとか元町画廊の佐藤さんという人がいて。その人はまあ言うたら立会人みたいなもんで。だんだん外れていって、僕に当たってもうてな（笑）。そんなみんなが「わー、これはイカサマや」言いよってな。

池上：幹事だから（笑）。

榎：幹事やからいうてね。

池上：でも最後に選んだんだから。

榎：最後に選んだ。それはいかさまも何もないよ。みんなビックリしとるぐらいで。みんな「わっ、これは仕組まれたやつや」いうてね。僕が当たるように誰か仕向けたんちがうかうかいうて言う人もおったぐらい。

池上：だってみんな行きたいですよ。

榎：それは僕はね、会社もあるしね。そんなんべつに、このパーティが面白くなったらいいと思ったわけ。でも当たってもうてね。

江上：当たってもうて（笑）。

榎：「わー、どうしよう」と思て。まあいろんな行きつけの飲み屋とか、「デッサン」いう飲み屋行ったりなんかしよったんだけど、そういうところがカンパとか、いろんなところからカンパもらったりして、40～50万にもなったのかな。

池上：会社は休めたんですか。

榎：うん。鴨居さんは「絵の勉強してこい」言うからね、僕も一応絵具とか、簡単なスケッチするぐらいの道具を持って行ったんやけど。僕はその頃（ヨハネス・）フェルメール（Johannes Vermeer）とか（アルブレヒト・）デューラー（Albrecht Dürer）とか、結構確実に描く人がものすごい好きやったん。それでそういう美術館を訪ねていく、美術のツアーみたいなのがあってん、1か月ぐらいのツアー。それに、僕も初めての外国やから、そういうところ行ったらいろんな美術館に連れていってくれるし、泊まることもちゃんとするし、結構自由行動もあるわけ。だいたい一つの国を1週間ぐらいの単位で行けるわけ。

池上：結構いいですね。

榎：うん。それで最初、飛行機でオランダ行ったのかな。オランダ行って、最初はフェルメールとレンブラント（ハルメンス・ファン・レイン、Rembrandt Harmensz. van Rijn）とか（フィンセント・ファン・）ゴッホ（Vincent van Gogh）とか、あの辺の美術館回って。フェルメールの絵とか見て。フェルメールの絵はね、小さかったんや、思とるより。大きい絵かと思とったんや。たしかに書いてるんやけど、大きさとか。でも、あれっと思うぐらい小さくてね。僕が見たかったのは、風景画、港みたいなの。

池上：《デルフトの眺望》（View of Delft、1660-61年）ですね。

榎：うん、デルフトの。それ見て「わー、すごいな」と思って。それはまあ大きかった。で、やっぱりデルフトの街へ行きたいと思てね。ほかの連中はいろんなところへ行って。スケッチが目的やねん、いろんな美術館見て。僕はほとんど絵も描かんと美術館を回って。フェルメールの生まれたところアトリエがあるとこへ行こうって、タクシーでね。

江上・池上：わーっ。

榎：ベンツのタクシーやねん。

池上：すごいですね。

江上：カッコいい。

榎：もう一人が名古屋のやつでね、友だちが。「オレも絵よりかそっちのほうがええ」いうて、「行こう」いうて二人でベンツに乗ってね。「ベンツのタクシーや」いうて二人で喜んで行ったんかなあ（笑）。その頃の一萬ぐらい使ってタクシーで行ったんかな。デルフトへ行って。焼き物の街やったな。彼は名古屋の有名な焼き物の会社に勤めている人でね、タイルとかあんなのにいっぱい描くような。大きい会社で、あとから「ああ、すごい会社やな」と思って。その人とずっと回って、フェルメール見て。アトリエの中へは入らなかったけど、建物に行って、「ほう、こういうところで描いとったんか」って。時代が全然違うしね。そういうことを想像しながら、ずーっと回って。いろんな教会とか遺跡に行ったり。特にすごかったのは、イタリアのいろんな遺跡とか、ポンペイなんかの地震で埋まってしまったところとか、ああいうところ。いろんな教会でも、昔、何百年前に作ったような教会。今みたいに機械ないやん？　なんであんな大きいに作れるのかなと思って、石で。

池上：石で積み上げてね。

榎：なんか人間ってすごいなと思って。今みたいな機械もない時代に。権力とかそういうのでやらしんやと思うんやけどね、彫刻にしたって、石を彫っていくいうところにもすごく感じた。人間ってすごいなって。やればできるんやなと思って。それもそういう権力とか、抑圧された力で無理矢理、奴隷みたいな感じでやらされたんかも分かんないけど、だけどそれでもできるというのが、途轍もない、人間ってすごいなって。それで僕は、こういうところへ旅しに来て、絵をやるというのは「何なのかな」と思てね。僕はまだその時25、6歳やったかな。そんなに元気いっぱいあんのにね、絵を描くとか、アタマでそんなことばかり思って、何しようとしてんのかな、と分かんなくなつて。これではもう絵で表現とか、そんなのは僕はできない。うまい人っていっぱいおるわけ。フェルメールとか有名な、あの時代にすごい的確に、精密に描く絵描きっておるんだけど、日本に入っ

てくるのってごく一部やん。全然名前も知らん人がいっぱい、もうそんながものすごいあるわけ、とにかく。もう疲れるぐらいあんの。

池上：ねえ。みんなそれぞれすごくまいんですよ。

榎：すごいの。日本でうまいとか下手いう単位ちゃうの。「わー、すごいな」と思て。僕が絵を描こうとしても、そういう絵も、もう何百年も昔にこんな人がやってるやんって。今さらなんぼ僕が勉強して、頑張って修業してやったってね、そこまで行くかどうか分らんわけ。そんな僕も根気もないし、そこまでやろうとする気持もないしね。そうしたら何をしたらいいんかということ、ものすごく考えさせられたいうか。

池上：絵の勉強に一応派遣されたはずなんですけど、反面教師に（笑）。

榎：そうや。どっかで鴨居さんに報告せなあかんわけよ。鴨居さんはその時スペインにおったから、最後には鴨居さんに会いに行かなあかんわけ、スペインへ。

池上：写真がありましたね、一緒にカフェで写ってる。

榎：そうそう。それで全然絵も描かんとそういうとこばかり行ってね。で、もう自分はどんどん、もう絵はできないって。

池上：鴨居さんに伝えたんですか。

榎：いや、その時はまだ。行くまでにいろんな遺跡とか昔の建造物を見て、人間ってすごいな、自然ってすごいなと思て。僕らは美術とか思てて、「ほんとバカみたいなこと思ったんやな」って。それでやっぱり信じられるものは何かっていうたら、やっぱり自分の体しかないんや。汗とか、血が出る。殴ったら血い出るとか。僕、空手ちょっとやっとな。いろんなとこで、日本人言うたら珍しがってね、田舎行ったら、すぐ「空手やれ」言うんよ。「忍者できるか」とか（笑）。僕ちょっと空手やっとなから、結構真似とかできるわけ。

池上：やって見せてあげて。

榎：そんなら石持ってきて、「これ割ってくれ」とか。いや、だいたい空手はほんまに割るんでなしに、相手を攻撃しないで済む、止めるまでの修練が大事なんや、とか理屈言うて石割るのを避けるんやけど。「型でもやってくれ」言うわけよ、石持ってきて。みんな、割るかと思て、一応僕も格好して、パッと上着脱いで、フンドシになるねん、いつも。フンドシになって割る真似するねん。ほなみんなジーッと見とるわけや。いつ割れるかと思て。ほんでこやって、止めるやろ、何回も。最後にやっぱりバンと止めるんやけど、あんまりみんなの目がすごいんでな、ちょっとは石にも当てなあかんかなと思たら、ゴーンって当たってもうて。青紫に腫れてもうてな、もう手が動かなくなって。みんなが「わー、すごい！」いうて（笑）。もう青紫のとこから血が出るわけよ。みんな「手当せなあかん」とか「冷やさなあかん」って手当してくれるの。「やっぱり空手はすごい」いうて。

江上：なんかまちがってる（笑）。

榎：隠して、「いやこんなのたいしたことない、痛くない」言うて。「いや、そんな腫れとったら冷やさなあかん」とかいうて。そんなアホみたいな旅ばかりしよったんよ。飲み屋、ほとんどもう。美術館か遺跡行っとるか、

飲み屋行って、そんな話ししとったんよ。変な人と、知らん人と話したり。

池上：それで帰ってきて、二紀会を脱会されたんですか。

榎：うん。僕は鴨居さんとこへ、空港へ行ったわけ。でもなんか飛行機の都合で一日ずれたんや。ほんとはフランスかどっかから、いっぺん戻ってまたスペインへ入る飛行機やったんやけど、それをイギリスに行かなくなようなったんや、ロンドンへ。ロンドン経由のマドリッド行きなんやけど。鴨居さんは飛行機がそういうようになったんを知らんから、僕が前に、何日に行くって時間もだいたい言うもったわけ。飛行機のスケジュール全部載っとるから。そんでトミさんいうて、鴨居さんの、向こうでおったカメラマンの彼女とマドリッドの空港で待っとんに「榎が来ん」いうてね、「あいつカネ持って逃げたんちゃうか」いうて（笑）。それがね、彼女と鴨居さんだけが来るとちがうねん。その村の友だちに言うもったわけ。神戸でこういう企画やって、あみだくじいうて面白いゲームをやって、俺の教え子が来るんや、いうてみんなに伝えとるわけや。そんで言い訳ができないわけよ、来えへんから。みんな、「どうしたんや、カネを持ち逃げしたんとちがうか」とか、「事故に遭ったんか」いうていろいろ心配しとった。で、まあ一日遅れて入った時には、もちろん鴨居さんはおらんし、電話も通じないし、分からへんし。電話機がスペイン語やん。仲介の人がおるから直接伝わらないし。しゃあないから、トンちゃん（東伸一矩）というてフラメンコをやってる人がちょうど留学しとったんや、スペインへ。そいつのとこ訪ねて行って、それから鴨居さんに電話入れてもらって、事情言うて。したら、怒っとったけど、「今度は来い」いうて。

池上：榎さんのせいじゃないしね（笑）。

榎：僕のせいちゃう。でも向こうはみんなに言うもったわけよ。

池上：恥をかいたと思われたんですね。

榎：またあの人な、俺はこういうの企画したとかいろんな人に言うてね、みんなに言いふらしとるわけ。

池上：自慢してたんですね。

榎：自慢しとるんよ。それが来えへんかったからな、「あいつは持ち逃げしたんちゃうか」いうて、いらん心配ばかりして。それでまあなんとか行って。で、鴨居さんの手伝いみたいなのをして。けどもう僕はその時、もう絵はできない。けど鴨居さんはやれ、やれ、言うてね。

池上：一応できないって伝えただけでも。

榎：伝えてはないよ。でも僕はそういうように決めて鴨居さんのとこへ行った。

池上：心に思って。

榎：鴨居さんに悪いとかそんなんじゃなしに、僕はその時もう決めてたから。で、帰って。1971年に旅行したから、行く前は、まだ絵でやるいうんはどっかにあったわけ。

江上：絵も描いてたし、万博のやったのも1970年ですね。

榎：そうそう。質問状の時も、抗議しながら絵も描いとったわけ。だけどそういう中で、自分もいろんな矛盾がある中で、たまたまあみだくじに当たって行った。そういう出会いやね。

池上：旅行から帰ってきてからは一切描かなくなったということなんですね。

榎：描かなくなったな。それから今度は、ZERO の研究所のほうに力を入れ出した。ZERO の中でもグループで発表をやり出した。最初に、一応 ZERO の代表で、4 人でまずやろうというて、外部的にね。今まで街中とか山の中とか、そういうところのいたずらみたいなパフォーマンスをやりよったわけ。

池上：いたずら（笑）。

榎：いたずら。街の中でな。センター街の中とか。

池上：バイクですっと行ってた時と変わらないとか（笑）。

榎：そんな悪さはしない。

池上：いや、スピリットが似てるのかなと思って。

榎：まあ言うたらそういう感じ。ハプニングいうたらそういうもんやねん。人をびっくりさせる。突如そういうのの中にモノとか人が現れてくる感じやった。それがだんだん、「ハプニング」という形式の作品になってしまった。形式だけになってしまった。シュールいう一つの形式で、絵でもシュール的な絵とかいうて、すぐ形式になってしまうやね。だからそういうのでない、ひとつのハプニングというか、身体を使うとか、そういうのを僕らは実践的にやっていくのをやり始めたんや。

池上：デッサン研究所 ZERO というのはまた別に、「グループ ZERO」というのを立ち上げられたんですね（注：グループ ZERO の結成は 1970 年）。

榎：そうそう。

池上：そのデッサン研究所 ZERO の人たちが、こっちに移ってきたわけじゃなくて？

榎：うん、違う。その中で、展覧会とかやりたい人にはいつも言うわけ。やりたいことがあればこっちの方へ言うてくれって。そうしたら半分ぐらいは費用を出すって。画廊でやりたいと思ったらそういうのを否定もしない。べつに画廊でやってもいい。ちゃんとそのやり方、どういう趣旨でやるかとかは一応聞くけど、批判とか、やめとけとは言わない。画廊は信濃橋画廊とかが多かったんやけど、画廊を借りるのに 10 万円かかるんやったら 5 万円は ZERO のほうから負担する。全部は出さない。5 人でやるんやったら、5 人が 1 万ずつ出して、あとは研究所が出す、そういうやり方。だから研究所は変わらないよ。

でもだんだん、鴨居さんとか年いった人は排除されていく。だんだん僕らの行動が過激になっていくから、絵を描いてる人らは、付いていけなくなったきたわけ。だから「やめてくれ」いうんでなしに、やめていかざるを得ない、引いていくわけ。自分らがやっていることはちょっと彼らと違うと。まあ反省したのかどうか知らんけど、「ああ、これは違うな」いう感じを受けとったんちがうかな。そして僕らの ZERO というメンバーのものになってしまったんやな。

江上：だんだん ZERO のメンバーになって活動していく人が残っていく、みたいな感じですね。

榎：そうそう。

池上：デッサン研究所 ZERO がコアなメンバーになった。

榎：でも人数はどんどんふくれてもいくし。その頃、僕らがやってる活動は面白いとかで、今度は街中でこういうイベントやるいうたら、いろんなのに声かけるわけ。神戸大学とか甲南大学とかそういうところで音楽やってる若い子に。その頃ロックとか、フォークとかが流行ってたんだけど、そういう連中にいろんなチラシを渡して、「今度こういうパフォーマンスあるんやけど、一緒にやらないか」とか言って、人を集めるわけ。やりたい学生が集まって、音楽の舞台をつくったり、建築やってる人は建築やったり、デザインやってる人はデザインを担当したりなんかして、街の中でいろんなハブニングを起こしていくわけ。そういうふうにして増える時もあるし、10人ぐらいでやる時もあるし、2、3人でやる時もあるし。そういういろんな街の人を呼び込んで、学生と一緒にやったりして、150人とかすごい人数になる場合もあるし。

池上：すいません、まだちゃんと分かってないかもしれないんですけど、グループ ZERO とデッサン研究所 ZERO は、基本的には全然別のグループということではないのでしょうか。

榎：いや、一緒。

江上：最初研究所をしてはって、そこのメンバーでだんだん付いていかれへん人はいなくなって、新しい人は入ってくる。

榎：だんだん前からあった二紀会の人や絵描きさん連中は、もう僕らのほうは動きがすごいから。ドオーッと街中でやるし、怒られるし、警察沙汰になるし。「もうそんなんのと一緒にやっておられん」という感じで。

池上：それで彼らが出ていって、それでその同じ組織を、名前を変えたという。

榎：名前は変えたよ。JAPAN.KOBE.ZERO とかね。最初はグループ ZERO とかね。何回か変わるとる。

池上：同じ組織が再組織されていったという感じなんですかね。

江上：やる時に名前をそれぞれつけて、名前が変わっていったるんですね。

榎：そうそう。

江上：それでそのたびにメンバーが増えたり減ったりしてるという感じ。

池上：だんだん分かってきました。すいません、ちょっと混乱して。

江上：よう「グループ ZERO いつできた？」ってみな聞かはるねん。

榎：僕にとったらね、ずっと最初は青木教室とかから始まって、先生も排除していくというか（笑）。それで若い人が残ってやるとる時に、鴨居さんとかそういう人が「そういう研究所つくらないか？」って言ってきて。

最初は、僕ら「青木教室」の名前は残してやっと思ったんよ。でも僕はもう ZERO のほうが忙しくてね、あんまり青木教室に行けなくなった。あと松井君というのが青木教室に残って、ZERO と両方やりよったんやけど、彼はやっぱり絵のほうが。だからどうしても僕らのハプニングとは、どっか続かない、やっていけないところがあったのかな。自分のやりたいことがあったんちゃうかな。だからやめていくとか、そういうのはべつに否定も肯定もしないし。

池上：だんだんそういう実験的な、先鋭的なことをやっていく人たちに収斂していった。

榎：時代もそうやったんか知らんけど、そういう現代美術のグループが関東のほうでも、そういう連中が出始めたわけ。その時に神戸とよく似たのが、横浜の連中。横浜には作家いっぱいおるわけ。いろんな若い連中が、やりたいやつがおる。だけどみんな発表は東京でほとんどやるわけ。だから神奈川県ってほとんど何も無いんよ、ギャラリーとかそんなの。神戸も一緒やけど、まあ多少は古いのがあるんだけど。その頃、神奈川県民ギャラリーが出来たんや、山下公園に。その年にその学芸員になった人が、なんかそういうのに理解があったわけ。それで関西の連中と横浜の連中と一緒にやらないか、ZERO も一緒にやらないかいうて。意見交換とか討論会やったりして。それで横浜のそういう連中とやり始めた。

関西には「具体」とか「位」いうグループがあって、「(THE) PLAY」いうグループも集団でやる。関東の連中はものすごく、なんで集団でそういうことができるんかって。関東にもグループで展覧会やるというのはいっぱいあったわけ。だけど集団で、個人の名前使っていないの、PLAY なんかは。位でもそう。位は多少個人の名前も使ってたけど。ZERO も発表は、作品でも全部 JAPAN.KOBE.ZERO で、誰がやっとなか分からへんわけ。関西でなぜそういうのができるんかということは、関東の連中は不思議がったわけ。

江上：榎さん自身は、位とか PLAY のことをいつどうやって知ったんですか、その人たちのことは。

榎：僕が絵を描きよった頃かなあ。

江上：まだ二紀会で描いてる時に、なんかそういう人らもいるらしい、みたいな。

榎：うん。そして近くに河口龍夫とかあいう先輩がおったから。彼は彫刻みたいなんやってて。河口さんの作品は、絵描きみたいなんと違って、わりと理屈というんか、クールというのか、そういうものの言い方いうんか。僕と肌は合わんのやけど、ものすごい魅力があって好きやったわけ。だから飲みに行ったりなんかしてな。僕ら、アホなパフォーマンスやったりなんかする時に、彼もちょうど海に板を並べたりとか、そういうワケの分からんことやっと思ったわけ。僕もちょうど東京で、銀座で警察に捕まったというのがニュースで流れたわけや。新聞とかテレビやで。そういう出会いがあって。河口さんとはよう話して。知り合いでは奥田（善巳、1931—）さんとか木下佳通代（1939—1994）さんとか、あいう人が身近におった。

僕が一番気になっと思ったのが池水慶一（1937—）、PLAY をやってる。あの人はね、なんかものすごく興味があってね。どんな人かなと思て。ものすごくこわい存在の人やった。僕らも PLAY のようなのをつくりたいと思ってやったんじゃないんやけどね、どうしてもグループで社会に向かって何かやろうかと思たら、やっぱり街の中とか山とか自然とか、そういうもんを問題にしなければいけない。自然とかね。行為いうたらどうしてもそういうのになってしまう。そうしたらどうしても似たような感じになるんや、作品が。考え方が。それも嫌やしな。そんなことやったら僕らやりたいことできないし。だからたえず池水さんはすごく意識する人やったなあ。怖い人やったし。だから展覧会で時々会ったんや。京都にもビエンナーレとかアンデパンダンとか。

池上：京都アンデパンダン（展、1964年）とか。

榎：アンデパンダンとか、関西で活動してるそういう人を集めてね、ビエンナーレというのがあったんや、京都ビエンナーレというのがね。その時活動してるグループとか個人もビエンナーレに出品できるわけ。その時に美術館は、市の美術館やけど、全部借りてやるとか、そういうのやとった。そういう時にPLAYと一緒になるんや。そうしたらまたよう似た作品になるんよ（笑）。向こうは吊り橋みたいなやつでね（注：PLAYのメンバーは後でそれを木津川にかけに行った）。僕は布でね、上からゴーツと降りてきてね、空間をガーッと移動するような大きい作品やったりね。木を使った、向こうは丸太使って何かやったら、こっちは松の木を美術館に貫通するようにやったりね。やり方は違うんだけど、考え方はどうしてもそうになってしまう。だから美術館におってもね、彼らに会うたって知らん顔よ。（注：京都ビエンナーレは1972年、73年のみ開催で、選抜された作家による展覧会が1972年、集団による美術が1973年。榎が出したのは1973年8月10日—19日）

池上：そうですか。

榎：ちょっと、挨拶もしない。

池上：向こうも、じゃあちょっと意識してたんですね。

榎：向こうも知らん顔や。で、関東のほうから連中が来てね。PLAYとZEROの話が聞きたいいうてね。関東の連中からそういう話し合いの申し込みがあるわけ。京都の美術館の近くの、ボーリング屋の近くの喫茶店で集まって、そこで話したりなんかしてね。関東の連中は結構理屈とかね、言葉でね、そういうもんをやれなかったら作品というのは信用できないとかいう。理屈で先鋭化していくいうのか、言葉で。

池上：それはどういう方たちですか。お名前とか覚えてらっしゃいますか。

榎：彦坂（尚嘉）とかね、あのへんの連中。（注：1973年の「集団による美術」の際、「五人組写真集編集委員会+5」の参加作家のひとりとして彦坂も出品していた）

江上：あー。

池上：あーって、出ましたね、いま（笑）。

榎：彦坂とかね、結構その頃。そんなら、カッコええねん、池水さん。「わしらそんな知らん」いうてね。「わしらやりたいことやとるだけや」いうて、もう全然話にならない。向こうは話し合いに、討論しようとして来てるわけ。

池上：論争を。

榎：こっちはアホみたいだね、もう空気みたいなもんや。「いや、やりたいから」「おもしろいからやってるんや」と。空気。「こうやってつばつけて、風が吹いてくる方に向かって歩くのになんの理屈があるんや」いうてね。うん。ぼくらそんなんで、「歩いとったら気持ちええやんか」いうて（笑）。向こうは、「フワー」いうてね。

池上：ちょっと肩すかしをくらった感じですね。

榎：肩すかし。そんな感じやったかな。

池上：面白すぎる。

榎：その時に、「わー池水さん、やっぱカッコええなあ」と思てな。で、僕らは横浜でやったり、ビエンナーレとかに出して。わりと面白いいうて、ちょっと変わってるいうことで、新聞とか、『美術手帖』とか『みづゑ』に載ったりするわけや。そしたらやっぱり関西におる連中は、若い者はどういう方向に行っているか分からないから、僕らのとこ訪ねてくるわけ。一応うちへ来たたらデッサンとかやってみんな月謝払うわけ。そういうようにやりながらそういう展覧会を。

池上：デッサンもやってはいたんですね。

榎：やってるよ。だからものを見るとか、そういう手のことは身体的に埋め込まなあかんいうてね。そういう中で、ただ見たものを描くんでなしに、考えるデッサンいうか、それを手で、体で覚えこませなあかんいうことはやっていた。それは基本的な姿勢として持っとったわけ。

池上：それは研究所に入る前と姿勢は変わってないですね。

榎：変わってない。そういう中で美術を考えていく。そういうデッサンの仕方やった。だからデッサンって、写真を見てもなんでもいいし、写してもいいわけ、いろんな型を。それでもいいんだけど、なぜそういうことをやるかいうことを考えていく。そういうことを徹底的に。だから変な、タワー描いたから展覧会出すとか、そんなのは許さなかった。

だからそういうようにだんだん、僕らのグループはユニークやいうことで若い人が集まってくるんだけど、彼らも、僕らがやり始めたころと気持ちが違うわけ。みんなは、関東から来たように、理屈いうか、理論でものを作る。特に現代美術は理論がなかったらあかん、とかいうとこで入ってくるわけ。でも僕らは理論でなしに、そういう修練をやらされるし、なんかそういうことやるにしたって、みんなでそういう考えでやる。で、自分の名前いうのが出ないわけ。そのグループで作品を作ったって。結構学生も多いんよ。武蔵美行って、休みの時帰ってきて、僕らのグループ入ってるやつもおるわけ。そういう人はやっぱり絵の方へ行くんやけどね。そういう人もおるから、ここでデッサンを表現にどうつなげていくんかいうことには、興味あるんやけど、「自分は自分」いうのを持って来るから、どうしてもその人らとやってると違ったら、やっぱりやめていくわけ。やっぱり言葉が欲しいわけ。「なぜそれをやるんか」という。

ぼくらのグループも、最初にリーダーがおったわけ、僕の前に古川いう人が。その人がすごく理論的な、いろんな行為とか、現代美術とか、これからの美術をどうしていくのかいうことを、うまくしゃべれる人やねん。ものすごく口が立つ人で。その人は体がちょっと悪くてね。ぜんそくで年に2回ぐらい救急車で、ほんまに死ぬ目に遭うんやな。そんで、なんぼ彼も理論とか言葉で言うたって、作品にできないんよ。一応僕は、そういう制作の方の、展覧会の先頭に立って、リーダーになってやっと思ったんやけど。だんだんいろんな外部から展覧会の要請があったりとかする時に、一応僕は実際の現場で動いている人間で、彼はやっぱり病気も抱えてるから、どうしても自分が言葉で言うのと、実践的にやってると、つながらないわけ。口ばかりになってしまいうわけ。で、「自分はもうやめる」言い出して。僕は困ってもうてね。彼がそういうふう新しい美術世界に向かって新しいことをやるから、僕は付いていくというか、一緒にやろうとしてやったわけ。

おおかた10年近くデッサンとかやってきたんやけど、だんだんそうになったら若い子が、入ってくる人が違うわけ。関東から、そういうふう理論武装しなかったら絵が描けないとか、作品なんかできないような連中になってきたわけ。そんなら僕は、「もう違うな」と思てね。僕はその子らを説得しようとも思わないし、説得したって、説得するものでないしね、こういう世界は。ほんで僕は、「おったらダメやな」と思てね、こ

の研究所に。だからまだまだやりたいことはいっぱいあったんよ。もっと可能性もあったわけ、集団でやるいうてね。だけど僕自身もいろんな問題にぶつかったりして。ほんとに自分たちがやっていくのが正しいかどうか分かんないしね。これはみんなに指導するようなもんでもないしね。僕はもう単身でやっていくしかないって、みんなに「やめるから」言うて。「みんな、やるんやったら続けてやってくれ」いうて僕はやめて。

で、1年間ぐらい、何もしなかった。何していいんか分からへん。もちろん会社行っとうからね。その間はどっちゅうことないんだけど。だけど、なんにもやってなかったら、会社の仕事も手に付かんいうか、おろそかになってしまうような感じで、これは良くないなと。ただ、何かやりたくてウズウズしてくるわけ。でも何やっていいんか分からへんわけ。今まで集団のことばかりしか考えてなかったわけ、作品っていても。だから何やっていいんか、どうしていいんか分からへん。何考えても分からへんわけ。

僕は研究所やめて1年ぐらいした後に結婚したんや。働きながら、美術になんかひっかかりながら結婚して。何もやってないんだけど、「結婚して、まだこんな美術なんか続けていけるのかな」とか。生活は会社行っとうからどっちゅうことないんやけど、それがずーっとあって。でも、結婚した時かな、もうそれがどんどん高まってもうてね。なんかもう、やりたくて仕方なくて。結婚したし、これから何かやるんやったらやっぱり基本的に食べていかなあかんし、人間やから稼がなあかんのやから、なんかそういう中でやろうと思たんが、家を改造して、家の生活を全部見せて、展示場も家の中でやろうかなと思て。

その時に、展覧会やった時に頭を半刈りして。それは、どっかに頭の毛をやりたいうのが前からあったんやけど、いつやってええんかも分からなかったし。前から牛ちゃん（篠原有司男、1932—）の半刈りとか、（マルセル・）デュシャン（Marcel Duchamp）の星型いうもんをすごくやりたいうのがどっかにあったし。今度は自分でやる展覧会やから好きなことやっていいわけ。僕はあんまり美術とか意識しないでやるほうやから、何やってもいいんやから、ほな頭も。せっかく日常とか生活使うんだから、日常と家を使ったりとか、頭の毛とか、服装でもそうやけど、やっぱりそういうとこも作品にしたらいいんちゃうかなと思て。そんで一つのヘアスタイルを半分にするいうのか。

いろんな人が見に来たり、近所の子が見に来たり、いろんな近所のガキがいっぱい来るわけや。「頭の毛半分の人何かやっ取る」いうてな。みな近所中に配って、案内状を。新聞の折り込みを近所に配った。それがね、安く配ってくれるんよ。1軒1軒訪問しよったら大変やん、僕ら。

池上：折り込みで。

榎：そういう折り込みで。朝刊はもういっぱい広告載っ取るから、夕刊に入れてくれいうて新聞の販売所に頼んで、みんな近所に配った。したら子ども来るんや。「半刈りのヘンなおっさんが何か家でやっ取る」いうて。それは僕の家だけでなしに、家のバス道とか、そんなとこに作品置いて、家へ導入するようにしとるわけ。

池上：その時お宅はもう須磨にあったんですか。

榎：その時は長田にあった。育英高校の近くやけどね。ちょっと山の方で、階段上がったたりして。そういうの、「面白い展覧会や」いうて。近所の人もうね、親なんかは、僕が絵描きやとか美術家やと思わないんやん？ 宗教家かヤクザか。ヤクザにしてもおかしいし、宗教家でもないしな（笑）。なんかヘンな、「展覧会いうて何やっとなんやろ」いうて、家を変なことして。子どもが「見たい」言うから、冒険心がある子が来るわけや、お母さんと一緒に。

池上：お母さん心配だから来るんですね（笑）。

榎：「見たい言うから」ってチラシ持って来とるわけ。「いやいや、入って見てください。お母さんも入って」「いや私はもう表で待ってますから」いうて。「子どもだけ見せて」とかいうて。子どもが入って、いろんな。そ

の時に半刈りで街を歩いた映画とか、その頃作った映画とかそんなんを見せて。映画いうたって8ミリで撮ったやつやけどね。1室暗い部屋作って、映画をやったりして。いろんな差し入れとか、ケーキやいろんなものもってるから、来た子どもにジュースとかあげて。

池上：それは嬉しいですね（笑）。

榎：子どもは緊張してドキドキしながら、映画観たり、いろんな作品観たりしとるわけ。また作品が面白いんや。家の中にトイレがあったりとか、6畳の部屋を2等分した畳があったりとかね。山からずっと管を引いて、家の外から山の音とか鳥の声とかを家の中に導入したり。海の音。南は海でね。船の音とか車の音が聞こえる。それを家の中に導入して、そんな部屋作ったりね。部屋の中にサボテンが1個あって。風とか水とかが植物へあたる、なんかそういう装置を作って。みんな子どもがごっつう喜んで。

池上：面白そうですね。

榎：須磨で採ってきた石とか砂を利用した作品とかね。子どもが見て、緊張して帰りよるわけ。お母さんが「どうやった？」という感じで待っとるわけ（笑）。「面白かった」とか言うてな。それを学校で言うわけ、子どもが。

池上：どんどん来るんじゃないですか。

榎：来るんやねん、もう（笑）。ようけ来るんや、いっぺんに10人とか15人。

池上：お菓子足りないですね。

榎：お菓子ない。

江上：最初は豪華やけど（笑）。

榎：そう言うたいうてな。お菓子、ジュースくれたって。そんなん面白かったりしてな、すごく。その時に知り合いの絵描きさんが。向山さんいうて、さっき言った原子物理の学者さんの奥さんが絵描きさんやったんや。二紀会におった僕の先輩のそこへ奥さんが絵を習いに行っておってね。僕とその宮地（孝、1907—1991）さんいう絵描きさん、もう亡くなった人やけど、その人が僕とすごく付き合いがあった。その人もシュール的な絵を描く人でね。僕がこういう展覧会やっとなるから見に行ったらええいうことで、その人も須磨やったから、うちへ来てくれたわけ。話しよったら、だんなさんがハンガリーへ、アカデミーの大学で物理学教えてるからいうて、「半刈りしとるんやから、どう？」いうて。「おお、行きたい！」いうて。「ほんないっぺん手紙書いてみるわ」いうて、奥さんが手紙書いてくれて。そんなら向こうの大学のほうから、ビザとかそんなのが取りやすいようなメッセージくれて、ぜひ大学に来てくれという感じで。それでハンガリーに行くようになった（1977年）。だから、だんだんそういうので人とかといろんなんでつながって。

池上：ハンガリーまで来たところで、かなり長い間、お話を聞かせていただいて。お疲れだと思うので、次回、またぜひ続きを聞かせていただきたいと思います。

## 榎忠オーラル・ヒストリー 2012年4月10日

神戸市西区の榎忠アトリエにて

インタビュアー：江上ゆか、池上裕子

書き起こし：永田典子

池上：前は、ZERO を脱退されて、自宅で展覧会をされたというところぐらいまでをお聞きしたのですが、実は ZERO を結成された辺りでやっておられたハプニングの話をあまり詳しくお聞きしてなかったんで、体を使った表現活動から今日はお話を聞こうかなと思っていて。最初に戻ってしまうんですけど、裸のパフォーマンスですよね。これは 1970 年に銀座でされたやつですね（「裸のハプニング」銀座歩行者天国）。あのあたりから、直接行動というか実際に体を使って表現されたというのが始まったのかなと思うんですけども。万博は大阪でやってるわけなんですけど、それを、印を焼いて、東京でパフォーマンスというか路上を歩こうというような、何かきっかけはあったんですか、思いつかれた。

榎：きっかけうかね。僕も田舎でね、子どもの時分祭りに参加して、太鼓たたいたり、獅子舞とかもやるんだけど。その時秋祭りがほとんどやけど、収穫とかね、そういう。親戚の人が集まったりなんかして、田舎のことやから手打ちうどんを打ったり。ごちそう、お寿司とかうどんなんかでお客さんとかそんなのを招待するというか。年一回そういう楽しみがあったわけね。近所の人とかそういう人と。自然なんかを相手にするから、農作物とかいうたら。やはりそういうものに対してのお祝いであり、来年に向かってまた、そういう生活の基盤の中で祭りうもんがあるわけ。

その時、僕も田舎から都会へ出てきて、美術とか絵のほうに関わってやりだしたんだけど、街なんかは高度経済なんとかいうて、お祭りみたいなんを大阪の方でやるとかね。

僕は田舎を出てくる時、お金がないからずっと列車に乗って来るんだけど、土地を買収してるわけ。その時に桜のマークがね、エキスポ何とかいうて、ごっつい桜のマークで。ずっと田舎をの土地を買収して、新幹線をつくるとかそういうので。まだその頃は山陽の方は通ってなかったんかな、新幹線は。大阪までは来てたんだけど。その後そういう買収とかもあるしね。なんかお祭りみたいな感じで大阪でやるとかいうて。まあ言うたら国の祭りやん？ それも企業とかでやってるような。言うたら、僕らよう分からんけど、金儲け主義いうのか、なんかそういう祭りであってね、僕はあれは祭りと思ってなかったわけ。

池上：祭りって、コンセプトには挙がってましたけどね。

榎：そう、でもそういう疑問を感じてた、ずっと。万博やるというのも分かったし、歩行者天国いうのも。公害とか起こした企業とかが、人間を閉め出す感じで歩行者天国ができたわけ、8月2日に。それを聞いたからね。だから祭りというものに対しての、僕自身のひとつの表現方法で。そういう（万博のような）祭りもあるかもわかんないけど、僕は、否定とか肯定ではないんだけど、祭りって、僕にとっては自然の恵み（に対するお祝い）というのか。そういうことで太陽の光を体に焼き付けて。8月2日が歩行者天国の最初の日やったんや、日本で初めて。六大都市でそういうのができたんだけど。神戸でも大丸前とか2か所ぐらいあったんかな、1か所やったんかな。土日か、日曜日だけやったか。それは8月2日神戸でもあるんやけど、僕は、神戸でなしに東京という、今で言う「セレブな街」いうのか、そこを選んでね。新宿とかあっちの方にもあったんやと思うんやけどね。

池上：でも銀座へ。

榎：そう。僕は銀座という、とりすました金持の場所を選んだ。それで体に太陽のエネルギーを焼き付けて。4月、

5、6、7……おおかた4か月近くかな、ずっと焼き付けて。

池上：その春の時点で、夏にこれがオープンするということを知っていて？

榎：うん、それを目指してずっと焼いてたわけ。

江上：目指して、行くつもりで焼いてた。

榎：うん、行くつもりで。春はまだ寒いんよ、ちょっとね（笑）。だからよっぽど天気がいい日に準備して。まあ助手がおってね。会社で昼休みに焼くの。

池上：そうだったんですか。いつ焼いたのかなと思ってて（笑）。

榎：食事の後ね。会社で弁当とか食べて。

池上：じゃあ昼休みの小一時間。

榎：そう、道端で。

江上・池上：道端？（笑）

榎：会社の通りの前へ出てね、段ボール敷いて、裸になって。

池上：それ自体が一種のパフォーマンスですね。

榎：そうそう。ビニールで型紙作って、布のついたビニールを切り抜いて。万博のマークを切り抜いて。そしてずれないように助手がおるわけ。それが、僕がパッとご飯食べてひっくり返って寝てたら、ちゃんと合わせて貼ってくれるわけ。

池上：セロテープみたいなもので留めるんですか。

榎：セロテープでなしに、接着剤みたいな、簡単にひつつくやつで。それはだいたい30分ぐらい焼くわけ。1時間ぐらい休憩が昼休みあるから。もう汗が出てきたらね、その接着剤もだんだんとれていって、だいたい30分ぐらいしたら剥がれてしまう感じかな。そういう中で毎日ずっと焼き続けていくというか。そうしたら太陽受けて、結構まぶしいんよ、真上見て。だけどすごく太陽から力をもらってるというイメージがあるわけ。そうしたら汗が出るでしょ、だから入った分が出ていくような感じがするわけ。天からエネルギーをもらったという感じがものすごくあった。それが証拠として、汗として流れていくからね、余計すごく実感として感じられるというか。なんかそういう自分だけの世界をつくって、色々想像してやるわけ。もちろん、5月とか6月って雨とか梅雨が多いから、焼く時間は少ないんだけど、一応8月2日を目指してやっていくわけ。

池上：すごくきれいに焼けてますもんね。

榎：うん。そうしたらなかなか消えない。春のゆるい光から焼いたらなかなか消えない。夏の海水浴とかで、みんないろんな型貼ったりなんかしてやってるやん？ あんなのはもう2、3日したら消えたり、1か月でと

れてしまうんだけど。

池上：さめてしまうんですね。

榎：これは2、3年、もっとやったかな、消えなかった。背中は、このへんにチョウチョがおったりするんだけど。前だけと違うの。

江上：裏表で焼いてたってことですか。

榎：その時は、場所をちょっと横になったりとか、そういうふうにして焼けるから。それを主力に焼いていくんだけどね。

池上：実際にこれは、銀座でされて、すぐに捕まっちゃったということだったんですけど。

榎：うん。

池上：実際、時間的にはどれくらい歩かれたか覚えてますか。

榎：5分か10分ぐらいちがうかな。10分、もっとあったんかな、時間が分からへんねんけど。昔、銀座に村松画廊というのが地下にあったんや。地下にあった時代やから（注：村松画廊は1942年銀座で開廊、1965年10月から1977年1月までは銀座7丁目パールビル地下1Fにあった）。そこで僕の田舎の速水史朗という先生が個展をやってたわけ、焼き物で、お化けかなんかいうて（注：1970年7月27日—8月2日）。

池上：お世話になった先生ですよ。

榎：そうそう。その人がやっとして、そこで服脱がしてもろて（笑）。

池上：楽屋みたいなところがあったんですね。

江上：先生、共犯者やん（笑）。

池上：そうですね（笑）。

榎：先生は何やるのか知らなかったわけ。「先生、ちょっと行って来るから」いうて。

江上：「ちょっと脱がして」みたいな。

池上：そのまま出て行くとは思わなかったんでしょかね。

榎：ほんと10分、15分やったかな。最初はいいんだけど、初めてやん。裸で銀座行ったら、もうすごい人やったんや、初日やったから。そうしたらすぐカメラマンとかあんなのが近寄ってきたりとか。

池上：報道者がすでにいるわけですね。

榎：初日やからね、ヘリコプターもドーッと写真撮りに来たりとか、そんなすごい感じやったんかな。その時は学生運動とかそういうのがまだ残ってたんかな、社青同（日本社会主義青年同盟）とかそういう連中が。

池上：1970年ですもんね。

榎：そういう人が「反博」みたいな感じでそういうところへ来るわけ。で、機動隊が追い出したところやったんや、その学生らを。

江上・池上：ああ。

榎：その時僕がひょこっと出て行ったからね（笑）。変なところで捕まえよったら、彼らがまた引き返してくるからね。だから捕まえんとこ、どこで捕まえるかって無線でピピピやってたみたい。そういう人たちがおって、無線で連絡しよったのは分かってたけど、何のことが分からなくて。カメラマンに取り囲まれて、「ポーズしてくれ」とかね、なんかもう足がガタガタになってもうて。それからかな。

池上：「歩行者天国で何かやったろ」というような若者は、ほかに学生運動関係の人たちでいたんですね。

榎：そうや、おったわけ。それはもう完全にたぶん万博とかそういうものの反発でやってるんやと思うけどね。もっと違った意図があったのかも分からんけど。

池上：最初から、「天国」と言いつつかなりコントロールされた空間だったということですね。

榎：そう。ほんとの時間って分からへんね。銀座4丁目の手前の方ですぐ機動隊の人に囲まれて。僕小さいから、ひょこっと持たれてね（笑）。両手で持たれて。

池上：そうなるだろうな、とは思ってました？

榎：全然思っていない。

池上：もっと悠々とこう。

榎：もっとドーッと、悠々と歩けるかなと思って。たぶん「なんでそんなことやってるの？」とかそういう質問みたいなものがあるとは思うし。ああいうもんで、それに触発されて、ガーッと出てくるやつがおるわけ、「オレもやる！」とかね。そういうやつもおるし、ある意味危険な面もはらんでるわけ。どんな人間がおるか分からへんから。そのへんがハプニングの怖いところでもあり、面白いところやけどね。そうしてるうちに機動隊に捕まってしまって。

池上：身の危険というか、やっぱり怖かったですか。機動隊に……

榎：全然怖くない。僕、やるまでは色々心配したり、不安がったり、怖いとか、想像したりするんだけど、やり出したらもう全然怖いと思わへん。そんなふうには囲まれて捕まってもうて、今はきれいなポリボックスになってるけどね、4丁目のちっさいポロっちい交番所、交番所というより中継所みたいな、監視所みたいな感じのポリボックスへ放り込まれて。4、5人入ったらもういっぱいみたいなところでね。パトカーが準備して待っとなの、毛布なんか積んでね（笑）。

池上：連行する。

榎：それで帰らせてくれへんわけ、色々質問されて。「今晚は泊まってもらわなあかん」みたいな感じで。誰か身元引受人か、「そういう人いないんか」とか言うて。しゃあないから、僕、明日会社行こうと思っててね。

池上：1泊2日の予定だったんですか。

榎：そうそう。日曜日やったからね。月曜日には帰って会社行かなあかんと思ってたから。そうしたら帰してくれへんみたいなこと言うから、これは困ったなと思って。それでさっきの村松画廊の先生に連絡して、釈放の身元引受人いうのか。

池上：身元保証人ですかね。

榎：「引受人がいなかったらあかん」いうて。しゃあないから先生呼び出して。ほんなら先生、ニコニコしてやってきて（笑）。「何しとんや」いう感じで。「こんなことやとったんか」言うて。で、今度先生が調書とられて。先生、なかなか職業を言わへんのよ。「職業は？」「いや、ちょっと」「どういう関係？」「いやちょっと絵のほうの教え子」とかなんか言うて。「いや、アンの職業や」いうて聞くんやけど、なかなか職業言わへんの（笑）。で、とうとう先生も言わなあかんようになって。その時はもう高校の先生になってたんやけど、まあ言うたら教師やん？「どういう教育しとったんや！」いうて、ごっつい先生がしぼられて（笑）。「ここはニューヨークと違うんだから」いう感じで。それでまあなんとか現場釈放いう感じで帰してくれたんだけど。先生が展覧会をやっているということで、田舎におった、東京に出てる連中が先生の展覧会を見に来てたわけ。それらと一緒にいろんなとこへ飲みに行ったりなんかしたら、屋に全部中継やってたわけ、全国で初めての歩行者天国を、テレビで。いろんなとこに飲みに行ったらね、みんな見とるんや、そういうバーとかスナックの店でも。そのママさんなんかが見とって、「わー」いう感じで、「さわらせて〜」って。

池上：「さっきテレビで見たわ」って。

榎：ほな、お小遣いくれたりただで飲ましてくれたり。また友だちが面白がっているんな店へ連れていってかれてな、「オレの仲間や」「友だちや」いうて。

池上：その日のうちに帰れたんですか。

榎：いや、とうとう帰れへんようになってもうて。

江上：釈放はされたけど帰れなかった。

榎：もうその晩は飲んで、泊まってしまっ。

池上：この頃って、やっぱり「ハプニング」という言葉を使ってはったんですか、みんな。

榎：あんまり使ってなかったなあ。

池上：「ハプニング」という言葉も使ってなかったんですか。

榎：いや、使ってたのは使ってたと思うけど、あんまり意識、ハプニングするという意識ではあんまりなかったかな。「ハプニング」という言葉はあったしね、そういう感じで。

池上：今だと「パフォーマンス」とかも使うじゃないですか。

榎：その頃は作品とか美術で、ハプニングという表現の仕方というのはあんまりなかった。「ハプニング」というのはあるんだけどね。これは、突如やってびっくりさすとか、突如生まれたとか、偶然性とか、そういうのを狙ったような表現の仕方やから。計画して、「今度どこどこでやるから」という告知したりとか、そういうものと違ったからね。だからわりと突発的なものが多かったかな。

池上：でも榎さん自身は、何か月も準備されてやったわけですよね。

榎：そうや。

池上：やっぱり一つの作品としてやってるんだ、という意識でしたか。

榎：どっかではそれはあるんだけどね。その頃は身体を使ったような作品が写真としてよく出だした。身体測定とか、裸になって寸法みたいのを計ったりとか、写真で作品とかは出てたんだけど、僕はそんなのはやりたくなかった。それを作品にするとか、作品として展覧会に出すとか、そういうのは僕はあまり興味なかったし、やりたくなかったし。そういうものでなしに、何か自分の体を使ってやるハプニングは、あんまり写真で作品としてやるというのは、僕はしたくなかった。

池上：やることのほうが大事。

榎：そう、やることのほうが大事やから。

池上：だから銀座のほうは写真があんまり残ってないですね。

榎：ほとんど残ってない。たまたまこれも週刊誌か、『週刊明星』か何かが撮ってくれたんかな。

池上：万博の会場でそれをあらためてやった時というのは。

榎：これはまたね、『KOBECOCO』（注：『月刊神戸っ子』）というのがあってね。そこにコマーシャルとか使ったり。上島珈琲いうて、缶コーヒーができた頃やったんや。その写真を、万博の前で、缶コーヒーを持って写真を撮りたいというので。だからわざわざハプニングするつもりで行ったというのでもないんだけどね。それを頼まれて、コマーシャルみたいな感じで。缶コーヒーが、神戸の上島珈琲って有名なとこやけどね。

池上：UCC ですよね。

榎：出始めた頃やったんかな。そのコマーシャルみたいなんで。ずっと写真撮ってくれてた米田（定蔵）さんという人がやってくれたんだけど。それもたまたま万博いうとこでやったから。「万博行こう」という僕から思っ  
てやったんじゃないわけ。

池上：横でコーヒー持って写真撮って、榎さんがモデルだったという。

榎：そうそう。

池上：上を脱いでモデルしてという？

榎：そうそう。

池上：面白いですね、それも。こうやってずっと焼きが残ってるから、どこでも脱いでしまえばハプニングみたいになるわけですよ、ある意味。

江上：そのつもりがなくても。

池上：それもおかしいですね。さっき祭りというので、ZERO のほうで皆さんとされたハプニングなんかでも。

榎：これは《虹の革命》（1971年）やね。

池上：《虹の革命》のあたりからお話を聞こうと思ってたんですけども。これも第一回神戸まつりでやってらして。いま大阪万博の祭りというのにもちょっと抵抗があったというお話だったんですけど、神戸まつりに関してはどうですか。

榎：べつに僕は、祭りに反対だとかは、さっきも言うたように（別にない）。これ（《虹の革命》）は元町でやってるわけ。神戸まつりというのは、フラワーロード、市役所の前とか、あの一角が一応メインになってるわけ。元町は2丁目か3丁目までは結構人がおるんだけど、4丁目から西いうのはもう全然人がいないんよ。古いんだけど、跡を継ぐ人もいないし、寂れていくというのか。そういうところで元町画廊の佐藤（廉）さんいうて、亡くなったんだけど、ちょっと変わった、面白い人やけどね。僕らが活動する場所とかをいつも佐藤さんに、「どっかないか」とか「街中を使えないか」というて。その時、彼が元町の商店街の会長みたいなのをやってたわけ。それで僕ら、街中でこういうことやりたいというプランを持って行ったんや、「場所貸してくれないか」と。「ほな頼んでみたる」ということで。昔は結構元町ってすごいハイカラな有名な街だったんだけど、神戸まつりで三宮に取られてしまって、寂しくなってしまって。

池上：ちょうどその頃だったんですかね、街の中心が三宮に移ったのは。

榎：もうちょっと前やろね。まだこの頃は市電が通ってたような時代やったから。それで、そういうプランを持っていったら、センター街の人も、通路とかあいうのでもずっと貸してくれるようになってね。で、10万円くれてね。

江上・池上：へー、すごい！

榎：向こうから協力金で、好きなことやっていい、いうて。それで神戸大学とか甲南大学とかいろんな学生も集めてね、音楽をやってるやつとかそんなのを集めて。一人参加費500円で。そういうお金で衣装とか。これカラーじゃないけど、虹色なんですよ、みんな。そういうのを作ってね。シリコンで面作ったりなんかして。

池上：「虹」とか「虹人間」というのはどういうところから考えられたんですか。

榎：虹って、太陽の光でいろんな色に見えたりいろんなものに反射したりとか、そういう太陽いうのはもちろんあるんだけど。それとその頃、髣髴いうのがあって、そういう虹なんかを使う人もおったりするし。カラフルやし、きれいやし、そういうとこで虹を選んだのどちがうかな。

池上：これは榎さんの発案？

榎：ううん。僕らはだいたいいつも10人、20人集まって、「何しようか」って。

池上：みんなで話し合いながら決まっていって。

榎：そうそう。衣装なんかでも、安く、布とかそんなのを使って。色も簡単な七色の色とか、そういう感じでやって、街の中で寝てみたりとか。商店街を何十人かズラッと、どんどん寝ていくわけ、パタパタパタッと。ずっとそういうことをやりながら、音楽とかいろんなハブニングみたいなのをやって、最後は大丸の前で。

池上：これは大丸の前ですか。(注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、21頁)

榎：うん、ちょうど大丸の前。今はどこになるのかな。本屋が、昔角にあったんやけどね。今は地下鉄の入口になったりしてるけど。その前に市電が通ってた、そこを借りて。虹人間が神戸の街に突如誕生して、それが消滅していくまでの、一日の虹人間の生き方というか、新しい人間が生まれてくるというのか。だからひとつの、革命ではないんだけど、そういう新しい人間が、騒いでいろんな表現をしたりするんだけど、最後は朽ちていくという、だんだん。その間に途中で自殺するやつもおるし、首つり人間が出てきたり。最後にトアロードか、今はもうなくなった亀井堂とかね、ドンクとか、ヤノスポーツがあったんかな。その前でみんな力尽きてパタパタ倒れていって、死ぬめとか、消えていく。そういうストーリーになってるんだけど。この広いところに泥絵の具をぶちまけてね、ドーッと道端に。虹色に染めていくというのか。それも最後に大丸の人が全部掃除に来て。

江上：へえ、すごい協力的ですね。

榎：ごつつう協力的やったんや。

池上：今だとちょっと考えられないですね。

榎：僕ら、そういう神戸の若者文化いうのをやろうということだね、みんな集まって話してた時期。ちょうど70年代頃に、僕が銀座でやった後、神戸でもそういうのをやろういうて。神戸だけでなしに関西の、京都とか大阪とかの連中が集まって。その時に集まって、よう集会を。学生会館って知ってるかな。阪急のちょっと山へ上がったとこに。

江上：六甲のどこ？

榎：阪急六甲か。

池上：ああ、あります。今もありますね。

榎：そこを借りて、そこを集会所にしているんな討論会をやったり。国際会館の何階かを借りて。結構 50 人から 100 人ぐらい集まってね。建築家とか音楽家とかいろんななのが集まって。その頃、まだ維新派の、あれ誰や。

江上：松本（雄吉、1946—）さん？

榎：彼なんかも来たりね。一緒にやろう、いうて。彼とは結構仲が良くて。近いうちに維新派を立ち上げる前やったのかな。布施の方まで一緒に行って、話したこともあるけど。そういういろんなやつがおって。

江上：学生さんとかもみんな集まってきてたんですか。

榎：学生はいなかったね。ちょっとはおったけどね。

江上：もうちょっと年が上の？

榎：ちょっと上。

江上：卒業して、働きながら色々。

榎：そうそう。これ（《白い布 400㎡のハプニング》1972 年）も神戸まつりの一端やけどね。こういうとこ（神戸まつり）にまざれたら結構できるんよ、こういうことが。普段こんなことできないよ。大きい布使ってね。噴水の周りでも、30 メーターの直径があるんよ。この噴水を止めようというてね、噴水に布を。

池上：噴水を止めようということなんですね（笑）。

榎：うん。布をかけとるんや、これ。これに日が当たったらものすごくきれいなんや。ピーッと、西日が布の間からピーッと飛んでるの。ものすごく美しい世界やね。それで怒られるねん（笑）。

江上：これは後で怒られたんですか？

榎：これはやっぱり最後に怒られた。

池上：これはじゃあゲリラ的にやられたんですか。

榎：みんなゲリラ的。

池上：でも、元町の時はゲリラ的でも協力を得られて。

江上：街の人は協力してくれて。

榎：そうそう、向こうの人は知ってたというか。一般の人はもちろん知らないんだけど、「何かな？」という感じで。こういうとこで色々計画立てて、布を持っていろんなとこへ行くわけ。ゲリラ的にやるんだけど。空いてるとこ使って。

池上：こうやって普通に道路を行進してるとお祭りのパレードみたいできれいですけど。

江上：まぎれて。これも普通だったらこういうのはやっぱりやらせてくれないですね。

榎：やらせてくれないよ。これなんかでも、大きい布を下地にして、そこへ ZERO のマークの布を大きく広げてね。この中に僕が入ってるんやけどね。そこでいろんな踊りが始まるわけ。始まる前に、この布からズボンが出てきたり、パンツが出てくるわけ。ほんなら見とる人が想像するわけ、「あ、裸やな」「中で裸やな」って（笑）。そういうふうにいるんなことを、できることをゲリラ的にやっていくという。

池上：これが計画中の写真。

榎：そう。出発する前か、前日ぐらいか、ちょっと忘れたけど。

池上：これは学生会館なんですかね（『Everyday Life/Art Enoki Chu』、29 頁）。

榎：これはどこやったかなあ…… これはひょっとしたら元町の、いろんな組合の集まりがあるようなところを借りたのかもわからん。すぐその前に鴨居さんがアトリエを借りてたところがあったから、たぶん元町やったと思うけどな。

池上：このアイデアをみんなで話し合ってる時に中心人物だったのは、やっぱり榎さんと、ほかにどういう人が。

榎：もう一人、古川清いうて、武蔵美の人やったんだけど、その人がだいたいリーダーで。その頃、丸本耕さんて知らないかな。今はもう年いってちょっと弱ってるけど。その時、丸本さんとか、中西勝（1924—）さんも武蔵美やねん、武蔵美のそういう先輩たちとか。その頃結構、乾さんとか高橋亨（1927—）とか。

池上：乾由明さん？

榎：うん。（兵庫県立美術館の）館長やった木村重信とか。僕ら、ZERO の勉強会をいつもやってたんや。そういう人と呼んで、現代美術いうのか、これからの美術とかの勉強会みたいなのをやりよったわけ、いろんな人と呼んで。そういう関係で。佐藤さんも武蔵美やねん。

池上：ああ、そうなんですか。元町画廊の佐藤さんですね。

榎：そうそう。日本画やったらしいんやけどね。先輩では古川清というのがだいたい。

池上：わりと中心になってアイデアを。

榎：これからの美術にどういうふうに取り組んでいくとか。松井憲作（1947—）とかそういうのもおったんかな。

池上：中心的な方がおられても、みんなで「集団でやるんだ」と。だから個人名は出てこないわけですよ、グループ名はあるけど。

榎：出てこない。

池上：それは皆さん「それが大事なんだ」という考えで？

榎：そうやね。彼がリーダー的に、理論的なこととか、そういうものに対して彼が色々話したりするんだけど、僕は一応それを組み立てて、それを実行していく、実行隊。行動隊というのか、そういう感じやったわけ。

池上：実際にオーガナイズをするという。

榎：彼は、理論とか、絵を描くのも結構うまかったし、そういうことはできるんだけど、動きのもんはあまり得意でないの。どうしていいのかわからないわけ。その辺は僕は結構分かっていたから。

池上：じゃあいいコンビというか。

榎：そうそう。その時松井君とか若い連中が結構手伝ってくれたり、分かってくれたりしてたから。なかなかこういうことって、一人や二人ではできないからね。

江上：そうですね。

榎：集団でやろうと思ったら、やはり街とか環境とかそういうことが問題になってくるから、どうしても個人的な絵とか個人的な作品には行かないの。どうしてもみんなと一緒にやるんやから、いろんな考え方が広がる。命とか、なぜ生きてるのか、なぜ死ぬのか。一人で死ぬのは自殺とか、二人で死ぬのは心中とか、三人以上は何と言うのかとか、集団で死ぬのはどういうものかとか。宗教とかそんなものでは集団で亡くなるとかあるんだけど、そういうものでなしに、生きるとか死ぬとか死んでいくいうて。

池上：テーマがちょっと普遍的になるんですかね、みんなでやると。

榎：そうそう。PLAY（注：グループ・THE PLAY）なんかでも、池水（慶一）さんなんかやってる、自然とか、海とか、山とか、風とか、そういうことがどうしても対象的に問題になってくる。

池上：PLAYの《雷》（《雷 THUNDER》1977～86年）に榎さんも参加されたことがあって。

榎：あるよ。3回ぐらい行ったかな。

池上：ああ、そうですか。

榎：ZEROでやってる時は、僕ら変にライバル意識があったんや。だからPLAYいうたって「ブン」这种感觉（笑）。京都の美術館でも「集団と美術」とかで一緒になる時があるんよ（注：「京都ビエンナーレ・集団による美術」、京都市美術館、1973年）。だけど会場通っても知らん顔よ、わざと（笑）。なんかそんな感じやったかなあ。なんかお互いが意識しとったのか、どうか知らんのやけど。

池上：じゃあZEROを抜けられて、個人だったらべつにいいけども。

榎：僕ね、池水さんカッコいいしな、好きやったんや。すごく「男」いうかな。

池上：あこがれてたんですか。

榎：そう、あこがれというか、カッコええねん、向こうがやるのは。わりとまとまって、ずっと、なんでもね。風に向かって。北海道行ってずっと旅するんやけど、どこへ行くか決めてないわけ。風の吹く方向に向かってみんな、集団で歩いていくわけ。

池上：カッコいいですね。

榎：カッコええやろ（笑）？

江上：シュツとしてる。

榎：彼らはだいたい10人から15人ぐらいの単位やねん。だからわりとまとまりやすい。うちはちょっと人数が多すぎてね。

江上：逆に、さっきの《虹の革命》とかは人数が多くないとできないことですね。

榎：そう。だから僕らがやってるのは、また逆にPLAYができないようなこととか、そういうのもあるし。

池上：次は、神戸まつりの日に合わせてやっていたらっしゃるんですけど、《イメージの箱》(Japan Kobe ZERO、1973年)というのを。これは何人ぐらい。(注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、52-53頁)

榎：これは、箱の中で、さっきの《人間狩り機》(注：京都アンデパンダン展、京都市美術館、1973年2月25日—3月9日)を作ったような構造の組み立ての箱やけど、ここからは出ないんよ。人が出たらあかんの。臭いが出たり、この布の箱の中に段ボールをどんどん積んでいって、ずっと伸びていくわけ。段ボールやからいつか壊れるやん？ 倒れてくるやん？ そこまで積み上げていくとかね。

池上：その時によって見えるものが違うわけですね。

榎：そう。これは色がついとるし、臭いがついた。病院なんかで使うオキシドールとか、いろんな臭いが出るわけ。

池上：不穏ですねえ（笑）。

榎：煙が出たりね。中で発煙筒とか。もうこの中大変よ。中でやってるんやけどね。

池上：何人ぐらい入ってたんですか。

榎：十何人入るかなあ。

池上：次はこれ、次はあれ、というふうに次々繰り出して。これもゲリラ的ですか。

榎：大きい気球みたいなのが入ってるんやけどね。

池上：すごいですね。

榎：バーッと上がっていくんやけど。ここから出るのは、変な宇宙人みたいな、動物みたいな感じでダーッと出ていくわけ。そこからはもう人間が出れないような感じで。

江上：これはこれごと移動するんですよね。

榎：移動する。

池上：みんなが中で歩いて、ということですね。

榎：そうそう。車がついとるの。

池上：ああ。これはゲリラ的にまたやられたんですか。

榎：そう、これも。

池上：べつに「おとがめなし」ですか。

榎：なし、なし。

池上：当時はおおらかだったんだなあ。

榎：僕らは、やる時はちゃんと制服作るの、上が赤で下が白とか。なんか統制とれとるわけ。だから係の人も、「あ、何かちゃんとした手続きやってる」と思てるわけ。

池上：そうか。いちいち「見せなさい」とかないですもんね。

江上：お祭りやから。

池上：パレードにまぎれて、あざむいてるわけですね。

榎：そう。外れたところでちょっとやってるとか、そんな感じ。

池上：それは面白いですね。

榎：怒られてもね、「祭りやから」って許してくれるところがあるから。普段そんなのなかなか許可出ないやん。噴水をああいうふうにするとか、言うたって出ない。

池上：こういう時は交通もストップしてるし、だからできるというのもありますよね。おかしいですよ、これ。村上三郎さんも箱（注：「箱」個展、1971年）の作品がありましたね、全然コンセプトは違うんですけど。あれってちょうど同じぐらいだったかなと思うんですけど。

榎：もっと前ちがうかな。

江上：いや、同じぐらいかもしれない。

榎：そうやな。具体を辞めてからだから。個人的にやってたんや、街中で。

池上：70年代には入ってたと思うんですけど。

榎：彼とはよく飲みに行ったり。「お互いにアホなことやとんな」这种感觉でね（笑）。道端にいろんなもの置いたりとかやとったな。

池上：三郎さんの《箱》は、ほんとに箱を置くだけで、写真を撮ってパッと撤去这种感觉だったみたいですけど、これはもっと生々しさがすごく面白いというか。

江上：動くのがおかしい（笑）。

池上：そうそう。勝手に動くというのがね（笑）。

榎：出てくるのはこういう感じでね。人間が出てこない。人は入ってるんやけど、こういう感じで出てくるわけ。

江上：ここから入って、また。

榎：出てくるのは、みんなそういう何かを。（スティーヴン・）スピルバーグの、いろんな宇宙人が出てくるみたいな感じで。

池上：大阪の万博と神戸まつりだったら、同じ祭りでもやっぱり捉え方は結構違ったんですね。

榎：違うな。ある意味、祭りやったら、面白いことというのか、何かそういうことをやりたいなと思って。

池上：万博は国家の一大イベントで、神戸まつりは、もうちょっと自分たちがゲリラ的にアクションを起こしていける場みたいな感じで、関わり方がちょっと違うのかなという気がしました。ZEROで、神戸まつりでされたのはこの3回ですか。

榎：そんなことはないよ。ものすごいあるんよ、間に街中でやったりね。だけどほとんどこういうところには載ってないけどね。結構怒られたのはね、「日本列島の告别式」いうのをやったんや。さんちか広場でね。

池上：《日本列島への提案》（1970年）ですね。（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、17頁）

榎：告别式いうて、日本列島に反対して、縁起の悪い感じのポスター作ってね。さんちかにお経の音楽をドーンと流してね。それでこれをやったんや。

池上：お経！

榎：普通やったら軽快な音楽が流れとるやん？ そんなのでなしにお経を流したんや。それで埋葬式いうてお葬式やったんや。みんながお祝いとかで持ってきてくれた、献花とかああいう感じのかわりでね、そんなのもらって、ご祝儀もろて、葬式やるわけ、日本列島背負って。これはベニヤ板で作ったんやけど、ほんととは立体

的な日本列島作ってね、布で。ここに、後ろに布が見えてるんやけど、結構大きい、四国や九州や本州を布で。それを最後に埋葬するわけ。その時ごっつう怒られてね。お経流した、いうて。

江上：来た人に怒られたんですか。誰に怒られたんですか。

榎：センター街いうの？

江上：さんちかの人に。

榎：これ、中だけでなく外も行ったわけ。外でもいろんなパフォーマンスするわけ。日本の青森から下関までの、各駅の駅の名前をドーナツとプリントしたやつを、そこの地下街の直線のところに並べて。そして僕は告別式のプラカードを持ってやるんやけど、その時も怒られて。さんちか広場というところでやってるわけ。だけど「ここは貸してるけど、通路とかそういうところは貸してないんや」いうて、すぐ壊しに来てね、業者の人が。とにかく酒やら飲ましてね、「もうちょっと待ってくれ」いうて（笑）。

池上：飲ませてごまかしたんですか。

榎：そうそう。

池上：日本列島を埋葬というか葬式したいというのはどういうところから。

榎：公害にしたって、原発のことにしたって、どうなるのかという、なんか知らんけどなんとなく不安いうのか、そういうのがあったからとちがうかなあ。そういうことがこのひとつのテーマになってくるというのか。

池上：やっぱり万博のこともちょっと考えて、ですかね。

榎：そういうことも含んでるしね。

池上：アンチ万博とか反博とか、ああいう組織的な活動には榎さんは全然加わっていらっしやらないですよ。

榎：あんまり。結構僕らの友だちもおったけど。僕は美術のほうで考えていくような作品をやりたいなと思って。だから告発いうのは僕はあんまり持たなくて、今、自分が何を感じてるか、考えてるか、ということをやっていく。それが、これからずっと原爆のほうとかの作品につながっていくんやけど。

池上：実際の政治活動がやりたいわけじゃないんだ、という。

榎：そう、そんなのでなしに。みんなが、誰でも感じたり、考えていくいうて。普段から日常の中で必要なことなだけで、何か起こればそれを問題意識とかそういう、あまりそういうことでなしに、日常的に毎日考えたりするものであるし、想像力にかなり重きを置いていた。それは、祭りとか、そういう運動があるからいうのでなしに、毎日自分たちが気をつけておかないとあかんこというのか。

池上：誘われたりとかはしなかったんですか、「反博一緒にやろうよ」みたいな。

榎：あるよ。

池上：そういうのは断ってらしたんですか。

榎：断ってる。「僕は僕のやり方でやるから、そういうのはやらない」いうて。

池上：脱退される前の個展のこともちょっとお聞きしようと思っていたんですが。さっきおっしゃっていた《人間狩り機》(1973年)は。

榎：これはひとつの、美術館なのか、そういうところに対して…… その頃まだ平面とかそんなのばかりやったんや。平面も、半分もなかったけど。

池上：その、出品されているものが。

榎：うん。この頃から、監視員の人が、これは作品なのかゴミなのか迷うぐらいな感じの時代やった。けどまだまだ油絵とか、花を描くような絵もあったし、そういう中で美術館へこういう立体的なものを出して。これ、鳩がおる。伝書鳩をここに飼うてるわけ。美術館の中に。3匹、何匹あったかな。それを2か月ぐらい訓練したかな。合図があったら戻ってくるように。最初は美術館の中で飛びまくってたけど、最後飽きてきてね、美術館、平安神宮へ行ってしもてなかなか帰ってこないの(笑)。監視員の人が、「まだ何匹か帰ってない」いうて、怒られたりなんかして。

池上：飽きちゃったんだ(笑)。

榎：この中に餌が入ってるわけ、檻の中に。それは、シリコンで作った面とか電話ボックスとを何十機と入れて、作品らしいオブジェみたいなのを作って。展覧会に来た、作品らしいのを見たい人が入ってくるわけ。入ったらガシャンと、ねずみ捕りみたいになつとるの、ドアが閉まってね。すごい、鉄でできたドアやねん。開かないの。「脱出方法」って書いてるわけ。最低限、分かりやすい日本語で書いてるわけ。どどこも持ってどうしたら脱出できるということを。蓋が開けられるわけ。一人監視員が、たえず僕らの仲間がおるんだけど、その人がアドバイスを後でするんだけどね。だけど、入った瞬間もうネズミと一緒に。説明が書いてあるんだけど、それどころちゃうの、もうウロウロしてね。

江上：「アーッ」いうて(笑)。

池上：恥ずかしいですよ。パニックですよ。

榎：みんなに見られてるから、余計恥ずかしいし、どうしていいんか分からなくなるいうのか。人間いうたってネズミと一緒に、恐怖みたいなのに入ったらどう判断していいか分からないというのか。

池上：観客に結構厳しい作品ですね。

榎：そうそう。けどこういう美術館へ行ったら、中にオブジェみたいなのを置いてたら、ノコノコ入ってくるのがおるいうのか。そういうのの美術いうものに対して、美術を見るいう中で。けど結局は人間だし、生き物だし、自分の身が危なくなったらそういうふうになってしまうというのか。

池上：怒ってるお客さんとかいませんでした？

榎：それはいなかったな。「あぶない」とは言うてたけどね。鳩がよそで糞するやん？ よその部屋でほかの作品に影響を与えたり。そういうふうには物理的には怒られたりなんかしたけどね。

池上：よく怒られますね、やっぱり（笑）。こういうものを出して、美術館も協力してくれたというのも。

榎：うん。その時、今いるかな、名前も忘れたな。平野（重光、1940—）さんやったかな、学芸員の人がおった。その人がわりと ZERO の勉強会なんかにも来てくれて。

江上：京都アンデパンダンに出したの自体はどういう経緯で出されたんですか。ZERO が出したのは。みんなで「出そう」って？

榎：そう。場所取りも早い者勝ちやねん。だからその頃、自分たちも美術館でやりたいものがあれば、もう早うから。僕らも朝 4 時、5 時に出てね、美術館の前に泊まり込んでね、美術館の搬入の時間がきて開けてもらったら、みんなバーツと場所の取り合いやねん。一室取るの大変。

江上：場所をどこからどこまで使う、というのもみんな取り合いなんですか。

榎：取り合い。どこ置くとかね。

江上：花見みたいな。

榎：そうそう。まず最初に行って、自分とこにモノをポンポンと置いてしまうわけ。

池上：ほんと花見ですね（笑）。

榎：どの辺を確保するかは、もう取り合い。

池上：でも、これはいい場所を取られたんだなという。

榎：そう。それは早くから泊まり込みみたいな感じで、トラックで待っとくわけ。PLAY なんかもやってたかな、表でね。

池上：でも、この時点ではお互い敬して遠ざけるという感じで。

榎：関西ではこういうので頑張ってるってたら、ビエンナーレというのがあるの、2 年おきかに。その時に、こういう関西で頑張っている人が選ばれるわけ。その後、ZERO の活動もどんどんこういうところに出て行きだして、ビエンナーレに参加したのかな。それは、天井、美術館の一室がダーツと降りてくるような作品やけど。

池上：それも聞きしたかったんですけど。どこかに写真が出てるかな。

榎：それぞれ。（注：《400? の昇降する天井》、1973 年、『Everyday Life/Art Enoki Chu』、54-55 頁）

池上：1973 年の、あ、同じ年なんですね。

榎：そうやったかな。

池上：京都アンデパンダンの《人間り狩機》も 1973 年だから。

江上 アンデパンダンが 2 月で。

池上：ビエンナーレが 8 月。

江上：春というか冬にやって、それを夏に、ということですね。

池上：こっちのほうは選ばれて参加するという。これもすごいいい写真というか。

榎：これも大変やったんや。美術館の窓全部を黒いので覆ってしまって、光が入らないようにしてね。美術館は、6 メーターか 7 メーターぐらい、天井あったんかな。それを半分に仕切って、吊り天井みたいにしてね。モーターで上がったたり下がったりするんや、これが。それは小泉製麻という、石屋川やなくて……

江上：新在家のとこの？

榎：新在家のところに大きい会社があったんや。今はもうその会社はないんだけど。そこで新しく、ビニールハウスとかそういうので開発された。ものすごく軽いよ。強い光は反射したりとか、紫外線とかはのけて。どっちがどうやったか忘れてけど。野菜とか植物に開発したものを僕らが実験的に使ったわけ。

池上：これ、光沢がある。

榎：そう、銀。それで窓閉めてるわけ。窓閉めてたら、これ鉛色やねん。蛍光灯つけたら、こっちから光って、蛍光灯消したら今度は透けて見える。

池上：視覚的にも面白い効果が。

榎：鉛色がどーっと、美術館にシートが降りてくるわけ。

池上：怖いですね。

榎：これ、横が 9 メーター、長さ 30 メーターちょっとあったんかな。結構大きいんよ。広い部屋やったから。

池上：天井からどこまで下がるんですか。

榎：人の頭、かぶさるぐらいまでね。こういう感じまでずーっと降りてくるわけ。それはすごいんよ、ゴーッと降りてくるから。

池上：背が高い人だったらついちゃう。

榎：そうそう。

池上：それはすごい迫力ですね。

榎：何日もやるわけ。これの搬出とか搬入の時に、東山ちがうわ、大文字焼きとか、ああいうとこにいたずらしに行ったりとかね、絶えず何かやっとなるわけ（笑）。

池上：作品見せるだけじゃなくて。

榎：いたずらやったりね。

池上：こういう大きい布を使う作家でクリスト（Christo）とかもいましたけど、特にそういうのは意識はされてなかったですか。

榎：到底スケールが違うからね。あんまりクリストは意識してなかったんちがうかな。この後ぐらい、県美でクリスト来たんよ（1988年6月5日-7月3日）。《ヴァレー・カーテン》（1970～1972年）かなんかいうて。あの時、「わー、すごいな」と思って。兵庫の、今の原田の森に。

池上：（元）近代美術館のほうに。

榎：《ヴァレー・カーテン》って、山と山の間にオレンジ色のあれをつくったんかな。この時はまだあんまり意識を、それをやってるのは知らなかったと思うわ。

江上：これは再現してみたいですね。

池上：再現したい。

榎：どうなるんやろ。今やったらできるやろか、こんなの。

池上：兵庫県美で、ぜひ（笑）。

榎：これね、自動になってるわけ。モーターを付けて自動で巻き上げていったり。結構長いからね、重みがあるから大変やった。みんなで模型作って、そういう訓練やったりとか。

池上：計算しないと。

榎：張力とかそんなのを計算してやるんやけど。途中でモーターが熱持って、煙が出だしたりなんかして。

池上：怖いですね（笑）。

榎：結構許してくれよったわけ、その平野さんという人が。ここに水を張ってね。30センチぐらい水を張って、広い部屋に、水の中へみんなが入るとかね。その水も、横に川があるやん？ あそこからポンプでバーッと水を入れて逃がしていくというか、そういう感じで。

池上：ほんとにやったんですか。

榎：やろうと思たんやけどね、あの川の水臭いんや（笑）。

池上：お堀みたいな感じですね。

榎：やっぱり生ものいうのか、ああいうのはなんぼ平野さんでもあんまり。面白いけど。それとでっかい鳥居があるやん、あそこの前に、赤い。あそこにブランコ作るとかね。

池上：楽しそう。それはやってほしかったな（笑）。

榎：それはちょっと、平安神宮は許してくれへんやろ、いうて。美術館の中やったら可能かも分からへんけど、外はやっぱり。

池上：それはやってほしいかも。

榎：あんな大きかったら作りたくなるやん？

池上：そうですね。遊び心をそそりますよね。

榎：たえず「ああいうことやってみたいな」とかね。

池上：個展もやられているんですけども。

榎：僕は個展はやってないよ。これ、個展いうたって、たまたまオートバイがほかされとって、事故で。それがあまりにも気になるし。

池上：《Yellow Angels》（1973年）という。

榎：警察とか「いいかげんやな」と思て腹立つわけ。で、こういうふうにきれいに、危なくないように色塗って。黄色やねん、線とかああいうのが。同化さすいうのか、自然いうのか、危なくないように。時々燃やされたり、いたずらされたりすんの。何回かそんなのがあって、またペンキ塗り直してちゃんとしよったら、警察が来て、「こんなとこでこんなことされたら困る」いうて。「なんでや」いうて。道端にこけとってん、油だらけになって。あまりにも危ないし、きたないし、汚れてしまって。僕は、危ないから、保護するというのか、きれいに自然に返すというような感じで黄色い色塗ってしてるのに、「あんた何や」いうて。もちろん警察の格好して来てるんやけど。「なんで今頃そんなの言うの。これ何か月も前からほかされとったんよ」いうて。「近所の人から通報があったからいうて、通報がなかったら来ないんか」いうて、初めて警察に逆に文句言うて。向こうが後で、「よろしくお願いします」って。（笑）

池上：今まで怒られてばかりだったのが、「オレはいいことしとるんや」という。

榎：その時思いきり怒っといた。「自分ら、こういう事故が起こったら、誰が起こしたか、そんなの調書もととるんやろ。分かるはずや」「そのままほったらかして、いいかげんや」いうて。

池上：これは、あるものに、気になって手を加えたという感じで。「作品作ったんです」、という個展とはちょっ

と違った個展ですね。

榎：そう。だから日常でね、自然に返すという。簡単なハガキの案内状だけで。家に帰る時に、タクシーに言うたら、「あ、黄色いオートバイがあるところですね」って（笑）。有名になっとるんや。目印になってたというか。

池上：それで結局警察が粗大ゴミとして持って行った？

榎：市が、たぶんね。

池上：警察が連絡して、「持って行ってよ」ってことになったんですかね。

榎：うん。案内状も、「期限は永遠に」いうのか、そういうので。

池上：無限大マークがついて。

榎：無限大でね。

池上：そういう街の人々とか警察の姿勢も浮きぼりにされるというか、面白いですね。

榎：ああいう人ってほんまにええかげん。危ないとかそんなの分かっとるんやったらね。みんなを守るためとかなんか言いながら。だから結構腹立って言うたわけ、「なんで来たんや」いうて。電話があって、近所の人が見とって、「本人が現れとるから」いうて、「注意してくれ」言うたんかしらんけど。「それがなかったら来ないんか」いうて。僕は見かねて、危ないし、そう思ってやっとな、「あんた何も感じんのか？」いうて。「いやー……」いうて向こうも言葉に困ってしもうてな。

池上：恐縮してたんですね。次の年の《We Captured a Small UFO at Last!》（1974年）という、これは作品を作った個展を久しぶりに。

榎：そうや、UFO 作ったんよ。

池上：作って捕まえた（笑）。

榎：ここになかったかなあ。家か。3種類作ってね、パーッといろんな。近畿のUFOの研究者っておるの。会長がおるわけ。その人のところを訪ねて行ってね、UFOの情報とかデータをもらって。写真もそこから借りてきたのが多いんだけど。そのUFOを捕まえた、いう感じで。その頃できた、いろんな、僕が世話になったところを爆撃してる。

池上：お世話になったところを爆撃してるんですか（笑）。

榎：こういうUFO作って。何十機いうて。那智黒いう黒い石があるの。そこへ星型とかあんなのしてね、蛍光塗料ですっと星をいっぱい描くの。そうしたら中に、蛍光塗料でやってるから、ブラックライトでやったから星がいっぱいパーッと出てくるわけ。

池上：あー、きれいですね。

榎：その中に UFO が捕まっておるわけ。で、この UFO はしゃべるの。

池上：しゃべるんですか（笑）。

榎：最初やったのは、光やったかな、光に反応してしゃべるわけ。

池上：何語をしゃべるんですか。

榎：宇宙語をしゃべるの（笑）。僕がなぜ捕まえてこういう展示会をやったかいうたら、神戸の街を爆撃して、いたずらするわけ、UFO が。だから「なぜいたずらするんか」いうのを聞きたかったわけ。それで捕まえて、確保してね、檻みたいなのを使ってやったんやけど。最初やったのは「パール」いう喫茶店でやったんやけど、サンプラザの。サンプラザができた頃やったかな。捕まえて、檻の中入れて。光に反応するから、この部屋は暗いから、ドア開けたら、バツと UFO がしゃべりだすわけ。1 個がしゃべったら、作動して、次の UFO にしゃべっていくわけ。ビビビッと。

池上：連鎖して。

榎：連鎖して、30 機ぐらいがババツとしゃべりだすわけ。結局、宇宙語やし、「何しゃべっとるのか分からなかった」みたいな、バカみたいな（笑）。

池上：「なんで爆撃するの？」っていう答えは。

榎：分からなかったわけ。それは、僕が考えて、いうことやねん。なぜそういうことをやったのかいうのは、僕自身が考えることであって、UFO に聞くのは間違いいうか。結局、UFO も僕が作ったやつやからな（笑）。

池上：そうなんですけどね。これは市役所？

榎：市役所。新幹線ができた頃やったんや、新神戸やな。貿易センターもできた頃やった。生田署もこの後爆撃されて、生田神社の上の方に行ってしまったんやけど。文化ホールもできた頃やったんかな。まあ何年かしてたよ。

池上：これから神戸が一番いい時代に入っていきますよ、というその準備が整った頃という感じですかね。

榎：いいかどうか分からんけどね。

池上：そうそう。

榎：まあ言うたらハコモノばかり作って、いう感じがあったんかな。

池上：その時代に突入しようとしていたわけですよ。

榎：それをなんか不思議がって、UFO がやったのか、どうしてやったのか知らないけど。貿易センタービル、この間ニューヨークでテロがあったやん。

池上：ちょっとそれを思い起こさせるような。

榎：これは県庁とかさんちかやろ。これはどこや？

池上：このヌードのヘンな像、ありますよね、今も（笑）。

榎：新谷いうの（注：新谷琇紀、1937—2006。神戸を拠点とした具象彫刻家。多くの作品が市内に野外彫刻として設置されている）。こっちでは、世話になった県美も。

池上：お世話になった県美も爆破してます（笑）。そうか、やっぱり榎さんとしては、こういうハコモノがガーンとできて、神戸の街が変わっていくというようなところに何か違和感があったということもあるんですか。

榎：僕ね、そんな深い理由でなしに、なんか不安があるわけ。こんなにボンボンでっかいビルができたりとか、新神戸に新幹線とか、それはずっとつながってると思うんやけどね。田舎を買収して、山の中に穴掘ってこんなのができるとか。それよりもっと大事なものがあるのちがうかな、というのがどっかにあるから。どうしても時代って便利になっていくというのか、時間が短縮されて、人間の便利なほうに行くんだけど、なんかそういうものに対する不安みたいなものがあったんやけど、そういうことやってるんだけど、美術館でも色々規制があったり、お役所やから難しいところもあるやん？ そのへんが、僕ら若いからなんとなく分からないというのか、不安みたいなところあるし、どうしていいのかわからんところもあるし、そういうのもみな含んでるのちがうかな。それは UFO がやるから、いっぺん UFO に聞いてみたかったんやけど、分からなかった（笑）。

池上：UFO に託して。

江上：分からへんから UFO に聞いてみた。

榎：結局、宇宙語やから分からなかったわけ（笑）。

池上：それは非常にいいオチですよ（笑）。榎さんだけじゃなくて、それを見るお客さんへそれが問いかけになるというか。

榎：そうそう。

池上：UFO に聞いたって分からんからやっぱり自分たちで考えよう、という。

江上：考えなしゃあないみたいな。

榎：もう一個、ギャラリー 16 いうところでも同じことやったんだけどね（1974 年 11 月 19 日—24 日）。それはたまたまギャラリー 16 が空いたから、「使ってくれないか」いうことで、「UFO をやってほしい」いうことで。僕はあまりギャラリーではやる予定ではなかったんやけど。

池上：それでサンブラザでも 16 でもやられたんですね。これはすごい面白いです。UFO がかわいいし。

榎：これは普通のモニタージュの逆のやり方だね。ほんとに紙貼って、写真撮ったという、分かりやすいやり方やけど。

池上：コラージュして、それをまた写真に撮ってはるんですね。

榎：そうそう。

池上：攻撃の仕方が、すごく分かりやすく攻撃してて、すごくいいですね。

榎：これなんかでも、ビルを攻撃したりするのも、組織とかそういうのじゃなしに、自分が弱いやん？ だから強い世界と戦うには捨て身でいかないとあかんわけ。ゲリラってみんな捨て身やん？ 自分の命かけてやるというのかな。そういうもんは必要やいうのか。

池上：この展覧会は、反響というか評判みたいなものは。

榎：あんまり。子どもに評判やったな、高校生とかね。面白かったのは面白かったんやろうけど。盗みに来るんよ、UFO を。欲しがってな。1個は盗られたけどな。それも何回か来てね、何人が集団で来てね、狙ってやるの。ちょっとしたすきに盗られたりして。

池上：悪ガキたちですね。

榎：垂水の方の高校生かなんかが、「文化祭やるのに UFO 使いたい」いうてね。写真とかみな貸してくれ、とか言うて。写真とか全部貸してあげたんよ。そしたら文化祭で、これをいっぱいコピーしてね、売っとるんや。

池上：あかんやん！（笑）

榎：先生に見つかって、「どないしたんや」いう感じで。「いやいや、こういうことで借りてきたんや」いうて。「そんなの売って」いうて怒られてね、先生に。学生がケーキ持って謝りに来てね、「ごめんなさい。売ってしまっただんです」って（笑）。ある意味、ヘンなところで評判いうのか。美術とかそういうのと関係なしに評判いうのはあったけどね。

池上：わりとストレートに訴える力がありますよね。いくらで売ったんでしょうね。

榎：なんぼか知らんけどね。UFO もちょっと評判になって。時々 UFO が評判になる時期ってあるやん？

池上：うん、ありますね。

榎：そういう時期や。ブームみたいなのがあった時期やったのちがうかな。さっきの研究者が面白いの、会長が。ものすごいデータ持ってね。いろんなところから情報がいっぱい入ってくるんやって。だけどその人見たことないんやって、UFO を。会長やのにな。なぜかいうたら、面白いのは、情報は入ってくるんやって。岡山のどことか、「UFO よう来るんや」いうて、「来てくれ」いうて。出た後やからね、一回も見てないんやって（笑）。

池上：あー、情報が来てからだ。

江上：必ず後追いで。

池上：面白いですね。これは松の木を切って、前の兵庫県立近代美術館のほうに（《Tree, Out-In-Out》、アートノウ'75、1975年1月5日—19日）。

榎：神戸で始まった最初の時やったかな。それは増田（洋、1932—1997）さんがおる時で、結構色々怒られながら、だましなが（笑）。だけど、分かっているながらやらせてくれたという。結構、乾さんなんかZEROに色々協力してくれてたから、そういう力もあったんやと思うけど。

池上：これは、当時のピロティというのか、ちょっとプールみたいになってるところに、まず3分割したということですか、切ってきた木を。

榎：そうそう。だから会場に来たって幹しかないの。何か分かんないの。一応メッセージにちょっと絵を描いてね、説明は置いてるんやけど。寒い時やったんや。1月頃やったかな。それで根っこは下へ置いて、外から見たらこの枝が見えるん。

池上：ピロティと2階の展示と、また外から見て、「屋上からも生えてる」というのは、見ないと分からない。

榎：そう。だから阪急電車とか、遠くから見たりとか、外のバスから見たら、なんか一直線に松の木が貫通してるように見えるんやけど。だけど多くの方は、寒い時やったから、見ないで帰る人があるわけ。幹だけしか見てないの。

池上：これは何だろうって。ちょっと残念ですね。

榎：その辺は狙ってやってるの。展示場に作品があるという意識しかない。そういうとこで、ひねくってるんじゃないんだけど、多くの方はそういう見方しかないという。

池上：展示のこれだけ見ると、その時ちょっと流行っていたというか、「もの派かな？」みたいな感じがするんですけど。

榎：そうではないよ、いうて。

池上：全然違うよ、って（笑）。もの派のことはもちろん知っておられたんですね。

榎：もちろん知ってたよ。

池上：でもああいう感じのもんじゃないよ、という。それもおかしいですね。

榎：僕は、もの派とは言ったら反対みたいな感じというのか。「あれが悪い」いうのでなしに、ああいうことだけでなしに、もっとやる表現の仕方いうのを考えていくほうやったから。反対とかそういうものでなしに。

池上：もの派は、どこが違うなという感じがしてたんですか、べつに反対ではなくても。

榎：あれは、なんやかんや言うたって、絵に近い表現の仕方なのか、頭の中で考えていくというのか。そういう中の一つの見せ方やん？ 日常的なもんとか、そういう寄せ集めみたいな、その辺にあるものをうまく組み合わせたりとか。僕らはそういうものでなしに、もっとガーッと外へ広がりをもっていきたい。彼らは、自分らさえ分かっただけという感じで作ってる世界みたいと思うの。その辺は僕らはちょっと嫌やったというか。もっと多くの人に美術いうものを知ってほしいと。だからもの派が悪い、いうのでないよ。彼らは彼らの表現の方法があるんだから、それはそれでやっただけいいと思うしね。

池上：発表したいという、その向いてる方向がちょっと違うということですかね。

榎：方向が違う。そのほうが面白いやん？ ワーッいうて。

江上：これとか、外から電車で見た人は、逆に上だけ見てる（笑）。

榎：そうそう。

江上：「あ、美術館に松生えてる！」みたいな。

榎：「前からあったかな」って。そういう、普段日常の中でも「あれっ？」と思うようなこととか。「ほな、行ってみようか」いう気持ちになったり、確かめてみようとか。

池上：「なんであそこにあれがあるんやろ」と思いますよね。

江上：びっくりしますよね、屋根に松生えてたら。

池上：そうですね。

榎：あそこの美術館は吊り天井で、柱がないんよ、上は。それで増田さんが、結構建築の方の人と、「吊り天井だから弱いから、屋上に松の木を設置するのは難しい、無理や」いうて。最初、8メートル言うてたんやけどね。8メートルやなかったら松らしく見えないんよ。それで建築のほうの人は、構造的には4メートルぐらいにせえ、言うわけ。4メートルにしたら、この先ぐらいしか見えないの。それやったら僕らやる必要がないし、困るから、「それやったらもうできない」いうて。もう搬入しとってよ（笑）。中島（徳博、1948—2009）さんなんか、トラックで松の木運んできて。

池上：いまさら言われてもね、という。

榎：僕らもうそういう準備はちゃんとやるしね。1月頃は突風が、風速25メートルぐらい吹く時があるんだって。「そういう時もあるから、いつ吹くか分からないから、やっぱりそれは危ない」いうて。

池上：これはどうやって固定してあるのかなと思ったんですよ。

榎：すごいよ。セメントのごっつい、穴掘ってそこへ入れて、固定して動かないようにする。

池上：セメントで固めて。松の重さだけじゃないということですね。

榎：そうそう。それでロープを、ワイヤーを何か所か張ってね。

池上：1階のピロティのところと2階のところは、置くだけで大丈夫という感じだったんですか。

榎：これは、上のところにちょっと吊ったりして、倒れないようにして。これはもう差し込んでね。3箇所に切り込んだやつを後からぶち込んでるんよ。

池上：結構すごいことやってますね（笑）。

榎：そこで中とって何メーターにしよう、いうて。増田さんには内緒でちょっと長めにして。だけど、増田さんも分かってたと思うけど、黙っといてくれたんや（笑）。

江上：見たら分かりますものね、長いの（笑）。

池上：4メートルじゃないよな、というのは。

榎：一緒に搬入とか制作に関わってやってるでしょ。みんな一生懸命やってるんよ。僕ら何十人ってやってるから。そんなら少々のは断れなくなってくるんや、向こうも。そこまでやってるのにな。

池上：これだけ一生懸命やってるからって。

榎：これなんか市の山小屋借りて、泊まり込みいう感じで、飯盒炊さんやりながら、食事作って。そういう生活の中から一緒に、作品なんかでも関わっていくというのか。

池上：美術館の人もそれは引き込まれるというか、助けてあげたいと思いますよね。

江上：見てるのは楽しいけど、自分が担当やと思うとゾッとします（笑）。

池上：「その時担当じゃなくてよかった！」みたいな。「(当時は)まだ子どもで良かった」みたいな感じですよ。

江上：そうそう（笑）。「屋上にコンクリート？」とかいうて。

榎：京都の美術館の窓を黒くするのも、「危ないから」「無理ちゃうか」って言うてんけど、「いや、僕らやるから」いうて。

池上：そういう制度の限界みたいなものを、常に見せてくれるというのがやっぱり面白いと思いますよね。

榎：僕らそういうのに「挑戦する」というところがどこかにあるしね、美術館に対して。今までだめだと言われてるし、あんまりそういうことやってない人もおるやん。駄目なものも、最初からやらなかったら何も残らないやん？ 僕らが行動しているんなことが現象として生まれてくるというのか、そういう大事さもあるから。

池上：ですね。美術館の壁とか天井とか、普段気にしない「制約」ですよ、結局。そういうのが目に見える。

榎：この後、PLAYが、美術館の日差しを、窓を開けたり、そういうことをやったりとか。そういうとこでい

ろんな面が可能になったり、実験的にできた。この頃は実験的に美術館に挑戦するという、結構そういう意識もあった。

池上：美術館の側も、それをギリギリのところまで受けとめる……

榎：僕ら、いつも今までやったことないことばかりやん？ だからどう判断していいのか分からない。美術って、ないことをやるんやん？ あることをやるのと違うから。だからどうしても挑戦とか最初のことになるから難しくなってくる。だって、前例があれば美術やらへんもんね。やらないことをやろうとしてるから。その辺が面白いのとちがうかな。もういっぺんお湯入れてくれへん？ まんじゅう食べよう。

(しばし休憩後、再開)

榎：今の若い人はどういうふう感じてるのかなと思って。今の美術作品って、色々多様になっていきよるやん、どんどん。ああいう中で何を見つめていくのかなと思ったりして。僕らは僕らなりに、分からない時代に、なんかそういう体制みたいなとか、結構そういうなになが、「流行ってる」言うたらおかしいけど、アンチとかね、そういうのがあったから。やっぱり向かっていくもんが、どうしても権威とか社会とか国とか、そういうところになっていくやん？ 昔は学生なんかが主に学生運動とかそういうものに向かっていきよったんだけど、今は怒ってないやん。みんな満足しとるのか、くすぶってるのか。どっかでいつまた起きるかも分からない。たぶん人間やから、いつか誰かがまたそういうところを出てくるんやろなあ、ヘンなもんが。いいほうに出るのか、悪いほうに出るのか知らんけどね。怖いのは、オウムみたいな、ああいう感じで出てきたら怖いわな。

池上：そうですね。

榎：僕らも、オウムの問題みたいな感じの作品も考えたことがあんの。だけど「それはやめとき」言われたことがある。

池上：ああ、そうですか。

榎：ああいうのは怖いよ、いうて。

池上：先ほど ZERO のところを途中までお聞きしてたので、ちょっと戻らせてもらいます。さっきの松の木の後、大きい布を使うのが多いですよ、これもすごく素敵なプロジェクトですけど。マッコウクジラの《Sperm Whale》という 1975 年の作品。(注：「仮称 Exhibition 方法から方法へ」、神奈川県立県民ホールギャラリー、1975 年 5 月 6 日—12 日)

榎：それはたまたま横浜の連中が「やらないか？」いうて。ちょうど県民ギャラリーができた頃やったのかな。神戸って、神戸の作家でも大阪とか京都で活動するのがほとんどやねん、ギャラリーなんかでも。横浜の連中も、作家は神奈川県にもたくさんおるんだけど、ほとんどみな東京でやるわけ。横浜の連中は、ギャラリーがまだないねん、活動する場がないわけ。だからどうしても横浜に作家はおるんだけどみんな東京の方へ行ってしまう。神戸もある意味環境が似てるということで、やらないかいうて。関東の方で活動やってる連中が「一緒にやろう」いうことで。ほかにもおったよ、村岡三郎 (1928—2013) さんとか福岡 (道雄、1936—) さんもおったかな。何人かおったんだけど。向こうも、ぜひ僕らのグループがやってほしい、いうてね。横浜やから大洋ホエールズとかああいう。

池上：あ、そういうことですか！（笑）

榎：クジラの拠点やったやん？

池上：なんでクジラだったのか、聞こうと思ってたんですけど。

榎：うん。神戸、海とかそういうのもあるし。

池上：海つながり。

榎：そうそう。その頃、シルクという版画が作品になり出した頃やった。版画でもカラフルなシルクスクリーンの作品が出だした頃やったんかな。シルクでも使い方によったらこういうでっかい作品ってできるやん？ その頃まだあまりシルクで大きい作品ってなかったの。せいぜいこのぐらいやったんかな。そういうことも含めて、横浜、クジラ、海いうので。展示するだけでなしに、動くんや、これずっと、カーテンみたいになっとってね。

池上：最初、たたまれてると何か分からないですね。

榎：分からへんやろ。それがダーッと自動的にね、前に布を京都でやったように、自動的にガーッとそれが広がっていったり。そうしたら全貌が見えるわけ。これマッコウクジラの原寸大やねん。

池上：すごいですよね。

榎：16メートルぐらいあるのかな。

池上：放っておいてもたたまったり開いたりというのを自動的に繰り返してるわけですか。

榎：そう、自動的にするわけ。最後の週に、作品を外して山下公園へダーッとみんなで持って行って、公園に遊びに来てる子どもを巻き込んで、最後に海に逃がしてやる。もちろん回収するんやけどね（笑）。

池上：放っておいたらまた怒られそうですからね。これは何色だったんですか。

榎：黒。

池上：黒だったんですか。すごいきれいな。

榎：これも県民会館の広いところを借りて、みんなでパーッと刷っていくわけ。これ、刷ってるでしょ、こういう感じで。

池上：ドットみたいな感じで、点を一個一個押してるんですね。やっぱり人数が多くないと。これは12人となってるから、そんなに多くはないんですかね。

榎：いろんなプロジェクトがあるんやけど、これに参加する人を募るといふ。

池上：そのつど手を挙げて。

榎：そう。やりたい人がおれば募って。

池上：榎さんが参加しなかった ZERO の催しもありますか。

榎：何個かあるよ。

池上：次に、《HARVEST》というのが、榎さんが参加された最後のプロジェクトになるんですか。1976年ですね。

榎：そう、最後。ちょうどこの空間が信濃橋画廊の空間でね。(注：「HARVEST」、信濃橋画廊+兵庫県氷上郡、1976年6月7日—12日)

池上：その大きさの？

榎：そうそう。ちょうどギャラリーの空間を残して、模擬的に信濃橋画廊で展覧会をやるわけ。田植えもやるよ、実際。だけどそれは模擬やから。ここへ図面を描いて、「HARVEST」の文字を書いとって。そこに見に来た人が、番号を書いているわけ、何番いうて。見に来た人がそこへチェックするわけ、住所と名前を。で、僕らがこの苗を運んで行くわけ、田んぼへ。で、植えてね。3、4か月ぐらいつとそれを育てていって、最後にこの稲穂を、見に来た人が名前書いたとこへ送ってあげる、「収穫できたよ」いう感じで。これも友だちの実家が田んぼをやっててね。そこのおばあさんとか家の人と、こういうことやりたいということで、自然とか、これからの食べ物とか、食料問題とか。そんな深い問題でなしに、食べ物に対しての考え方とか、そういうのを、美術にどういうふうにもっていけるかなと思って。それはやっぱり田植えから、土の中へ、水とか土を体験しながらやっていく。僕らは、体験するということ、行為が大事ということが基本的にはあったから。

池上：前も言っておられた、田舎では、収穫とか、一年のサイクルとかのリズムがすごく大切にされていて、ということとつながって。

榎：この田植えする間隔があるわけ、稲穂を植えていく。それも自然とか、台風とか雨とか、そういうので倒れるんよ、ある程度成長したら。倒れてもお互いがもたれあって、ベタッと倒れないように工夫された間隔らしい。土から栄養をとるのにとりやすい間隔いうのか。この関係で、やってほしいって、姫路の人が。田んぼ、1反以上やったか、300坪か、もっと大きい田んぼやったかな。姫路の市川いうとこやけど。そこで非原発いうて、原発の仲間がおって、それを「田植えでやってほしい」いうて。田植えを、ほかは普通の苗を植えていく。非原発だけ（赤米で）。赤米って、茅みみたいに結構固い稲穂で、葉っぱが赤っぽい。ものすごくしっかりしてるやつやけど。それが大きくなっていったら、だんだん文字がはっきりしてくるわけ、原発反対みたいな感じで、非原発いうの。それを山から見たりとかしたら文字がパッと映る。最近、お城とかいろんなマークやってるやん？

江上：やっています。

榎：僕らは昔やってたの、そういうのを。

池上：いまの姫路のはいつされたんですか。

榎：この後やから。

池上：この後すぐ？　これが1976年だから。

榎：1年か2年後ぐらいがうかな。僕はもうZEROをやめてた時やと思う。

池上：そっちが姫路で、《HARVEST》のほうは、これは何郡？

江上：氷上郡。

榎：黒田町やったかな。柏原町やったかな。

江上：丹波の方ですね。

池上：北の方になるんですね。

榎：そこのメンバーが、ここで育った子がおってね。「うちの田んぼやったら使ってもいい」いうことで、そこのお母さんとかおばあさんと話し合って、「やらせてくれないか」いうことで。向こうは「食べ物とかそんな大事なものを遊びなんかに使われたら困る」いうてね。そこは説得して、僕らの説得いうてもいいかげんな、遊びいうたら遊びかもわからんけど、そういうことはやっぱり真剣に考えていきたい、いうことは言うて。そこの兄さんがお母さんに「協力してやろうや」いうことで、なんとかできたんやけどね。田んぼ借りるのも大変なことがあるわけ、何回も行って。

池上：そうですね。でも、協力的な人々にいつもちゃんと出会われてるような感じがしますけど。

榎：そうなんや。それをやらなかったら実行できないやん？　そういう人の協力とか理解をもらわなかったらできないから。

池上：ちゃんと説明するということですよ。いつも榎さんはそれをしてるから、周りの人も助けてくれるのかなって。

榎：そう、協力してくれたり。そこのお母さん、おばあさんなんかも反対してたけど、自分らも関わってもらわけ。そうしたら「面白かったな」「楽しかったな」いうて、「自分らもこういうこと思ってもなかったけど、みんな頑張ってるのって大事な」って。

池上：これがZEROとしては最後になって。江上さんが先ほちょっと気になるとおっしゃっていたのは？

江上：この間に「大砲」を始めてはるんですよ、ZEROをやってる間に。初めてつくられたのが72年になるのかな、信濃橋（画廊）でされた時が最初ですか。

榎：もっと前かな……　ああ、その辺か。

江上：これは、えらいことになってますね（笑）。これは1972年かな（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、24頁、自室で大砲を作る榎の写真が掲載されている）。

榎：これはアサヒグラフの特集だね。ちょうど浅間山荘とか、過激派とか赤軍派とかが活動やってた頃。それもたまたまやけど、浅間山荘事件がこの取材をやってる時に起こったわけ。古川というのが。

江上：ああ、これが一緒に ZERO をやってた古川さんですね。

榎：もう一人、横のは和佐（一三）さんいうて、もう亡くなったんだけど。一番こっちのが松井くんで。

江上：一番最初に大砲を作った時の、きっかけみたいのはあったんですか。

榎：きっかけ？ きっかけは、いつか作りたいないというのがあったし。その頃はもう絵を描かなくなってたから、ひとつのハプニングみたいな感じで何か作りたいないというのがあったし。子どもの時分、竹で作って遊んどったいうのもあるし。

江上：ちょうど ZERO をやってはって、さっきのバイクの個展もやってはる、というぐらいの時ですね。ハプニングの後。

榎：グループでやるでしょ、集団で。ミーティングとかそういうことばかりでね、なかなか決まらないんよ。みんな好きなことは言うんやけど、実現とか、そういうプランはちゃんと持ってないから、僕にしたらもうイライラしてくるわけ。だからもうたまらなくなって、作りたくなって、何か表現してみたくなるわけ。そういうのでたぶん作っていったと思うんやけどね。

江上：グループでやってる一方で、個人としてそういうハプニング的なことを単発的にやってはったという感じですね。

池上：材料はどこから調達されたんですか。

榎：部品なんかは、これは作ったものがほとんどやけどね。廃品は、この頃はある程度使ってなかったん。多少は廃品も入ってるけど、ほとんどこの頃は作ってた。

池上：結構大変じゃないですか。これを実際に自分で手づくりされるというのは、すごい手間も、肉体的にも大変なことじゃないですか。

榎：そんなことない。こんなん簡単なもんや（笑）。そら時間はかかるよ。車まで作ってるからね。タイヤに付いてるゴムまで作ってるし。それはまあそんなに大変とは思わへん。「大変」と思たらできない。作りたい気持ちがなかったら作れない。

池上：それはそうですね。

榎：作ってどうなるか、どんな音が出るかというのはやってみな分かんし。これなんかでも、デュシャンの「コーヒー（挽き）」みたいな感じでね。それがガーッと回転して、モノをぶっ壊していくんやけど。作るときはほとんど僕が作ってるわけ、こういう大砲から、弾作る金型から石膏から。この時の展覧会、4人が白衣着て、ここで作業をするわけ、弾作りの。見に来た人が梱包して。パラフィンで梱包するんやけど。それを持って帰ってもいいし、作品として置いとってもいいし、それを大砲にこめて撃ってもいい、いう感じで。

池上：これはいろいろな色をしてるんですか。

榎：弾に布とか、紙とか、メッセージみたいなものとか、いろいろなものが入ってるわけ。

池上：型があって、その中に何を入れて作ってもいいという。

榎：そうそう。だから思い出の品も。彼女からもらった大事なもんとか、もう別れたから、「これを大砲でぶっ放してくれ」言う人もおるし。

池上：そういう自分の思いを昇華させるためというか（笑）。さっき言ってたのはエリントンでしたか。

江上：そうそう。エリントンと何かが。

榎：デューク・エリントン？ これを作った後で。僕らがよく飲みに行ってた「デッサン」いう飲み屋があつてね。どこかで撃った後やったと思うけど、「デッサン」に置かしてもらってたわけ、大砲を。ハタケヤマ・コーポレーションという神戸の興行主がおったわけ。外国からいろんな人を呼んだりして国際会館でイベントやったりとか。そういう時に「大砲やらないか」いうて。今度デューク・エリントンが来るから、「いっぺん相談してみるから」いうて。音やったら大丈夫いうことだね。僕もそんなの初めてやん。デューク・エリントンというのはどんな人が知らなかったんや。すごいカッコ良い、黒人ばかりだね。真っ青なブレザーで、真っ黒い人ばかりやねん。もうすごいとこでね、リハーサルがちょっとあって。その人ら、こんなでっかいグラスにウイスキーをカポーって。で、リハーサルやったん。すごい。僕らの知り合いの音楽やってる人は、リハーサルとかいうとみんな緊張してな。向こうの人は全然違うんや、リハーサルいうたって。そのへんがすごいカッコええなと思って。で、舞台へ引っ張って行って。植松くんと一緒に行って。

池上：植松奎二さんですか。

榎：奎二さん。あいつと一緒にロープ持って舞台まで引っ張って行って、客席に向かって。暗いんよ。運んで行って、僕の大砲の合図でデューク・エリントンがパッと出てくるわけ。

江上・池上：はーっ（笑）。

榎：カッコええねん。

池上：オープニングっていう感じ？

榎：オープニング。プレス関係とかそんな人が結構取材とかいっばい来とるわけ。言うてなかったんや、大砲やるいうの。ドーンと撃ったもんやから、関係者とかそんなのが、機械室かどっか爆発したんかと思って大騒ぎになってな。

池上：びっくりですね。

榎：で、また怒られて（笑）。僕が怒られたんじゃないくて、その関係者が怒られたんやけどな。おもしろかったな。

池上：エリントンはどういう反応で？

榎：喜んどったよ。「こりゃオモロイ」いうて。聞いたら、エリック・サティかなんかいう、フランスのピアニストか。

池上：作曲家ですね。

榎：あの人が大砲が好きでね。演奏会とか演劇とか、その頃結構絵描きとかいろんな人が集まってそういう舞台をつくったりしてやるんや。映画が好きでね、彼が。映画をつくったら、必ず大砲が出てくるの。

江上：ありますね。

榎：ああ、やっぱりそういう人もおるんやなと思って。

池上：榎さんは、それまでエリントンとかジャズとか聴いてたんですか。

榎：ぜんぜん（笑）。友だちは結構おるんよ。ジャズ喫茶とかそういう店があったりとか。

池上：ジャズが流行ってた時代じゃないですか。音楽はそんなに？

榎：僕、音楽が一番苦手いうの？ 聴くとかそんなのは、べつに嫌いじゃない。自分が歌ったりとか、ああいうのは嫌いなほうやな。

池上：レコードとかもそんなに熱心に集めたりという感じではなかった？

榎：よく行ってた、「バンビ」いう、神戸に古いジャズ喫茶があった。そこへ結構絵描きとか、音楽やってるやつとか、ジャズのファンが来てて、みんなコーヒー飲んで、タバコ吸うてね、きたな〜い格好でね。もうほんまに「変なやつやな」と思ってたわ。

池上：あんまりそういうところには行かれず。

榎：行っとったよ。そういうたまり場があったんや、変なやつが来る。高橋信夫（1914—1994）とか、ろくさん（山本六三）、ああいう絵描きとか。

池上：そういうところで聴くぐらい？

榎：あんまり聴いとらへん。そこ行って酒飲んどるぐらい（笑）。

江上：みんなに会いに行くって感じ？

榎：そうそう。そこへ集まるとるんよ、そういう連中が。「神戸で何かやりたいな」とか、ムンムンしとんのよ、その頃。ヒッピーみたいなものとか、フーテンいうの、あの頃。そんなのがヘンな薬を手に入れたり。こっそり北野町の寺院に吸いに行ったりとか。僕はあんなの嫌いやったから。サイケデリックとかああいうのが流行った頃やった。ああいう薬なんかでも、酒飲んだたら効きが悪いんだって、少量しか飲まないから。だからみんな

なその頃酒とかタバコやめてね、そういうのをやるわけ。

池上：そうなんですか、薬が流行ってた頃は。

榎：全国からそういうやつが、旅してそういうのを運んでくるやつがおるわけ。そんなら、どっか知らんけど情報が入るの。「今度入った」とか「どこどこでパーティやる」とかね。映画なんかでも、あれを飲んで観たら全然違うんだって。

池上：へえ。榎さん自身は全然。

榎：僕は嫌いやった。横尾さんなんか、その頃…… 神戸に「メイド・イン・ニッポン」というすごいゴーゴー喫茶ができたんや。お酒ももちろんあるんだけど、コカコーラも出始めた頃やった。そこの社長がうちへ絵を習いに来てたんや、デッサン教室。それで、「今度変な人に室内の展示を頼んだんやけど、ちょっと見に来てくれへんか」いうて。若者の感覚で見に来てくれへんか、いうので見に行ったら、横尾忠則がテーブルから天井から壁面の絵から全部やっ取るの。「わー、ええやん」、「ええかなー」いうてね。

池上：「ええかなー」って（笑）。

榎：オープンだから、コーラなんかただやったのかな、試飲みたいな感じで。大丸でもコカコーラをただでみんなに飲ませてくれたんや。そんな時代やった。そういう場所は結構行ったり、友だちがそんなのやったりするのが多かったから、行ってたなあ。トン（東伸一矩）ちゃんいうてフラメンコやる、あいつらがおったり、その手伝いやったり。べつに僕がやりたいとかでなしに、友だちが結構音楽活動とかやってることが多かったから。

池上：では、ZEROをやめられてからの話にもなるんですけど。ご自宅で個展をされた時、まさに半刈り状態でやってらしたんですよね。

榎：そうよ。その展示会のためにやったわけ。それは、あとの「ハンガリ」になっていくんやけどね。

池上：子どもたちがすごい喜んで来てたという話をこの間もされて。「半刈りのおっちゃんがいる」ということが一番喜んでた理由だったのかなと思ったりするんですけど（笑）。

榎：それは分らないのやけどね。近所の人なんか、やっぱり何かやってるのは分かってたわけ、道端とかそんなのも使ってやったから。オートバイのことも知ってたしね、「変な人や」いうのは。

池上：ご近所の人との関係というのはどういう感じだったんですか。「なんか変なおっちゃんいるな」という感じ？

榎：まあそんな感じちゃうかな。「何者やろな」いう感じやろな。

池上：でも、べつにそんな迷惑がられたりとか苦情とか。

榎：それはない。べつにそんな悪いことやっとなちがうしね。

江上：普通に勤めもしてはるしね。

池上：そうですね。で、自宅を開放されて、「あそこで何やってるんやろ」と思ってた近所の人が見に来たというの。

榎：そうそう。案内状も、一般の美術館とかギャラリーとか友だち、もちろん多少は出すよ、そういうところ。だけど新聞の折り込みに案内状を。家で、こういうところでやるから、いうて。安く配ってくれるんや。1,000枚ぐらいでも何百円ぐらいで全部配達してくれるわけ。朝刊やったら広告が入ってるから、夕刊に頼んでね、近所中にずっとばらまいたというか。みんなその案内状を持って。子どもはやっぱり怖いから、お母さんと一緒に見に来るとかね。子どもが来たら、「お母さんも入ってくれ」言うんやけど、「いや、私は分かんないから、怖いから外で待っとく」いうて（笑）。

池上：べつにいいのにな。

榎：子どもなんか、最初は冒険心がある子が来るんや。その時に、もらった差し入れとかジュースとかケーキをやったら喜んで。その時に、街を歩いた映画もやってるわけ、部屋の中で。そういうやつを30分、もっと長かったかな、一部屋映画をやって。ドキドキしながらみんな観てるんよ、その子どもたちが。ケーキとジュース飲んで、喜んで、「ありがとう！」いうて帰ってな。

池上：いいですねえ。

榎：それが学校へ広がっていくの。「あそこへ行ったら変なおっさんおって、ケーキやジュースもろた」いうて。そしたら10人とか20人単位で来るわけよ。そんなもうケーキもあらへんしな、ジュースも。こづかれながら、「おまえウソ言うたんちゃう、ジュースがあるとかいうて」。ないやんって（笑）。

池上：その半割りにするという最初の発想はどういうふうに出てきたんでしょうか。

榎：それは、ZEROをやめた次の年に結婚したのかな……

池上：1976年にご結婚というふうになってます。同じ年ですかね。

榎：ZEROをやめてから結婚して。やめたのはいいんだけど、ああいうグループ活動やってたやん？ 集団とかそういうことばかりやったから。べつに何かやりたいためにやめたわけじゃないわけ。僕はちょっとしんどい、疲れてきたというか、集団でやるのに。やめたのはいいんだけど、なんかウズウズするんよ、何かやりたいねんな。でも何していいか分からへんし。今まで集団思考というか、みんなでやるようなことばかり考えてたし。一人でできるものっていうても分からないし。で、クヨクヨ、クヨクヨいうたらおかしいけど、ウズウズしとって仕方がないし、これは何かやらなかったらちょっと体にも良くないなと思って。生活とか日常とか、自分の生活から始めていこうかなと思って。そこから美術いうものとか、今まで絵をやってきたこととか、集団でやってきたことをもういっぺん、べつに振り返るといのではないんだけど、どういうことかいうことを、まず家から出発しようかなと思って。まず家を使ってやってみようと思って。

会社勤めやから、ちょうど春の連休がある、そういう時をはさんで4月の終わりから5月にかけてやったかな。前から髪の毛とかそういうのを何かでやりたいなというのはずっとあったんだけど、どうしていいのかわからへんし、いつやるかとかもなかったんだけど、この時「日常」いうことで、いろんなヘアスタイルあるやん？ 美術のなかでやっても、そういう感覚でやらなあかん。これを作品とか展覧会という意識でなしに、

もっと日常の中でちょっと変えるだけ、いう気持ちでやらなあかんと思って。それで先輩のギユウちゃんとか、デュシャンの星型もあるし、そういうなかで色々思たんやけど。今度は半分にしたら、いろんな髪の毛とか、生きてる機能的なものが案外感じられるかなと思って。全部してしまったら、なんかもうひとつよく分からないところがあるから、半分やってみたらどうか。そういうのを思いだしたら、僕はもうやりたくてたまらなくなるの。どうしてもしたくなるというか。それまでは「やってみたい」いうのはあったんやけど、なかなか、親のこととか、反対するとか、会社勤めしとるし、結婚したりとか、いろんなこと思たらなかなかできなかったわけ。こういうのを思い出したらもう止まらなくなるの。もうやるしかなくなるというのか。それはもう美術であろうが、展覧会であろうが、そんなの関係なしにやりたいことをやっていこうと進んでいく、いうのか。

池上：最初、左半分を剃られたんですか。

榎：これが最初、こっち。右側。

池上：こっちが最初か、失礼しました。それでは半分刈るために、伸ばしたんですね。

榎：そう。この展覧会、映画もつくったりするから、半年前から準備はやっとなるから、だから伸ばし始めて、ずっと。それまでも長いことは長かったんやけど、髪の毛は。

池上：じゃあ半年とかそれぐらいは伸ばして、右を刈られて。身体感覚としてはどういう感じになりましたか。

榎：あんまり感じなかったな。

池上：そんなに差はないですか。

榎：うん。それよか、見られるということとか、そっちのほうがごっつい気になったりとか。どういうふうに見てるんかなとか、どういうふうにみんなが想像したり、どういうふうな人間かなと思ったりとか。そっちの外的なことが強かったから。

池上：あれですよ。映画でも、電車の中に榎さんがいあって、周りの人が、見たいけど怖いから見れないみたいな感じになってて（笑）。

榎：そうそう、そんな感じ。夏になってから、これが5月頃やったから、夏になってからは、汗とかがぼわーっと右に汗が流れてくる。こっちはジクジクする。そういうとこで完全に機能が。子どもの時分、ケガしないために頭の毛は、眉毛とかそんなのでも、涙とか汗とかが入らないようにとか、いろんな機能の話は聞いたことあるんだけど、それがどういうもんか実際分かったなと思って。「あ、なるほどな」と思って。風が吹いたらね、こっちはジクジクしてるんやけど、こっちはひやっとしてね、なんかそういう感覚があった。

池上：まつげはべつに抜いてないんですね。

榎：剃ってるだけ。

池上：まつげも剃ってるんですか。

榎：うん。こっちはあるけど、こっちは剃ってる。

池上：眉毛じゃなくてまつげ。

榎：そういう細かい、産毛とかあんなのはやってない。

池上：ですよ。

榎：これはもう最初から何年もやるつもりやったから、産毛とかそういうのはやらない。

池上：そこまでやると大変ですよ。

榎：脇の毛とか下の毛を半分にしたりとか、そんなのは簡単にできるから。前にも言うたかもわからんけど、この展覧会を見に来た人が、絵描きさんやけど、そのダンナが物理学者なんや、京大の。ZEROの勉強会にも彼を呼んで、その人が数学とか位相物理の話とか宇宙の話とかをしてくれよった。その人の奥さんが見に来てくれて、この展覧会を。うちのお父ちゃん今ハンガリーの大学で、向こうの方の大学の要請で国賓で授業に行くと、いうて。たまたま「ハンガリー」言うから、「えーっ！」ということになって。「ほな行こか」いうことになってもうて。

池上：その奥さんはべつに洒落として言ったわけじゃなくて？

榎：いや、僕が話してたわけ、「半刈りにして」いう話。そしたら「うちのお父ちゃん、今、ハンガリー行っとるで」って。「えっ、ハンガリ？」いうて。いいなあと思て、「わー、行きたいな」言うたら。だけど今ハンガリーは一般の人は入れないって言うからね。「とにかくいっぺんお父ちゃんに手紙書くわ」いうて。で、何日かして向こうから、大学の方からメッセージを送ってきてくれて。ハンガリーは共産圏で、今はそういう国やけど、アートはあんまりない、って言うたんかな。だからいっぺん日本のアーティストに今のハンガリーの国の状態を見てほしいとかいうて。その手紙を持ってビザが取れたというのか。ほんとに偶然いうたら偶然やし。

池上：向こうの人はハンガリがハンガリーやという、それは分かってたんですか。

榎：向こうは分かってないけど、僕は、「あ、これはハンガリやな」いうて。向こうも「あ、そやな」いう感じで。「ほなお父ちゃん行っとるから」、いうて。

池上：それはおかしいですね。実際ハンガリーはどれぐらい、いらしたんですか。

榎：2日か3日やったと思うよ。もうお金も限られたものしか持って入られないし、全部使って出なあかんし、あまり日にちがなかった。ハンガリー自体は4日か5日おったんかな。そこの行ったところはデブレツェン (Debrecen) いうて、だいぶ離れたところやけど。

池上：ハンガリーの印象はどんな感じでしたか。

榎：印象いうて、すごかったな。向こうはこんな感じやから、見方が違うわけ。その頃、日本の昔がそうやったけど、警察より軍隊が結構力を持つとるんよ、治安とかそういうので。だから飛行機を降りた時でも、機関銃を持った人が待っとるの。ほかの人が降りて、僕が最後嫁さんと二人でタラップを降りるんやけどね。機関銃を持った人が待ってるの。別な入国審査とかそっちのほうへ通されて。メッセージを持ってたから、入国は

わりと簡単にできたけど。

池上：この髪型だと、どこに行ったら注目されるのは絶対注目されるから、文化の差とかちょっと分からなくなりますよね（笑）。

榎：この時フランスから出発したんやけど、列車で。ポンピドゥー（・センター）ができた年（1977年）でね、デュシャンの100周年かなんかをオープニングでやってたんや（注：デュシャンの生年は1887～1968年。デュシャン没後、フランスでは初めての回顧展）。その時これで行ったんや。向こうの人は、聞きたいんやけど、みんなウズウズしとるわけ。で、そういう話をしだしたら。僕、ハガキ大の名刺を持って行ってたんや、ハンガリの。で、いろんなサインしたりなんかして。ごっつい喜んでくれた。

池上：「それデュシャンと関係あるの？」みたいなこと聞かれましたか？

榎：聞かれなかったかな（笑）。

池上：この頃、普通にお勤めもされていたということなんですけども、ハンガリーに行く前後は。会社の方たちというのは、「今度こういうのやるねん」という説明とかは？

榎：全然、しない。

池上：全然。ある日、いきなり榎さんが半刈りで来た（笑）。

榎：そう。それはうちの嫁はんもびっくりしとった（笑）。まあ嫁はんには「やるかもわからん」という感じは言うてたけどな。まさかほんまにやってくるとは思ってなかったかも。

池上：どこでやられたんですか。

榎：うちの会社の近くの散髪屋へ行って。行く前に、記念写真でもないけど写真を撮ってもらって、そのまま散髪屋へ行って、散髪屋の帰りにまたもういっぺん写真を撮ってもらって。それがいまだにずっと残ってる写真やけど。

池上：勤め先の会社の人たちはどんな反応をしてましたか。

榎：どうやったやろな（笑）。びっくりいうたらびっくりやし。だけどみんな何も言わなかったな。社長も何も言わなかったわ。

池上：やっぱり作家活動してる人だというのはみんな知ってはるから。

榎：まあ変なことやとるのは知ってるからね。東京で捕まったりとか、それまでいろんなハプニングやったりしてたから、「ああ、またやったんか」という。

池上：「今度はそういうことやったのね」という。

榎：まあそういう感じかなあ。

池上：みんなすごい許容量が（笑）。

榎：僕の作品とか展覧会に結構会社の人が手伝いに来てくれてたんや、搬入とかああいうのも。だから仲間とかは知ってるから、そういうなかの一つかな、いう感じやわな。

池上：じゃあみんなすごい理解があって。

榎：理解とかいうものでもないと思うんやけど（笑）。「ああ、またやったんかな」いうて。

江上：「今度はこんなことしたわ」ぐらい。

榎：それでこの展覧会終わって、「ほな行こか」いうて嫁はんと。それから嫁はんも英会話の特訓に行って。僕はしゃべるの全然だめやし、嫁はんもしゃべれないんだけど、一応個人レッスンを半月ぐらいやったんかな。5月の頭、それからすぐ「行こか」いう話になって。

池上：奥さまとはどこで知り合われたんでしたっけ。

榎：ZEROの研究所へデッサンを習いに来てたわけ。その頃は僕らはもうZEROを立ち上げて、そういう活動を始めてた頃やったかな。《Yellow Angels》とかの展覧会、道端でやったりする案内状を渡したりはしてたんだけど。松の木を立てるのにも参加したり、一緒にやってたわけ。

池上：お年は結構離れてはるんですか。

榎：7つぐらい離れてるかな。

池上：ご結婚されて、お子さんもその後できはって。家族を持たれたというのが制作に何か影響をしたことってありますか。

榎：それはないね。結婚するのもそうだったけど、結婚したら、なんかいろんな自由とかああいうのも奪われてしまうとか、自分の頭の中で考えてたけど、べつに…… そういうのも、好きな人と結婚するんだから、作品とかそんなのやって結婚できないんやったら、それはまた違うなと思て。結婚してると作品ができなくなるんだったら、べつに作品やらなくてもいいし。だけど好きなものやったらやっていくのところがうかなと思て。最初は怖かったね。自分の中で結婚とか生活とか、言うたら知らない人と生活するんやから、それはものすごく不安は不安やったし。だけどやっぱりそっちの不安は、好きな人と結婚する方が強くなったら結婚するしかないし。作品はできたらやってもいいし、結婚したから作品できないんやったら、もうやめたらいいと思うし。そんないいかげんなものやったら美術なんかやる必要ないと思て。

子どもができた時もそうよ。子どもとなったらもっと自由とられるやん？ でもそれも同じ。そんなので美術ができないようやったら美術なんかやめたほうがいいと思うし。子どもの方がやっぱり、生きもんやから、大事にせなあかんと思うし。大事いうのか、育てていく役目があるやん、親として。そういうふうに変に、わりと割り切ってしまった。

池上：結果的には、ご結婚されてからも制作はものすごくされているわけなんで。

榎：そうよ。それは確かに時間とか拘束は、子どもが保育園行くとか、だんだん動き出したら、赤ちゃんの時はまだ寝転がしてたらいいけど。寝転がすわけではないけど（笑）。やっぱり大きくなったらそれなりの、保育園へ連れて行ったり。僕が朝保育園に連れて行って、嫁はんが帰り迎えに行くとか、そういうふうにはやっていかなあかんやん？ そういうなかで多少は時間をとられるのは、それは仕方ないし。それは生活いうもんやし。

池上：奥さまは、制作にはずっと協力的というか。

榎：まあ、僕がやってることやから、うん。仕方ないか、一緒にやろうとか。それが生活やからと思って、わりと一緒にやってきたかなあ。考えるって、そんなものちがうかなあ。難しく考えてもきりがないぐらい難しいやん？ 深いやん？ だけどそんなものでもないし、それをどういうふうには切り離したり、考え方の方向を向けたら、また違う考え方も生まれてくると思うし。今までの人とか、先輩たちとか、周りの人を見てるからね。自分の生活やから、自分で背負っていかなあかんやん？ 作品でもそうだけど。そういう考え方を持たなかったら、しんどいとか、じゃまくさいとか、お金がいるとか、そういうことでやめてしまうやん。だけどほんとに好きなものとかやりたいものって、そんなものでなくなるもんでないと思うし。

池上：ほんとにそうですね。このハンガリーの旅のほうにいけますと。ドクメンタに行かれたのは、この旅の時なのかな？（注：1977年のドクメンタ6に半刈りでゲリラ参加）

榎：そうそう。これが行く途中ね。平賀敬（1936—2000）さんとか魚田（元生、1945—）とか。この人がその京大の物理学者の人。これがポンピドゥー。（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、86-87頁）

池上：ほんとだ。これがチューブのエスカレーターですね。

江上：エッフェル塔。

池上：そのついでにドクメンタにも。

榎：そう。カッセルでちょうどやってたから。

池上：そこでヨーゼフ・ボイス（Joseph Beuys）に会われたんですね。

榎：会ったよ。ちょうど授業いうのか、いっぱい若者集めてね。例の黒板みたいなを書いて、授業みたいなやってた。ボイスは知ってたし。その時グリースかなんかを（展示をしている美術館の）全館に移動させるかなんかいう、大がかりなプロジェクトをやってた。

池上：ちょっとお話しされたりは。

榎：話しなんかしない。授業してる時に、こんな頭では向こうも気がつくし（笑）。こういう感じ（目配せして）。挨拶いうか。アイ・コンタクトをとったぐらいのもんで。

池上：でもおかしいですね（笑）。半刈りしてなかったら普通の聴衆の一人で、気づかれなかったかもしれないですけど、「なんだこいつ」って。

榎：それは、僕ら聞いたって分からへんし。だから僕はべつに話したいとも思ってもなかったし。会えたらいいな、いう感じやったから。その時、(リチャード・)セラ (Richard Serra 1939—) が、でっかい金属の作品を、30メートルかなんかの鉄板を組んだやつを、ガーッともたれ合わせたような感じで高いのを作って。

池上：ああ、あの頃から大きくなり始めたんですね、セラの作品。

榎：もう一人、真鍮の棒みたいなやつで、アメリカの……

池上：ウォルター・デ・マリア (Walter De Maria, 1935—)。

榎：おう。彼が穴掘りよったんや。5000メートルとかいうて、ボーリングみたいなのをやってた。その時、女の人で裸になってぶつかりあいする、マリナー……

江上：マリナー・アブラモヴィッチ (Marina Abramovi?, 1946—) ですね。

榎：あの人なんかもその時やったかな。

池上：すごく面白い時期のドクメンタですね。(ドクメンタ6、1977年6月24日—10月2日)

榎：ぶつかり合いして。あとで『美術手帖』の表紙になった人ってね。「わー、『美術手帖』の表紙」って。彼女なんかも招待作家ではなかったらしいの。

池上：ゲリラ的にやっている。

榎：ゲリラ的にやってるの。結構向こうもああいう展覧会多いんだって。その時を狙って作品を準備して、トラックで持ってきて、公園とかで自分らでやるんやって。結構そういう人がピックアップされたりするって。だいたいあれは国単位で何人か、一人か二人ぐらいでしょ、招待されるのは。

池上：そうですね。

榎：そういう感じ。みんな狙ってるの、そういう展覧会でバーンと売り出していくというか。みんな何年間かかけて、そこへ殴り込みみたいな感じで来るからね、迫力あるんよ、作品に。招待された人は、今までの何かで評価されて、推薦された人ばかりやん。だいたい感じは分かるんやけど。そういうやつの方がすごい。

池上：榎さんもそういうふうに使われてたという可能性は？ 「ハンガリ」で殴り込んできた (笑)。

榎：取材はいっぱいあったんやけどね。何の取材が分からなかった。映像みたいなのは撮られたりしたんやけど。

池上：その旅自体は何か月？

榎：1か月ぐらいよ。僕も会社勤めやったし、そんな休みも取れへんし。うちの嫁はんも学校へ勤めてたから。夏休みを利用して行ったわけ。

池上：それで帰ってこられて、また次の半分をするために。

榎：そう、それが始まっていくんやけど。

池上：その後が「ROSE CHU」(《BAR ROSE CHU 展》、東門画廊、1979年7月7日—8日)ですね。こっち(《LSDF》、1979年)が先かな。

榎：そう、正月やったんや、1979年の。(アート・ナウ'79、1979年2月3日—25日)

池上：アート・ナウ('79)に出された。

榎：これは2月の初めのほうやって、7月の、僕の誕生日頃に ROSE を誕生させるという感じで。

池上：では、アート・ナウのほうからお聞きすると。この時に初めて《LSDF》という、「ライフ・セルフ・ディフェンス・フォース」(LIFE SELF DEFENCE FORCE)というタイトルで発表されたんですね。

榎：考え方は前から使っていたんだけど、実際大きいんよ、この大砲は。8メートルぐらいあったんかな。

池上：大きいですね。

榎：その時初めて、僕のひとつの考えをここで刻印として「LSDF」を使い込んだのが初めてかな、作品に取り入れていったのは。

池上：自衛隊の、セルフ・ディフェンス・フォースの頭にライフというのをつけるというのは。

榎：僕は後から気がついたんや。Jいう。これをJに替えたら自衛隊になるのちがうか、いうて。ほんとには自衛隊は JSDF とは言わないんだって。だけど、そういうふうにはできるんだけど、自衛隊はそういうふうに使ってないみたい。

池上：正式名称は何でしたっけね。Japan Self-Defense Forces ではあるのかな？

榎：意味的に言うたらそうやと思うんやけど、そういうふうには使ってないらしい。

池上：JSDF みたいに略して言ったりはしてないということですかね。

榎：Fとかそういうのは、軍隊用語で Force とか、アメリカの飛行機とかそんなのにはみな「力」とか「軍隊」というのはついてる。だけど自衛隊やから、あれは使ってないんちがうかなと思うけどね。意味ではまったく一緒よ。

池上：英語の正式名称をちょっと見てみよう。(注：正式名称は Japan Self-Defense Forces だが、国外では Japan Army, Japan Navy, Japan Air Force と表記されることも。)

榎：それを発見したのは、葉莢を作った時に、LSDF を使ったわけ。そこでLをJに替えたのがそうやった。その時山脇(一夫、1948—)さんなんかと、「これはジャパン・セルフ・ディフェンス・フォース、自衛隊になるな」いうて。「だけどほんとには違うよ」とは言うたけど、山脇さん。

池上：じゃあ最初このタイトルを考えられた時は、日本の自衛隊というのはあまり念頭にはなかったんですか。

榎：いや、どっかにあったと思うよ。

池上：ですよ。

榎：守るといのか、自分を守るのには国には任せておれん。自分の力で守っていくといのか。それは前にも話した、子どもの時分、大量殺人とかあんなのも、人質とかとらないで自分が殺される前に何人乱射できるかという計画のそこから、そういう考えは持ってたんかなあ。

池上：ここに大砲があるだけじゃなくて、的があつて。これは突き刺してるんですか。

榎：そう。この比率はね、国旗やねん、日本の。そういう権力みたいなものに対して、それを一つの的みたいな感じにして。

池上：で、葉莖が突き刺さっている。

榎：弾頭を突き刺してる。そこにあるんやけどね。この時から刻印なんかも作って。

池上：これが実際ここに使われたやつですか。

榎：(実際の葉莖を見せながら) こんな重たいのがついとったんや。重たいよ、結構。

池上：重たそう、確かに。

榎：1979年。

江上：ほんまや、アート・ナウってついで。

榎：LSDFね。これは、取り付けるのは結構大変やったんや。一応、中は抜いてるんやけどね、軽くするために。今はないんやけど、中にメッセージが入っとったわけ。

池上：そうなんですか。どういうメッセージが入ってたんですか。

榎：自分を守る、いのか。それを美術でやっていく、いのか。

池上：そのメッセージの紙はどこにあるんですか。

榎：ない。もうない。

池上：なくなってしまった。残念！

榎：大砲とかあんなのはなくなって、こういう分身だけが少しずつ残ってるんやけどね。

池上：こういう大きい作品が残ってないというのは、置く所もないし、ということですか。

榎：もう作るのだから精一杯。置くとかそんなの考えへんなあ。潰す前提で全部作るんや。

池上：美術館が購入とか、コレクターの人から「欲しいねんけど」とか、そういうのは。

榎：そういうのは一切思たことない。

池上：榎さんが思ってなくても、向こうからそういうこと言われたりというのはなかったですか。

榎：ない。ないし、僕は、これを買えるもんかどうか分からないぐらいなもん作る。だから作品とか彫刻とかいう感じにはしたくなかった。

池上：これだけ大きいと、見るほうも「買おうか」とは思いにくい（笑）。

江上：「どこに置いていいん」という。

池上：売り物という感じは確かにしないですもんね。

榎：なるべく売り物みたいな感じになるようやったら、もうやめてしまうんよ。そこでもう、これはもうそういう変な欲があるなと思てね。なるべくそういうことからは外れていくのか。そのほうが案外好きなことができるというか。

池上：そうですね。これは国旗の比例とおっしゃってましたけど、この的の部分の部分は赤だったんですか。

榎：赤よ。

池上：じゃあやっぱり日の丸っぽいというのがはっきり分かるような。

榎：そうそう。だけど見た感じでは分からへんと思う。その比率が国旗の比率とは思わへんと思うし。

池上：でも、わりとメッセージ性の強い。

榎：だけど、あんまりメッセージ性を表に出したら失敗やねん。だからなるべく（出さない）。後からこういう話し合いしたら、そういうことが言えるんやけど、最初から、これはそういう権威的なものに対して、日本国家に対してのメッセージやとか、そういうのはなるべく見せない。ちょっとまあ言うたら茶化すみたいな感じでやっていくというか。

池上：そうですね。告発のための道具になったらやっぱり面白くないですもんね。

榎：それはまた美術とは違うと僕は思てるし。

池上：そのバランスが難しいところですよ。それでこの後、《大砲》もどんどん作っていかれるんですけど、

この1979年という年でいうと、いよいよ「ROSE CHU」が。

榎：僕、こういうところで展覧会やったことないし。まあこれも初めてやったけど。これをやってる、この堀尾（貞治、1939—）さんが、東門画廊というのができたって。

池上：東門街の中の画廊ですよ？

榎：そう。そこへできたから。堀尾さんに任されてたわけ、好きなような展覧会を自分らで作っていくという感じで。で、堀尾さんから声がかかって、「やらないか」いうて。好きなようにやっていいし、制約もないし。なら、飲み屋街やし、僕もお酒好きやし、ああいう遊び好きやから、夢のような、面白い、今までの展覧会とかそんなのでなしに、何か楽しい、面白い、酒の飲める場ができればいいなと思って。それをひとつの展覧会形式みたいな感じでやったというのか。だから場所性いうのか、ああいう繁華街やし、そういう感じで。それも日程が誕生日、7月11日。僕と誕生日が一緒って言うたな？

池上：一緒なんです（笑）。

榎：合わそうとおもったんだけど、それはちょうどできなかつたんや。2日ほどずれたんかな。それで2日間だけ。そこを借りるのがだいたい1週間ぐらいしか借りられないから、ずっと準備して、4日間でバーを作って、2日間だけの展示。そのほうが面白いと思って。噂が広がったら、その頃にはもうこのバーがないというか、来たらもうなくなってる、なんかそういう感じが、面白い。4メートル×1メートルの、L字のカウンターがあるわけ。だからイスもL字型の、それに添ったイスやねん。シーソーになってるねん。1点だけで支えているわけ。だから、L字の向こうの人が立とうと思たら、こっちの人がドーンとなるわけ。こっちの人が立とうと思たら、向こうがドーンとなる。だからお互いに。

池上：常にバランスを。

榎：声をかけんでも、声をかけてもいいし、そういうコンタクトいうのか、コミュニケーションをとるというのか。そういう楽しいような、危ないけど（笑）。

池上：危ないです（笑）。酔っぱらってるし。

江上：忘れてガーンみたいな（笑）。

池上：女装してみようというのは。

榎：それはね、女装いうのはね、僕はうーん、女性でないから、なんかやっぱ興味あったというのか。化粧とか。

池上：やってみたいのが。

榎：やってみたいというよりか、どういう気持ちかなと思てね。会社へ、いつもオートバイかクルマで通勤してたんだけど、一時なんかしら歩きたくなってね、会社まで歩いて行くなにを1年か2年つくってたんかな。その時毎朝出会う女性がおるの。板宿駅で降りてね、ものすごい化粧した人やねん、その人が。ものすごい。眉毛でもほんまに「描いた」感じの、すごい化粧した人やねん。毎朝同じ時間に会うの。5、6分ずれてたら、時間帯によってちょっと違う場所で会ったりするの。その子と会わない時があるんよ。そんなら心配するんよ、

どうしたんかなと思って。色々想像するの、化粧失敗したんかなとか。眉毛描くの、どうやって描くんかなと思って、あんな大変な眉毛。その子に会わなかったらものすごく気になるの。どないしたんかなって。それで何日かしたらまたいつものように会うから、「あの時どうしたんかな……」って。最初はね、結婚したんかなとか色々想像するわけよ。

そういうことがすごく面白くなってきてね。毎朝、全然知らない人と出会って、そういうことを想像したり。化粧とか、女性の髪型にしたって、そういうことがずっと気になるというか、面白いなと思って。女性も顔描いたり化粧するのもひとつの表現やと思っちゃったわけ。そういう時にそういう出会いがあったら面白いなと思うし。それはまあいつかやりたいってのは、ずっと前からあったわけ。そういうことがあるから、繁華街やし、変に作品みたいなものやっちゃってしゃあないなと思って。だからこういうのが面白いし。一般の、美術を知らない人でもひょこっと入ってきたらね、もう夢のような。ただやねん。無料やろ。無料でお乳触れるしな、シーズンもあるし。そんなのやりたいなあとって。

その時映画みたいな作ってね。その頃、ビデオが出始めた頃やったんかな。まだ一般には出てなかったんや。東芝とか最初出始めた時期かな。そこから借りれるということがあって、映画が好きな連中に頼んで、ずっと写真を撮ってもらた。

池上：榎さんが消滅して「ROSE CHU」に生まれ変わるという、あの映画ですよ。

榎：そうそう。これを肴にみんながワイワイ、アホなこと。「あいつアホやな」とかね、そんな話ししながら飲むような場所やねん。

池上：ちょっと自宅を開放された時と少し似てる雰囲気もありますよね。「ハンガリ」のフィルムを見せながら、みんながワイワイ、榎さんの家でお菓子食べたりして。

榎：ああ。

池上：これはご自宅ではないけども、やっぱり「ROSE CHU」という女性の空間にみんな入り込んできて、映画観て。

榎：ROSE が、言葉でやる、今日みたいに質問でね、「なぜ ROSE をこんなとこでやとるん？」とか、やっぱりみな質問するわけ。それよか映画見てくれ、という。

池上：こうやって生まれ変わって出てきたんやという。

榎：ROSE がエノチュウと結婚して、ROSE は榎の妄想の世界に勝って、ROSE のほうは誕生したというのか。あの時の6連発の中に1発だけ弾を込める、ロシアルーレットがあったんや、『ディア・ハンター』か何かいう映画で。その時にそういう賭けをやって、一発勝負で、その時は金のかけ合いっこするんやけど。命をかけてそういうルーレットみたいなのをやるという。その時映画にもそれを使ったんやけど。6連発の中の1発、どこに入るとのか分からないんやけど、榎忠は撃ち抜かれて ROSE が誕生して、そこでバーをやっているというか。

池上：「ROSE CHU」の、巻き毛で長くてとか、そういうのを参考にした女優さんとかモデルさんなんかは。

榎：いない。たまたま僕らの研究所へ絵を習いに来てる子がいて、その子は美容院やってたんや。だからそこで。結構そこは、今やったらエステとかいうて、泥でいろんなことしたり、すごい美容院やったのかな。若い子やっ

たけど。その子が「手伝うよ」いうて。そのへんはみんなその時の雰囲気みたいなのでつくってもらって。こっちが「こうしてほしい」とかいうのでなしに、「このカツラやったら合うよ」とか「こんなほうがいいのところがうか」って。

池上：その人がプロデューズじゃないけど、色々。

榎：うん。

池上：2日間ですでたくさんお客さんは来ましたか。

榎：結構来たよ（笑）。

池上：ただで飲めるとなれば、それは（笑）。

榎：それは展覧会やと思わへん人が多かったしね。

江上：ほんまに間違えて入ってくる。

榎：その頃はまだ、山脇（一夫）さんとか、ここにおる中島（徳博）さんとか。シティギャラリーできた頃やったんかな。その頃、まだ椿（昇、1955—）くんとか、あの辺はみな学校を出た頃やったんかな。学校の先生やったんか、もう。

池上：椿さん？

榎：椿くんとかね。松井智恵（1960—）とか、あのへんが。

池上：あの辺の人たちも来て。

榎：そう。ちょうどそのギャラリーができた年やったんかな。

池上：その頃の東門街って、たぶん今よりももっと。

榎：前はすごかったんよ。

池上：猥雑そのものみたいな。

榎：一番の繁華街。地震の後はさっぱりになってしもたけどな。

池上：今はちょっときれいになっちゃいましたね。

江上：神戸、港町らしい感じですね。

池上：私、子どもの頃、「あそこは一人で通ったらあかん」と言われてましたから。今はたぶん全然平気ですよ。

榎：そうよ。「元町のトアロードから西は危ない」とか、そんなの言われてた。

池上：「トアロードで帰ってきなさい」と言われてましたから。

江上：高架下とかも危なかったですもんね。

榎：結構あの頃、船員とか、外国の人とかが多かったからね。神戸に結構外人バーというのがあったわけ。僕は加納町の美専堂というところへ行ってたけど、そこの下にも「オハイオ」いう外人バーがあったわけ。外人専門やねん。そこはまだきれいな店やったけど、元町の方の危ないところ行ったら、あやしげなバーがあったわけ。そういうのもあったから、こういうバーをやってみたい、というのがどっかにあった。日本人は入れなかったんよ、ほとんど、そういうバーには。外国専門のバーでね。そういうのをのぞきに行くとか、そういうところ行きたいなとか。それやったら自分でやった方がいいのちがうか、そういう感じやった。だから神戸いう場所柄やったし、外人バーというのはいっぱいあったし、なんかそういうところでこういうものも生まれたんちがうかなと思う。

池上：キリンプラザ（大阪市）で個展（「その男、榎忠」、2006年2月11日—4月16日）をされた時に復活しましたが、これをやった時は「もうこれ一回限りで」というつもりでやられたんですか。

榎：そうそう。

池上：また後でやろうとは思ってなかった。

榎：そんなの思ってなかった。キリンは榎木（野衣、1962—）さんとヤノベ（ケンジ、1965—）くんと、五十嵐（太郎、1967—）さんとかいう建築（史）家がいろんなパターンで展覧会やってたんだけど。個人的に1年間、ヤノベくんがやったら、あと榎木さんがやるとか、五十嵐さんがやるとかいう展覧会があった時に、ヤノベくんが「やらないか」いうて。最初やるつもりでなかったんだけど。僕、病気しとったんよ、その時。展覧会のことはあんまり考えてなかったんだけど。ちょっと病気が良くなって、こういう作品集も作ろうかって。変な気持ちでね、死ぬこととか変なことばかり想像して、作品どころじゃなかった。その時にヤノベくんが「やらないか」って言いに来てくれたんだけど、そんな体やったし、できると思ってなかったし、あんまりええ返事しなかったわけ、「ちょっと考えさせてくれ」いうことで。「いっぺん見たいから」いうて。若い時に僕のを見てなかったって言うし、「そういうのを少しでも体験してみたいから」と言うてくれて、やってみようかと思って。それには、ただ作品をやるだけじゃなしに、あそこは宗右衛門いうて、ROSEが神戸でやったような繁華街があるわけ、飲み屋街が。それもあるし、「それやったらいっぺんROSEもやったら面白いかな」と思って。「それやったらやるわ」いう感じで。「それでもいいんだったらやるわ」って。そこはキリンビールやから、ウイスキーはなにやから、「ビールやったら協力できる」言うから。なんでもいいから、ビールでも協力してくれる、「ほなやるか」いう感じ。だから28年ぶりにやったわけ。

池上：28年ぶりのROSEがまた美しかったのがすごかったですけど（笑）。

榎：見たん（笑）？

池上：いや。個展は見させてもらったんですけど、バーをやってるところはちょっと見逃してしまっ。

榎：あれは土曜日だけやったんかな。休みの時だけやったから。

江上：あの時もものすごい混んでましたもんね。

榎：ものすごい人やった。

池上：入れなかったかもしれないですね。

榎：整理券いるぐらいやった。

江上：バーで整理券って、どんなバーや（笑）。

池上：こういう写真とかもどなたかにお願いして。

榎：米田さんという人がずっと、万博の時からもそうやけど、原子爆弾とか。

江上：米田定蔵（1932—）さんでしたか。

榎：そう。

池上：榎忠さんの作品をずっと撮ってくれてる。

榎：作品いうよりか、うちの近所やったんや、その人が。たまたまそのカメラのスタジオとかが、『KOUBECCO（月刊神戸っ子）』関係の仕事ですっとしてたから。僕、写真が必要な時もあったからね。もう言わなくても撮りに来てくれたりなんかしてた、案内状出すから。結局、ROSEの映画撮るのもこのスタジオを借りてやったんや。

池上：そうですか。写真がまたキマってるので、ポーズをとる様も（笑）。

江上：写真館をやってはる人ですね、ずっと神戸で。

榎：今はもう年いってね。息子が後をやってるんだけど。そういうアホなことやっとして、さっきの増田さんとかが推薦してくれたのが、「神戸でこういうことやるんけど」いうて。

池上：それがポートアイランド博覧会（《スペースロブスターP-81》を「テーマ館」で発表、1981年3月20日—9月15日）で。

榎：テーマ館やから、ちょっと色々うるさいことがあるかもわからんけど、神戸の発展してきた、こういう作品をやってほしい、言うから。僕はそんなのはあんまり分からへんから、廃材とかそんなのが使えるし、そういうのは協力できるいうから、「ああ、それやったらやりたいな」思って。僕らがなかなか手に入らないような、船とか電車の車両とかそういうのでも。その時の大きなプロデューサーが、小林公平いうて、阪急電車の、歌劇か。新喜劇ちゃうな（笑）。あそこの専務か何かやっとしてん。

江上：小林一族ですね。

榎：そう。「電車もいると思う」「いや、そのぐらいやったら手に入る」いうて。「へー！」って。それで、実

際これ走っとるんや、塚口線やったかな、阪急のね。それ乗りに行ってね。実際、中は木やったんや。

江上：次にありますね。

榎：これ、この電車に乗りに行ったんや。これがあと1か月ぐらいしたら廃車いうのか、正雀いうところの工場で切るから、そこへ来てくれたら、どれがいるか言うてくれたらできるから、いうて。そういう大きな部材が集まるとい魅力があったから、「ほなやろか」いうて。最初はあんまりやりたくなかったんや。だけどどうせ誰かがやると思ってね。それやったら、変な彫刻なんか出されたらかなわんなと思って。僕が好きなことできるんやったらやったほうが、僕にとってもやる気が出てくるし。

池上：やりたくなかったというのは、やっぱりそういう博覧会とかそういうものに対する何か。

榎：見せ物みたいやん？　なんかそういう意識があったから、あんまり最初は思わなかったんだけど。特にまたテーマ館やろ。神戸市の一番のなにいうのか。

池上：一番の目玉というか。

榎：子どももたくさん来るし、学校単位で来るからね、ああいうところは。それやったら、変に閉鎖的に思わないで、もっと広がっていくようなところでやるのだったら、材料も協力してくれるというのもあるし、言うたらありがたいなと思って。今までは思ってたけど、こういうことやったら思いっきりできるかなと思って。

池上：こういう大規模に廃材を使って、というのはもちろん初めてですよ。

榎：初めて。部分的には《大砲》とかあんなのではやったことあるけど、ほとんど廃品使ってこれはやった。中には作ったやつもあるけど。

池上：鉄道の車両から船舶まで、ってすごいことになってますよね。

榎：船に実際乗りに行ってね。これか。石川島播磨へ乗りに行ってね。いっぱいつながってるの、船が。解体される順番を待ってるの。それでこのぐらいのクラスやったらいいかなと思って。

池上：実際にちゃんと乗って確かめてから、というのが榎さんらしい。

榎：ボートいうの？　モーターボートみたいなので、そこの業者の人と役所の人と一緒に見に行くわけ、だーっと。雨の日やったかな。最初は3枚のスクリーンを描いてただけど、実際出てきたら4枚やったわけ（笑）。それもかえて良かったんやけど。すごいフジツボが付いてね、いっぱい。

池上：フジツボは取ったんですか。

榎：全部磨いて。

池上：これは全長13メートルで重量が25トンとなってるんですけども、手伝ってくれる人とかはいたんですか。

榎: だいたい小さい部品を集めて組んでいくからね。ある程度大きくなったら、業者の人に運んでもらって。いっぺんにこういう大きいものは運び込めないわけ。だからまず大きいものをとにかく入れて、徐々に作って行って、その時とび職の人とかそういう人を頼んでセッティングしていく。

池上: アシスタントが1人か2人いたらどうにかなるようなものではないですよ。

榎: ちゃうちゃう。だから上からぶら下がって(ネジを)留めたりとか、すごかったんよ。とび職と一緒に。

池上: これは今でも、今まで作られたなかで最大の作品ですか。

榎: そうやね。重量的にしたって。大きいのはあるよ、《AMAMAMA》(尼崎記念公園設置、1986年)とかね。20何メートルとかそんなの。やっぱりこういうモノとしては一番。

江上: 複雑やし。

池上: これも残ってないというのが非常に残念ですね。

江上: 途中まで残りかけたんですけどね。

榎: いっぺんそういう話があったんやけどね。

池上: そうなんですか。それはどなたかが。

榎: それは最終的に。いろんなとこがあったんよ、水族館とかね。だけど水族館やと海の近くやし。

池上: 錆びちゃう。

榎: 屋外はだめやいうてね。これは屋内用に作ってるからね。鉄板なんかでも薄い鉄板が多いから、海の潮風では傷みも速いし。あんまり塗装してしまつたらこの面白さが出ないしね。そういうのは無理やって。最終的に住友金属いうところ、此花区か、今の博物館とか水族館があるところ。あそこにそういうものができるという予測があったんだけど、その前に住友金属が金属の博物館作りたい、それにぜひ置きたい、いうて。

池上: 良さそうですけど。

榎: そう考えるとやっぱり3階建てか4階建ての空間がいるわけ、高いから。そういうのを検討しよる間に、「鉄冷え」いうのか、景気が悪くなってしまつて、住友金属自体がもうだめになってしまつて。あそこはもう変わってしまったんだけどね。4~5年は置いてくれてたんよ、分解して。

池上: 景気が悪くなったというのは、バブルがはじけてしまったということですか。

榎: いやー、バブルの前やと思う。

池上: もっと前ですよ。

榎：「鉄冷え」って、全国的な不況でなしに、金属のほうがすごく悪くなったことがあったんだけど。

江上：バブルの前にたしか重工業みたいなのがちょっと一回だめになりましたよね。

池上：そうか。屋内でこれを設置できる、引き取れるようなところがなかったという。

榎：最終的に住友金属が引き取ってくれるというんだけど、結局は、4～5年は置いておいたんだけど、もう錆びが出てしまって。

池上：それは残念でしたね。最後は住友金属が解体。

榎：もう向こうに任せてね、好きなように処分してくれ、いうて。

池上：じゃあ解体されてしまったんですね。

榎：動かすだけでものすごい費用がかかるの（笑）。

池上：でしょうね。

榎：だからもうほんとに引き取ってくれるだけでもありがたかったというか。

池上：いや、でもこれはほんとにものすごい迫力ですよ。

榎：これを、村上（隆）とかあんなのが若い時見とった。写真しか見てないやけどね。それですごく気に入ってくれて。彼は、最初のドロ잉を買ってくれたりしてね。このドロ잉を村上が買って来てね。彼もその頃結構いろんなものがボンボン売れ出した頃や。金持ちになってた頃や（笑）。

池上：村上さんて、隆のほうですか、三郎のほう？

榎：隆。

池上：隆のほうですよ。村上隆がちょっと稼いだした頃にこれを買った。

榎：これはアートフェアいうて、東京の山本現代が「出さないか」って、それで初めて。森美術館でやる予定ができた頃やったのかな。山本（ゆうこ）さんが、榎木さんの奥さんやけど、ちょっと費用を稼がなあかんいうことで、銃とかドロ잉を展示したのかな。ドロ잉は売るつもりでなかったんだけど、村上が「よそに売るんやったら絶対欲しい。売らんとってくれ」いうて。「ほな買うか？」言うたら、「買えるんか？」言うから、「買ってくれるんやったら売るよ」いうて。で、買ってくれたのかな。

なんかこういうようにやっていったら、次々うまくつながっていくというのか。面白いなと思って。だから何かやる時に、次何かやりたいとか、そういうのは全然僕もたない方やから。とにかくそれをやりきってしまったら、あと何つくるか分からへんし、どういう動きをしているのか分からないし、先のことは考えんとやるから。だから今一番のんびりしたい時期やけど、なんか今一番不安みたいなとこで。これからどうしていこうかなと思ったりして。そういうとこから、また何かやりたいものがあれば立ち上がってくるかなと思うし。それまでは放ったらかしてるの、自分を。

池上：この頃はほんとに次から次へと発表の機会がある感じですよ。この次の年にまた個展をされていて。

榎：次は《原子爆弾》（「U235Pu239 原子爆弾」、神戸・花銀別館大西ビル、1982年5月2日—9日）かなあ。

江上：《原子爆弾》です。

榎：あ、その時代。

池上：そうですね。《リトルボーイ》という。

榎：これはまた、たまたま二宮に「海皇（ハイファン）」というのがあったんだけど、そこに「クア」いうてお湯が出てくるところがあるわけ。そこの地下で、「場所があるから使ってみいひんか」いうて。倉庫で、資材をいっぱい置いてたんやけど、それを貸してくれる。何年でもいいいうから。それを片付けしながら、その間にいろんな映画やったり、舞踏やったり。田中泯（1945—）とかが来て「使わせてくれ」とか、いろんなことやったんだけど。最後に僕の展覧会が目的やったから、やったんだけど。そういうふうに偶然と、場所とか、なんか面白い場所を提供いうのか、貸してくれる人がだんだん出始めたというのか。

池上：今までも原発とか原子力に関することってずっと、この展覧会をする前にも。

榎：あったよ。

池上：あったと思うんですけど、この展覧会で初めて《リトルボーイ》という、まさに原爆の名前をバーンとつけはって。それに至る心境というのはどういうものがあったんでしょうか。

榎：心境いうかね、ああいう原発とか反核、その時は原発いうより反核のほうが強かったかな。

池上：そうですか。

榎：その時に、言葉とかそういうんじゃなくて、集団でするのも大事やと思うんだけど、僕は美術のほうをやってるから、そういう方面から、メッセージにしる、告発にしる、やりたいなというのがあったから。集団でいろんな人の署名取ったりとか、そういう運動ももちろん大事やと思うけど。僕自身が単なる、何万分の1かどうかわからないけど、そういうのに参加することは大事やいうのは分かってるけど、それよかもっと方法もあるのところが、という。僕の考え方はそういうものを持ってから。ただ原発は悪いとか、戦争に使われるものは悪いとか、そんなの誰でも分かってることなんだけど、そういう、作ってみようとする人間の心境みたいなものを僕ら想像するわけ。原発のウランとかを発見した人でも、これで原子爆弾作るように思ってたわけじゃないと思うねん。

池上：最初はね、発見した時はそうですね。

榎：ノーベルいう人も、火薬とかああいうのもそうやと思うんだけど。だけど人間がそれを戦争に利用したり、殺傷力が強いことが分かるからそういうふうに使っていくいう。なんかそっちのほうに興味があるわけ。実際の原子爆弾は作られへんけど、そういう心境にどこまで自分が入っていきけるかという。それにはあんまり抽象的な、作品的な原爆ではだめなわけ。やっぱりもっと具象的な。

池上：そのものズバリというか。

榎：そうそう。見たら、「あ、これは原爆」とかいうのが分かるような感じにするわけ。あんまり変に作品とか芸術とか美術いうのでなしに、そういうとこでやっていきたいなど。だから、発明した人とか人間の想像力とか、そういうものがすごく興味があるというの、面白いなと思うし。

池上：実際に作ってみて、その心境に近づくことというのはできましたか。

榎：うーん、心境いうかね、「ものづくりってそうやな」いうのは分かる。たしかに原子爆弾とか銃とか、そういうものではないんだけど、殺傷できるものでないんだけど、モノマネいうのか、具象的な似たようなもんやけど、実際は似て全然違うもんやん？ そういうもんだけど、モノを作るというのは、やっぱりそういう魅力いうのか。

池上：だから兵器だろうが。

榎：なんか引きこまれる。

池上：銃だろうが。

榎：何であろうが。

池上：作ってる時は夢中になっちゃう。

榎：うん。その辺の人間の心境いうのか。だから僕にも、こんなの作れば、使ってみたい、見せたくなるとか、なんかそういうようになっていくやん？ なんか人間のものすごく凶悪な面とか、欲いうのか、そういうものがどこまで自分に耐えられたり考えたりできるか、というものがあるんだけど。そのへんの魅力いうのが、ものづくりいうのか。

池上：あやうさと紙一重みたいな。

榎：その辺が、ものづくりにすごく魅力あるいうの？ 彫りものにしたって、ものすごく細かい、こんなの人間がやるのかなと思うぐらいすごい職人とかおるやん？ そういうのが感じられるわけ。やっぱり人間ってすごいな、いうのか。だから僕はいつも、ホンモンでもない、美術とかなんかそういうの言うてる、ある意味変に中途半端なとこでやってるないう気はしながら、だけどやっぱり作りたくなるいうのか。

池上：でも、こういうのを作りっても、ただの告発じゃないというのは、そういうところなんだなと。

榎：うん。だからものすごい人間個人の想像力もあるし、人間として生まれている人は、みんなそういうことを考えるという。それはまあ人間の特権かなと思うし。その特権を悪く使う人もおるけどね。だけどそういう危ういものやと思うねん、ものづくりって。そういうのはすごく惹かれる。

池上：これも、残ってはない？

榎:これも残ってない。ほんとはどこかが買ってくれたんや、これ。だけどどうなってるのか分からない。鞞ギャラリーというのが大阪にあったんやけど。そこの桜井(弘子)さんという女の人が買ってくれたんやけど。

池上:買ってくれたということは、どこかに残ってる?

榎:置くところがない。大きいんよ、これ結構。河内の方やったかな。兄貴が農業かなんかをやってたかな。その納屋が空いてるからいうて置いてたんやけど、置いてたら、納屋やし、湿気があるから、「鉄やから錆びるよ」言うたんやけど、「いや、かまわないから欲しいんや」いうて。

池上:どうなってるか、見に行ってみたいですね。

榎:たぶんないと思う。兄貴にほかされてると思う。これも一緒にね。後ろにある自動車の排気ガスのマフラーなんだけど(注:『Everyday Life/Art Enoki Chu』、114頁)。その頃、原発とか反核運動はあって、自動車の公害とかは出ていたんだけど、そういう告発なんかの運動みたいなものは(僕はしない)。これ地下なんだけど、この下に水を貯める水槽みたいなものがあるわけ。そこからメタンガスみたいな感じでマフラーをつなぎ合わせてるんやけどね。徐々に自然とか人を犯していくというのか。それと一瞬に、人を殺すのという、対比したような武器なんや。

池上:両方。

榎:だけど、問題になっている、大量殺人とか戦争というのは反核とかそんなので運動はあるんだけど、まだまだそういうCO2いうのか、排気ガスとかそういう問題はあまり出てなかった。その時に、そういうひとつの人殺しの方法としてこの作品をやってたんだけど。ここの窓に少しダイオキシンの芽が出てるんよ(笑)。その時はあまり言っはなかつたんだけど。その後ダイオキシンがダーッと。それは、成長していくやつが次の喫茶店になっていくんやけど。

池上:この展覧会ですでにその芽はあって。ダイオキシンのお話まで聞いて、今日はいったん切りがいいところで、ということにしようかと思えます。この写真もすごい迫力なんですけど、これが喫茶店のスズヤでやられた。(注:『Everyday Life/Art Enoki Chu』、120-23頁)

榎:スズヤいうて、春日野道の、阪神に近いんかな。阪神の春日野道に近い商店街の、ちょっと東に入ったところか。

池上:今もありますかね。

榎:今はマンションになってしまってる。そこは友だちのお母さんが喫茶店をやってたんだけど、お母さんが年いって、もう喫茶店をやるのはちょっと。病気かなんかしたのかな。息子と娘がおったんだけど、その息子も娘も研究所ヘッサンを習いに来てた関係で。僕も何年もずっと場所を探しているわけ。そういうことを前に言って。「こういう喫茶店をうちのお母さんがやってたんやけど、やめて、そのまま空いてる」言うからね。「ほな、いっぺん見に行くわ」言うて。

池上:じゃあもう喫茶店じゃなかったんですか、これをやった時は。

榎:店はやってない。だけど喫茶店のままやったんや。イスやそういうのが全部残ってるんだけど、それを片

付けして、2階へ運んで。床もめくってね。

池上：今これ見ながら、「喫茶営業できないな」と思ってね（笑）。もしまだやってたら。

榎：風呂からもう全部、2階へ上がっていくやつとかね、いろんなのを利用して。

池上：家そのものをインスタレーションに使ったという。また子どもが喜んで。

江上：お店兼住宅やったんでしょ？　ここが風呂場で。

榎：そうそう。2階に住宅みたいなのがあってね。

池上：このタイトルの《2・3・7・8 TCDD Propagation Dioxin》というのですかね。これは？

榎：これはダイオキシンの記号なのか。そういういろんな番号があるの。2・3なんかでもいろんな番号があって。毒性が強いのが、この時世界で一番きつい、強い毒性があるダイオキシンがその番号らしいんよ。

池上：ダイオキシンの種類を表記する記号。

榎：そうそう。こういうふうに、化学記号かなんか知らんけどね、角形かなんかで記号があってね、その組み合わせによっていろんな猛毒が出てくるんよ。

池上：番号が変わってくるんでしょうね、種類とか毒性によって。

榎：そうそう。原爆もそう。PU-239（プルトニウム）とかU-235（ウラン）とかいうので。そういう中で、ちょうどそういう場所があったし、前から気になっとったんや、ダイオキシンいうのはね。

池上：ゴミ処理場からそういうものが出てという。ここにあるのは、マスコミを騒がせたんだけど、1週間で報道がやんでしまったという。

榎：1週間もなかったぐらいよ。テレビとかあんなので、すごい最強の猛毒が出たいうて。だけどもう2、3日して新聞の一面から全部消えてしもた。

池上：そうですか。

榎：それは、どういうのか、気になるわけ、こっちにしたら。

池上：あやしすぎますよね。消えるわけないし。

榎：その頃、プラスチックというのがごつつう出だした頃やったんや、ビニールとか。その時に企業がすごく、積水とかああいうところが、窓枠とかあんなのに塩化ビニールを使い出した、プラスチックとか。そういうことがあるから、そんなのがボンと出たら困るわけ、企業としたら。だから国とか、情報を流す方は全部シャットアウトするわけ。こっちにしたら「なんでかな」と思うわけ。余計何か裏があるのとちがうかなと思うわけ。それはすーっと思ってたんだけど、作品にしようというのはなかなかなかった。

僕が地震の前におった、家で展覧会をやったところが、まだ山の方やったから土の道やったんよ。それを、議員さんかなんかが、地元の人のかでアスファルトにしてしもたんや、地面を。そうしたら、春になったらアスファルトを割って、細い草花とかぺんぺん草みたいなのが出てくるの。

江上・池上：へえ。

榎：アスファルトからよ、ワーッと割って。アメリカタンポポというのが、日本のタンポポはほとんどなくなってくるんやけど、アメリカタンポポというのはものすごく力が強い。そういう強いやつはそういうところを割って出てくるんよ。そうしたらほかの弱い植物はどうなったのかと思うわけ。みんな死んでしまったのかね。だけど違った生き方を見つけて、地中で育つような生き方をしてるのか、想像するわけ。そんならもう気になって、たまらなくなってくるわけ（笑）。それでダイオキシンとか、その時ベトナム戦争の枯れ葉剤とか、あんなのが使われてるというのを後で聞いたんかな。すごい猛毒がどこへ行ったんかなと思ってたら戦争に使われてたんや。そういうことで、「これはやらなあかな」と思って。ずっと場所は探してたんだけど、たまたまここが空いたということを知って。下町で突如、美術館とかギャラリーじゃなしに、バツとドア開けたら、表に看板がある喫茶店を開けたら、こんなのが繁殖してるの？　そういう感じにもっていくというのかな。

池上：これも鉄で作ってるんですね。

榎：全部鉄。全部つながってるの。ポンとどっか叩いたら、ボンと揺れたりね、音がずっと響くわけ。風呂入るとるやつもおもしろい。

池上：ダイオキシンが風呂入ってる（笑）。

榎：真っ青な、ブルーの風呂の水やねん。そういう不思議な風呂に入るとったりね。鏡見てたり、いろんなやつがおって。2階へ上がってるやつとか。ここはものすごく古い建物やっけね。床めくって、下に出てくるのはレンガとか瓦とか、戦争の時焼け野原だったにおいがそのまま出てくるの。その時ごっつい、あの匂ね。

池上：ああ、春日野道とかは焼かれてますよね。

榎：空襲されたりしたんやって。そういうところが、掘り出したら、そういうにおいとか。

池上：土地の記憶みたいなものともつながりますね。

榎：その近くで友だちが喫茶店をやっけて、コーヒーを沸かした後のカスもらって。ええ匂いがするんよ、コーヒーの香りと。それを何日か置いてたら、冷たいコーヒーから出るコーヒーのカスがごっついい匂いがするんだけど、カビが生えるんや。これ、結構カビが生えてんねん。なんともいえん感じやねん。それににおいがあってね。カビが生えてね。そういう中でこういうダイオキシンが。これが全部変形してるの、顔が、へっこんだり、ポコッとふくれたりしてね。ベトナム戦争でダイオキシンを使ったら、子どもとか妊娠した人とか、卵とか穀物なんかを巣にするんやって、ダイオキシンは。そういう性質を持ってるんやって。だから子どもに奇形児とかそういうのが出るわけ。そういう中で、全部、目が飛び出たり、へっこんだりしてるの。こういうようにへっこんだり、こっちが出たり、変形してるんやんか。

ちょうどその頃に関空というのが出来始める、準備やってた頃やったかな。そこへ淀川とかいろんな川が、ずっとたまり場になると想定してね、大阪湾が。そこにダイオキシンの巣ができるというのか。その時にみんなが楽しみにしてるわけ、「あそこに自分たちの仲間が来るな」と思って。みんな関空をにらんでるわけ。全部こっ

ち向いてるの。

池上：関空を向いてるんですか。

榎：向いてるの。

池上：ああ、そうなんですか（笑）。

江上：南の方面で。

池上：仲間がああ港にできるって。

榎：ここは閉じ込められた世界やったんやけど、僕が掘り起こしたことによって、ガーッとワラビみたいに繁殖していくというか。

江上：いや～。

池上：すごい。

榎：これは街に出た、さんちか広場やけどね。もう一個、甲南大学の近くのところに、橋本くんていう建築家の家の周りにバーッとこれがあるんや。これがどんどん徐々に外へ出て行ってね、繁殖（Propagation）していきよる。水道筋のもそうやけど。もう一個の、岡本にあるのはね、木にくい込んで。（注：『Everyday Life/ Art Enoki Chu』、126頁）

江上：ほんまや！ わ～。

池上：これは今も見れるんですかね。

榎：見れるよ、そこへ行ったら。

江上：これはお家ですか、個人の。

榎：個人の家。植松なんかの先輩やねん、神戸大学の。

池上：中に入らないと見れないか。ちょっと見に行きたいな。

榎：岡本の川沿いをずっと上がって、埋め立てしたとこ。

池上：梅林公園の。

榎：うん、あの上の方。

池上：いいとこですね。

榎：木が小さかったんや、作った時は。それが、何十年たったら木のほうが大きくなって。これは動かないからね。

池上：巻き込まれてね。

江上：一体化してる。

榎：一個だけ家の中をのぞき込んだるのがおるの。

江上：へー、狙ってる。

池上：狙ってるんですね。

榎：家の中の様子見とるんや。これがあそこの水道筋の。

池上：これですか。

榎：うん。これはブラッケンサウルスいうて、ワラビ。繁殖していくわけ、ずっと、根っこが。

池上：こういうのは当時どこで作っておられたんですか。

榎：うちの会社。仕事終わった後とか、休みに作ったりとか。友だちとこの場所借りたりして。細かいものはうちの会社でできるけど、大きく組んでいくというとなかなか広いとこでないといけない。こういうとこ（今のアトリエ）なかったからね、まだ。全部中で組み合わせるわけ。出る時は全部またバラしてね、全部ガス（バーナー）で切って運び出す。

池上：さっきのスズヤのも、このままは持って来れないし、出れないだろうなと思って。今日もすごくたくさんお話を聞かせていただいて。今日はこの辺にして、また次回お願いしたいと思います。

## 榎忠オーラル・ヒストリー 2012年4月10日

神戸市西区の榎忠アトリエにて

インタビュアー：江上ゆか、池上裕子

書き起こし：永田典子

池上：前回、ダイオキシンの、スズヤさんのところまで話を聞いたので、今日は、大きい作品で残っている唯一の作品ということになるのでしょうか、尼崎の（スポーツセンター）記念公園にある《AMAMAMA》（1986年）という作品についてお話を聞きたいと思います。これは、尼崎の方から、「こういうのを作りませんか」と言ってきたんですか。

榎：ポートピアでロブスター作ったでしょ、でっかい宇宙船みたいな。そこは乃村工藝が担当してたわけ、僕のテーマ館の作品なんかを。その時乃村工藝も、向こうの資料とかそういうのがごっついデザイン賞を取ったりして、すごく喜んでくれて。尼崎の方で、市制70周年かなんかいうことで、乃村工藝もそれに関わることになったわけ。その時、僕にモニュメントみたいなのを作ってくれ、いうて。この競技場、尼崎のスポーツ記念センターやけど、そこへこの門から入場するわけ。今はちょっと変わってしまったんだけど。ここへ入場する時のひとつのシンボルみたいな彫刻をやってほしい、いうて。僕はそういう彫刻的なものはあまり面白くないからやりたくなかったんだけど、「好きなこと考えてくれ」いうて、3つぐらいプラン出したんかな。なかなかオッケーが出なかったわけ。

このプランも出したんや、これ。これ作りたかったわけ（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、230頁）。これね、一応15メートルぐらいになってるの。ほんとに30メートルぐらいに作りたかったわけ。これ作るのでも、基礎とかそんなので、もう重量的にもすごい、100トンとかそんなのになる感じ。機械の部品とか、大型のやつをダーッと取り付けて組んでいくわけ。そういうプランを出したんやけど、これはもう費用がすごくかかるし日数もかかるということで、このプランはだめになって。それでこいつを出したんかな。そして、これが面白いんだけど、僕が図面に構想を描いたら、かなりこれも重量的になるし、色も黒色いうたら、向こうは公園やし、「子どもが寄りつかない」いうてね。それで向こうは、ピンクとかブルーとか「子どもが好きな色にしてほしい」言うわけ。いや、「こんなのピンクにしたら面白くないし、やっぱり僕は黒でやりたい」いうて。それで色々向こうも、「それはあかん」とかなんか言うたんやけど。もう大人が決めてつけてしまってるというのか、「子どもってこういうもんや」いうて。

池上：ピンクが好きとか、思い込みですよ。

榎：そうそう。怖いもんでも、最初子どもは寄りたくても、怖いというのがこれの面白さやねん。みんなドキドキしてね。小さい時に、どうなのか、怖いから兄ちゃんと一緒にいくとか、近所の親ブン、ガキ大将みたいな人に連れて行ってもらうとか、そういう中で子どもって育っていくもんやと思うんよ。そういうこと言うたら向こうも一応納得してくれて。市長が、革新的で変わった人いうのか、「何かガツと来るようなものがやりたい」いう人やったんや、市長が。で、一発でこれも気に入ってくれて。

江上・池上：へえ。

榎：これも気に入ってくれてたんやけどね。まあ市長が金出すのところがうからね（笑）。「おっ、これええな」とか言うたんやけど、結局、そこ下の人が検討とかそんなのしたら、これはちょっと費用的とか日数的に無理や、いうて。これはまあそういうことを話したらなんかオッケーになって、それでかかったんだけど。（最初のプランでは）中へ入ってね、階段が五重塔みたいになって、だんだん上がっていけるようになってるの。

池上：そういうプランなんですね。

榎：うん。それで、上がパッと開いて、レーザー光線みたいなのが出るような。「宇宙との交信」って言いよったんやけど（笑）。まあこのプランはだめになったんだけど。そういう構想を話したんやけどね、とにかく重量的に過ぎて、ちょっと無理いうのか。ほんとは万博にある太陽の塔に負けないような大きさに作りたかったわけ。

池上：ああいう背が高いのを。

榎：うん。最初からそういう大きいプラン出したら通らないからね。だいたいこういう感じで。こういうのを見せたら向こうの人がびっくりするから、徐々に。1年目まず作って、2年目にこのぐらい作って、3年かかって作ろうとしてたんだけど、向こうの人は、70周年記念やから、いつやるというのが決まってるからそういうことはできない、いうてね。で、これはだめになって、このプランを出したら一応オッケーになって。だからこれをやるまでにいきさつがあったんや、結構もめて。黒い色もそうやけど、こういうふうに子どもが上がるとか、いろんな問題があったんやけど、徐々にやりながら解決していこうということで。でもここへ作って1年もしないうちに、いろんな人が集まってきて、夜になったら暴走族みたいなものたまり場になるわけ。で、ここでシンナーとかそういう。時期も時期やったんかな。

池上：ちょうど80年代後半というと、ヤンキー文化が（笑）。

榎：そういう人が集まってくるいうて、「そらみたか」いう感じで言われたんだけど。すぐそばに交番所があるんよ。そこへ僕ら頼みに行き、「そういう人が集まってきたらちょっと見守ってくれ」って言うたんや。すぐそばにあんの。ほんとにそこに車置いてるぐらいのところに交番所があるの。だけど何か起こらなかつたら出られないんやって、警察の方も。近所の人から要請があったら出れるけど。そういう中でまたいろんな問題が出て。で、最終的に、ホームレスがここを家にしてしめてね（笑）。バッテリー持ってきて、電気つけて、布団やら持ち込んで、中入ってね。雨は大丈夫やから。それで近所の人とかが、「子どもが、ホームレスのおじさんがおったら怖がって入れないから、どないかしてくれ」いうて。

一度この辺を、スポーツセンター自体を全部やり替える時期になってたわけ。木がいっぱいあったわけ、作った時は。だから外から見えないから、不良少年とかそういうものたまり場になって。だから全部木を切って、工事する間に封鎖してほしいいうことで、いっぺん口のとことかお尻のところを封鎖したんだけど。1年ぐらい工事になるからいうことで。で、1年して工事終わってもなかなか解いてくれないの、フタを締めたやつを。溶接で留めてしまってるから、入れないように。それはもう5年かかったかな、フタを開けてくれ、いうて。これは見るだけのものちがうからね。中へ子どもが入って完成するような作品やから、いうことで。なんやかんや言うて、向こうはなかなかそういうことやってくれないわけ。友だちに「新聞に書いてほしい」いうて。「これは見るだけのモニュメントでない、子どもが関わって初めて完成するような作品やから」いうて。だけど向こうはなかなかね、動いてくれないの。だけど5年粘った。

その頃、ちょうど尼崎の役所の方で、何かいろんな癒着とかがあったらしいわ。それが新聞にポンポン載りだした頃やった。その時「あ、これ、ええ時期や」と思ってね、それで知り合いの友だちに頼んで、このことを書いてほしい、いうて。向こうは「新聞だけには書いてくれるな」いうてね。「そしたらやってくれ」言うんだけど、それもなかなかやってくれなかったんだけど。だけど新聞に実際載せたの。朝日とか毎日とかいろんな新聞が書いてくれて。「これはもう死んでしまった作品になってる」いうてね。

速水（史朗）さんも阪神の尼崎駅前に、大きい石の上に、丸いでっかい餅みたいな石を置いてる作品があったんや。それが、夏はいいわけ。真ん中のこういう四角が噴水で見えなくなって、噴水で石が浮き上がったよ

うに見えるわけ。それが、冬は水が凍るからって、止めてるわけ、噴水。そしたら全然機能しなくなっちゃったわけ。で、また僕らの友だちに、そういう彫刻とかモニュメントは、作る時はいいんだけど、後のメンテナンスとかそういうことは放ったらかしやいうことで、色々書いてもらって。それで向こうも、なんやかんやグダグダ言いながらも動き出したのかな。それでなんとか今は元気に動いてるんだけど。

これも去年、色の塗り替えしたんよ。錆びてね。それもお金がかかることやから、なかなか動いてくれないの。だけど粘って、色の塗り替えして。その後が、江上さんとも見に行った時やと思うわ。この目玉も20年以上たってたから、ホコリとかなんかでだいぶ薄暗くなってしまって、入れ替えしたりね。

池上：これは作る時に、工場の方に「この大きさで」というふうに頼まれたんですか。

榎：工場の方でね。これもまた知り合いとか乃村工藝とかが応援してくれて。最初は尼崎市の70周年やから、いろんな大きな尼崎の工業関係、企業関係をずっと調査に行くわけ。そこのスクラップとか、使えるものは協力してもらって、というような感じで。それで色々行ったんや。三菱電機とかいろんなのを見に行つて。最終的には久保田鉄工が協力してくれるようになったんだけど。

池上：久保田鉄工さんの工場で作ったんですか。

榎：そう。久保田鉄工の下請けの製管会社というのがあんの。そこがまた今、面白くなってきてるんやけど。その製管会社が、東京のスカイツリーとか、あれをやったとこの会社やねん。それは後で分かったんやけどね(笑)。それは、ベロ耳ってあったやん？

江上：ええ。あれが入口。

榎：あれをこの時僕はもう発見しとった。面白いのがあるなと思て。溶接の最初にグニュッとなる。エンドタブいうのか。

江上：製管の端っこになるやつですよ。

榎：そうそう。パイプというのは、鋳物で型を作って地下に埋め込んでいく土管やねん。水を通したり、油通したりいう。だけどあれは立てることはできない。鋳物でやってるから、弱い。だからああいう鉄板を曲げて、溶接して作っていくわけ。それやったらものすごく強いわけ、パイプにしたって。だから使い方によって、パイプなんかでもああいうふうに作っていく。鉄板から作っていくパイプと、型に流し込んで作っていくパイプでは、作り方が違う。

池上：《AMAMAMA》の方は曲げて？

榎：曲げて。ローラーみたいのでボーッと鉄板を曲げていくの。それで最後に溶接していくわけ。

池上：この規模だからすごい作業ですよ。

榎：すごいよ。そうやって作っていった。その時に、エンドタブいうて、今回も美術館で使ったのを発見した(注：「榎忠展 美術館を野生化する」、兵庫県立美術館、2011年10月12日—11月27日)。考え方は、元はここにあってたわけ。それは西村工機いうとこで。そこは太いの、鉄板が。前は15ミリの鉄板で、結構薄めが多かったわけ。その時、まだ機械がなかったわけ、佐々木製罐に。でも薄いけどなんか面白い、ひょろっ

としたやつがあってね。面白いなって。僕が前に勤めてた会社に、何年もずっと置いてたのかな。今、1つか、2つくらいこっちへ持って帰るとるかも分らんけど。それが去年の展覧会の時に、その太いのがあったから作った。

池上：太い方がなんか迫力がありますよね。

榎：迫力ある。だからずっと、いまだになんとなくつながってる面白さいうのか。だからスカイツリーも、もうすぐオープンするけど、西村工機とかがだいたい主にやってるわけ。

池上：これが大きいものでは残っている唯一の作品ですけど、それまでは作品を残しようという意識はあまりなかったんですか。

榎：ないな一。ないというのか、まず後のこと考えへんの、僕は、残すとかそんなこと。とにかく作りたいものが作れるかどうかの方が心配で、後のこと考えへん。

池上：出来上がったものには、愛着というか、1960年代から活躍されている作家さんて、愛着はあったんだけども置いてとこがないから泣く泣く廃棄したとか、よくある話なんですけど、榎さんの場合はそもそもそんなに執着はなかったんですか。できれば持っておきたいとかは？

榎：やっぱり作ったらいろんな人が見に来て、ごっつい喜んでくれる子どももおるし。だからまあ、やっぱり潰すのは残念やと思うけどね、だけどやっぱり潰すしかないの。置くところもないしね。どこか引き取ってくれるんやったらもちろんまた別やけど。だけどあんまりそういうこと、仕方ないからね、最初から潰す覚悟で作ってるわけ。あとどうするか、そういうことも考えて作るし。売れたら売れたでいいんだけど。

江上：たまたま残れば、それはそれでという。

榎：そうそう。それはあんまり、あの時代ってみんなそういうふうにあんまり思ってなかったんとちがうかな。彫刻とか、須磨離宮とかああいうとこで彫刻展（神戸須磨離宮公園現代彫刻展）とかってなるやんか。ああいうふうになったら、また賞とかそんなのでいろんな美術館とか公園とかに置いていくやん。それには耐久性とかいろんなこと考えてつくらなあかんのやけど。こういう場合は、僕の場合はあんまりそういうこと考えんとやるから。やっぱり次やりたいものがあるからね、残すことできないわけ。これ、処分するにしたってものすごい費用いるわけ。

池上：ですよね。

榎：それやったらどっかで安く処分できるとこの方がありがたいいうのか。次何かやりたいのに、そこまで引きずって、借金までして潰すいうことってできないやん？ だから潰す方法いうのもものすごく考えてやらなあかん。

池上：製作される時点ですでにそういうこともちょっと計算しながら、というか。

榎：そうそう。

江上：《AMAMAMA》の時は、逆に最初から残すっていう前提で作ってるんですよね。

榎：これは、入場するときの門になってるわけ。生徒とか学生とか、いろんな競技の団体がいろんな学校から来てね、この門を通過してここに入っていくということやった。それでこういうドーンとまたがってるような感じやねんけどね。

江上：最初からこれ残すといって作った時に、それまでと何かちがう、榎さんのほうでちがうことと違ってありました？ それはべつになかった？

榎：何やろなあ、あんまり……

江上：そういうことはあんまり考えなかった？

榎：うーん、残るいうのか、今までそういう作品の作り方でやったことないしね。こういう、頼まれるということがあんまりなかったから。

江上：そこも違いますよね。

榎：そこも違うわね。だから、どうやら、なんとも言えん気持ち、まあ好きなことやらせてくれるということで、「わー、やりたいな」いう感じで。さっき言うたように、尼崎の大きい、三菱電機とかいろんな工場へ見学に行ったのね。すごいもん見たんよ。雷とかそういう実験する工場、三菱のね。ああいうの見たから、誰や、ヤノベ(ケンジ)くんの作品が電磁石でビビビツとなるやん、あれのすごいスケールのやつ見たことあんの、その三菱電機でね。いろんな雷とか、電気の流れとか、それに耐えるようなもんを作らなあかんわけ。避雷針のものすごい工場を見に行ったりとか、あれはもうワクワクしとった。

池上：尼崎はまたいっぱいありますものね、工場が。

榎：あったんや。だから僕ら、こういうこちょこちょした作品作ってるけど、やっぱりそういう研究所とか実験所行ったらすごいんよ(笑)。ほらもうアートどころちゃうの。もうすごいお金かけて開発とかそんなのやってるやん？ 僕らほんとに、美術って弱いな、というのをものすごくその時感じた。建築でもそうやけどね。すごい立派な建築つくるやん？ 彫刻とかあんなのへのカップみたいな感じでバーンとやってるやんか。だからそういうとこでやっぱり美術って何かなと思って。そういう現場見てたらね、考えさせられた。シマブン(シマブンコーポレーション) やら行ったら、鉄の、あんなグニャッと曲がった、でっかいのがあってな。鉄の彫刻とかいうたって、あんなとこ行ったらもうほんまに、もの見方とか、彫刻って何かなと思うぐらい、ものすごく考え方がコロツとね。

江上：《AMAMAMA》で、鉄鋼の大きなところを紹介してもらって、つながりができる前は、わりと身の回りのお知り合いの小さい規模の鉄工所しか、逆に言うたら見る機会はあまりなかった。この時がそういうのは初めて。

榎：初めていうかね、やっぱりポートピアの時に宇宙船みたいなのをやったでしょ。あの時にいろんな業者、石川島播磨とか大きな造船所とかそういうとこが協力してくれた。阪急電車の正雀の工場とか、いろんなとこに行って、協力してもらって。それも大きな市を挙げてやるようなもんやから、そういう公共的なものはわりと応援してくれた。そんなの普段ないやん？ せいぜい僕ら兼正(興業)とか、身の回りの工場しかないけど。でも公共的なのをやる時は。

池上：いろんな人と一気に知り合える。

榎：なんか今まで見たことないような会社とかそういうところへ入っていけて、その辺はすごかったな。だからいろんな考え方もだいたい変わらされるいうか。変なこちょこちょしたのとはできない、いうともあるし。

池上：ひとつの転機になるような。

榎：なるね。やっぱり次々やっていったら、いろんなそういう人が出てくるのもありがたいのと同時に、「作って何かな」いう感じ。だんだん考えさせられる。最初は、前にも言うたかもわからんけど、廃材って安く手に入るから、僕らお金がないからそういうのから始めるんだけど、だんだん何年もやってたら、なぜ廃材になったのかとか、いろんな生活のこととか、いろんなことを感じてくるわけ。これはどういう人が作ったのかなと思って。すごい機械の部品とか、どんな機械でつくるんやろとか、いろんなことを想像するやん？ そういう中でやっぱりいろんな人が関わっていて、社会の動きとか、生きてるとか、生活とか、いろんなゴタゴタが、美術いうものに対するの必要性とか、大事なものって何かないうことはやっぱり考えさせられる。

池上：色々写真がありますね。組み合わせる時の、まさに工事現場ですね。

榎：会社で一度組んでね、今度はその現場へ。一応基礎を作って、バラバラにして運んでいくから。また組み立てるというか、これを合わさないとあかんわけ。バチバチッと、直角とかそういうなんで組んでないわけ。角度がついとるわけ、ねじれたような感じとか。だから結構難しいの、合わすのが。

池上：そうですね。

榎：途中で職人同士が。会社で作っても、組み立てはまた別な会社やねん。だからそこでまたもめてね。ベルトが切れてね。裂けるというのか、バシッと、吊とるやつが。

江上：職人さんも燃えるでしょうね、こんな難しいのをしたら。

榎：作る職人も、いつも同じパイプばかり作とるわけ。こんなの作ってないやん。モノが見えるとか、何かが見えるというのは作ってないわけ。いつも基礎になるような鉄板の元とか、パイプとか、そういうもので。毎日自分らで仕事して、仕事やからやってるだけで、面白さもなにもないんやって。職を覚える、そういう面白さはあるんやけど、そういう職人なんかでも毎日同じパイプばかり作ってるというか。で、こんなのやったら喜んでな。

池上：それは面白いでしょうね。

榎：うん、みんな喜んで燃えるんよ（笑）。作ったらやっぱり見に来るし。どんなになったのかなとか、家族で見に来る人もおるしね、職人の人なんか。

池上：どう使われてるかっていうの、普段たぶん見ないですもんね。それこそ土管みたいな感じで使われると。これは嬉しいでしょうね。

榎：そういうなかで職人とかそういう人とつながっていくというか。兼正でもそうやし、みんな展覧会を、今

度《サラマンダー》(2011年)をやった時でも、それを運んだり割ったりしてくれたりした人が、気になってな、  
どういうふうになってるのか見に来てくれたり(笑)。

江上：心配で(笑)。

池上：子どものような(笑)。

榎：「美術館なんか行ったことない」言うけど、「自分が関わったらやっぱり気になる」いうて。

池上：次の個展のほうのお話も聞こうと思ってたんですけど。「地球の皮膚(かわ)を剥ぐ」という、1990  
年に(「地球の皮膚(かわ)を剥ぐ、5,000,000年の動脈」、神戸・学園東町、1990年4月22日—5月6日)。  
これは展覧会という形式ではなくて。個展と書いてますけども、いわゆるギャラリーへ行って観るようなもの  
ではないですよ。

榎：うーん、そういうものと違うけど、べつに画廊とか美術館でなしに、そういうとこ(注：住宅が建つ前の  
造成地)でも展覧会はできるし。ギャラリーとか美術館に来る人って、美術の勉強してる人とか美術の好きな  
人とか、偏ってるやん？ 偏ってると言うたらおかしいけど。僕はこの大きいもの作ってから後、(美術って)  
そういうもんじゃない、という考え方になって。僕が本来発表とか展覧会でも考えてきたことをこういうとこ  
でやってみた。

その時代、神戸のポートアイランドとか、その後六甲アイランドにも、うちの近く、高倉山とか須磨の奥とか、  
この辺の山を切り崩して、ベルトコンベアですっと運んで、埋め立てをやってるわけ。僕らがよく遊びに行っ  
ていた太山寺というのがすぐそばにあって、古いお寺だけど、そこにきれいな谷川が流れとったわけ。小さなエ  
ビとかそんなのがあって。飯盒炊さんもできるようなきれいな水で。この辺一带学園都市で全部工事になった  
わけ、山を崩して。そうしたらその谷川は、流れ出る洗剤とかで犯されてしまって。臭いまではしないけど、  
もちろん飯盒炊さんどころか水も飲めない、入ってもいけない、というような感じで。

僕は、穴を掘るとか、土や石が好きで。場所はずっと前から探してたわけ、化石を彫りに行ったりとか。神  
戸の白川とかあの辺は昔から化石が出るのが分かっって。その辺の地層いうのにごっつい興味があって。淡  
路の方とか、野島断層も行ったことあるんよ。家にも置いとる、貝の化石。山のてっぺんに貝の化石があるの。  
とういうことは隆起したというのが確実で。それは淡路の野島のあたりに、谷川にいっぱい落ちとるの。

江上・池上：へえ～。

榎：それは本にも載っって、調べて行ったんやけどね。それから大阪の箱作とか、あっちの方へずっと断層  
が続いてるわけ、地層が。そこは結構古いの。1億年とか古い地層があるの。そういうのをずっと調べながら、  
ほかのことをやりながら行くんだけど。それが、学園都市が開発されたりなんかして、ずっと気になってたら、  
土を運んでね。須磨のちょうどノ谷のところから、2、3年前にベルトコンベアを壊したんやけど、そこか  
ら六甲アイランド、いつも船で運んどったわけ。10年も20年も前からずっと見ていた、その辺の山が崩さ  
れていって、僕らが遊んでいた自然なんか壊されていくというのか。

神戸って細長い小さな街やから、都市に住むいうたってなかなか土地がないし、みんな、三田とかあっちの  
山の方へ行くしかないやん？ だからどうしてもそういう山を切り開いて六甲アイランドをつくるいうて、そ  
れはやむを得んことやと思うの。だけど僕が嫌いなんは、そういう工事に反対するんじゃないけど、その後の  
ケアをやらないの。今回の原発でもそうやけどね。他の地域の、そういう土地や山を提供した人とか、それは  
お金をたくさんもらってるんやけど、あと自分たちが生活する、子どもたちのことを思ったら川で遊ばすわけ  
にもいかんし。そういうことが僕はものすごく嫌なん。それでその学園都市の穴を掘る場所に決めたんやけど

ね。

池上：それはどういうふうに。リサーチというか実際に歩いてみられて？

榎：うん。それは、さっき言ったように何年も前から探しとって。ひとつはポートアイランドにも頼んだことがあるの。風月堂（神戸風月堂ホール）かなんかの音響屋と。

江上：ジーベックホール。

榎：うん。あそこが建つ前やったんや。「あそこを使わせてくれ」いうて、「そういう六甲の土を持ってきたい」いうことで。

江上：ああ、持ってきた方にもあるかもしれないということですね。

榎：うん。そういうところで、僕はそこを使わせてくれと言うたわけ。土地は貸してくれる言うたんや。だけど、「穴掘る」言うたら、「あかん」いうてね。あそこはもう海やから、掘ったら絶対水が出てくるし。

池上：出てきたら困りますからね（笑）。

江上：せっかく埋めたのに（笑）。

榎：ほかのところでも、土地は貸してくれるんだけど、「穴を掘る」言うたら、「土地が死ぬ」いうてね。あと農業とか、田んぼでもそうなんだけど、ほかの土が入ったらだめとか、農地ができないとか、建物ができないとか、いろんな土地の制約があるわけ。だから穴掘る言うたら、なかなか使わせてくれなかった。そしてずっと何年も……、どういうわけか、だんだんこれがやりたくなってきてね。

うちの会社に、得意先の人でいつも遊びに来るおっさんがおんの。ごっつい豪傑な人で、大げさなことばかり言うて笑わせて。その人が、僕がこんなのを話しよったら、「忠さん、この頃作品のほう、どないしとんや」言うから「いやー、今こういう感じで、いっぺん土地でこういうのをやってみたい。できたらこの辺の太山寺の近くとか」って。その人がたまたま…… その辺は、開発するのに市が分譲として売ってるわけ、50坪とか、70坪とか、100坪とか、いろんな段階があるんだけど。そのおっちゃんの兄貴とか家族は、何回申し込んでも当たらへんのやって、なかなか。ものすごく倍率が多くて。その人、兄貴が当たらんいうから、遊び半分で出してみたら一発で当たってね。その人が土地持っとんのよ、ちゃんと。建てる予定もないのに。

池上：お兄ちゃんにあげようよ、っていう（笑）。

榎：それで当たってしもてね。それも放っておいたらあかんのやって。3年かのうちに建てなあかんとか、いろんな条件があるらしいんやけど。それを聞いて、「どこや」って。「いやー、太山寺の方で、学園都市いうところで、今開発やっとなる途中や」いうて。「えっ、どこ？」って、もうその日に「そこへ連れていって」いうて、見に。会社の仕事の合間にね、連れて行ってもうて。ええとこや。ものすごい荒涼とした、ごっつい山を切り開いてね、結構粘土質で、こういう化石が出そうな感じの雰囲気のとこで。もう一発で気に入って、「使わせてくれ」いうて。「お金ない」「いや、お金なんかいらん」いうてね。「だけど穴掘ったら土地が弱くなるから」「いや、そんなのかまへんから。穴掘って、弱くなったらそこに駐車場つくるから、掘り込みの駐車場にするから好きなように使え」いうて。言うたら自分の家を3年の間に建てなあかんのやけど、「それのお祭りやと思って使ってくれ」いうて。

池上：なんという剛毅な。

榎：ほんまにええんかな、と思ってね。場所が見つかったのも、そういう人がおったいうのか、そういう出会いうのか。それまで会社にはいつも遊びに来てたんやけどね、その人も。僕がこういう作品をやってるといいうのは知ってて、時々見に来てくれたりはしてたんやけど。で、パーンとそんな話が出てきて、「ワー」いう感じで。

池上：実際、どういうふうに掘り進められたんですか。

榎：最初はね、やっぱりどういう土か分からないから。横ではいろんな工事をやってるけど、穴掘る工事はあんまりやってないからね。表面やってて、ここはある程度まではこういう砂が混ざったような土で、ある程度行ったら粘土層になるとかいうのを聞いてたから、そこを掘るにはだいたい2、3メートル掘らなあかんわけ、深さを。そうしたらやっぱり、斜めに掘るといのでなしに、直角に掘りたいわけ。で、いろんな友だち、建築家とか構造計算やったりとかそういう関係の人に聞いたら、やっぱり直角に掘らなあかんということは、何メートル以上は、基礎を作るとか何かをやらなかったら、一般的な人は入ることはできない、いうてね。見せることはできるんやけど、人が中に入ることは許可できない、いうて。それで実際、これ分からないんだけど、外から見たやつ。(注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、138-39頁)

池上：こっちの写真もあるんですかね。

榎：こういうふうに、この穴の周りに1メートル半ぐらい外したところに全部1メートルぐらいの基礎を打ち込んだ、セメントの。

江上：ああ、この部分ですね。

榎：うん。ずっと周りに、崩れるようなところに全部基礎を打ち込んでね、そこへ鉄板を、H鋼みたいのを置いて。それやったら人が入るのも、人に見せるのもオツケーが出たんや。で、ここは電気もないから、電気ひいてもらってね、バーツとやったんやけど。

池上：ここを入口にして。

榎：蓋を開けて、マンホールの蓋みたいな感じで開けて、中に階段があって、中へ入っていくんやけどね。

池上：で、中を、ひたすら土を出していくという。

榎：そうそう。毎日、会社終わったり休みの日に掘りに行くんだけど。最初は一人でコツコツやりよったんやけど、1週間ぐらい掘ったら、もうどういそれではだめやから、休みの時に友だちに来てもらって運び出したりとか。

池上：こういうショベルカーみたいなものも。

榎：後から、おっちゃんが見かねて、「貸したる」いうてね、手伝ってくれたんや(笑)。「おまえらの仕事見よったら、いつできるかわからへん」いうて。

池上：おっちゃんって、横でほかの仕事をやってる？

榎：ほかの仕事やっとなわけ。

池上：あー（笑）。

榎：見とったらな。

池上：何しとんねんと（笑）。

榎：僕は手で、バケツで運びよったんや、土を。

江上：最初は手掘りやったんですか。

榎：手掘りや（笑）。そんならな、おっさん見かねて。何しよるんか、やっぱり気になって見に来るんよ、「何しとんや」いうて。「いやー、こんな感じで、下の岩盤を見せる作品展をやるのかなと思う」言うたら、「いつまでに掘るつもりや」言うから、「だいたい5月の、みんなが来れるゴールデンウィークいうか、ああいう時に展覧会の日にちを合わせとる」いうて。「おまえ、そら無理やで」いうてね。

池上：「それで手掘りでやってるの？」っていう。

榎：「そんなら休みの時やったる」いうて、休みの時に来てくれてな。粗掘りやってくれて。

池上：そのおっちゃんたちは「アホちゃうか」みたいな反応ではなかったんですか。

榎：アホいうたって、一生懸命やっとなからね。「アホや」言われへんから、向こうも。「休みに来たるから」いうてな。休みに、ショベルカー置いとるからね、「やるから」いうて。もう雪が降ってもやってね。その日、頼んどったんやけど、土を運ぶのを。雪が降って、ダンプカーが来たのはいいんやけど、土が運べなくなって。一日ダンプ3台ぐらい手配してたら、一日何十万っているわけ。そういう中でいろんなことあったけど、まあなんとか。あ、この人がその土地のオーナーいうの、土地を持ってる人。で、最後はこの家が建ってるわけ。

池上：あ、すごい！ ちゃんと穴はふさいで。（注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、139頁）

榎：穴はふさいで、その上にセメントの基礎いうのか、ここにクルマ入れるようにしたわけ。掘っとなとここに車庫をつくってるわけ。

江上：うまいこと再利用したんですね。へえ。

榎：向こうは掘る手間が省けて。大変やと思うんやけどね。

池上：一応役にも立ったと。

榎：そうそう。ごっつい喜んでくれた、「おもしろい」いうてね。

池上：じゃあパッと見は、知らなかったら普通の更地に見えるだけですよね。

榎：一応、登記的には住所みたいなのがあるんやけど、まだこの時住所も何もないわけ。だから案内状でも、ずっと地図描いて。まだ周りに建物というのがなかったから。なんかそんな感じやった。電話はないし。

池上：掘っている最中に色々化石とかも発見されたという。

榎：うん、出てきたりとかね。周りにいっぱい、化石があるわけ。で、子どもなんかが来たら、化石の探検に連れて行ったわけ。化石掘りを教えてやったりして。

池上：ほんとだ、この辺にもたくさん出てますね。

榎：ちびくろ保育園ってあるんやけど。これなんか割った時ね。こんな岩があるでしょ。だんだん感じが分かるんや、「あ、この辺は化石を含んでる岩やな」いうて。パーンと割ったら、そのままの枯れた葉っぱの、そのままの色がパーン出てくるの。

江上・池上：へーえ。

榎：すごいよ。ワーツと思うぐらいね。

池上：大気に触れさせたら、色が変わったりしますよね。

榎：変わってくる。うん、そういう色は消えていく。

池上：やっぱりそうですよね。でもそれを見られるというのがね。

榎：そう、その瞬間がすごい。最初は500万とか1500万年前とか言ってたけど、今は3000万からおおかた5000万年前に近いと言われてる、あの辺の地層は。昔、火山灰みたいなのが中国か韓国の方から飛んできたんとかいうて。この辺は、瀬戸内海は沼地みたいな感じで、湿地帯やったとか。そういうので明石象とか、ああいうのも発見されるのは、やっぱりそういう湿地帯みたいやったんとかいうて。

池上：出てきた化石はどうされたんですか、その後。

榎：僕は化石掘るのが目的と違うからね。あんまり取らない。多少は置いてるよ。こんなの何個か置いてるけど、あんまり。来た人にあげたりとか。

池上：このオーナーさんにも？

榎：そうやね。どっかに、上の方に化石残っとるのがある。こんな塊とかね。

池上：後で拝見したいです。穴掘りという、関根伸夫さんの《位相 - 大地》(1968年)とかも、神戸という思い出しますけど。

榎：ああいうのもどっかに（念頭にあった）。だけどああいう作品とかいうのでなしに、僕は小さい時から田舎の古墳とかで遊んでたし、田んぼとか畑とかそういう遊びやとったから、土とか石とかそういうものにもすごい、小さい時から興味あった。この場所、自然を壊されてそういうふうになってしまった街なのか。そういうとこで、いろんな思い入れとか、考える要素とか、想像するものをいっぱい含んでるわけ。ただ単にこういうものを画廊とかああいうとこでやったって意味がない、いうのか。

池上：それはそうですね。

榎：これができた時に、その近くの学校、太山寺小学校とか中学校とか、みんな学校ができた頃やったんや。

池上：開発されるから。

榎：うん。そこの芸工大(神戸芸術工科大学)もできて1年ぐらいの時やったかな。その時に山口勝弘(1928—)という人がここへ訪ねてきたんよ。どこかに書いてないかな。

池上：前のページかな。学生を連れてきて。(注：『Everyday Life/Art Enoki Chu』、138頁)

榎：それはまた違う人やけどね。山口勝弘が筑波から芸工大へ来た時やったんかな。その時も「ナンギなやつや。住所も分からんようなとこで展覧会やってる」いうて。

池上：でも見に来てくれたんですね。

榎：来てくれた。で、運チャンといちゃもんやって。「ここへ行ってくれ」言うんだけど、「そんなとこは工事現場で入れへん」いうて。「だけどそこでやっとなやから連れて行け」いうて、もめたらしいわ、タクシーの運チャンと。

池上：おかしい(笑)。

榎：住所がなかったから、タクシーの運チャンも困ったらしいわ。だけど「ここでやっとなるから、あんたはこの辺のタクシーやから行けるはずや」いうて。「だけど行ったら工事現場やから、行ったら何も無いよ」いうて。

江上：押し問答(笑)。

榎：僕は案内状を、至る所にずっと大きい立て看板を置いて、道順やって。

池上：結構たくさん人は見に来ました？

榎：結構来たよ。学校がそういう状態やったから、みんな、学校から来んの。

江上：へー、子どもらが。

池上：いい社会科見学みたいな感じですよ。

榎：そうそう。この人なんか校長先生やと思うんよ、そこの太山寺の。みな学生が、写真とかカメラやっとなる連中が、記録とるいうて、カメラ持ってきてずっと記録とったり。「この地層は学校の下にもあるんや」いうて。

江上：それはそうですよね。

榎：そうそう。全部つながってる。横に建ってる家の人の下にずっとこの化石の地層が続いてるといふのか。

池上：すごくいい教育ですね。

榎：何軒かできてる家の人なんかも見に来とってね、子どもなんか連れて。みんな「おー」いうて話しとるわけ。「うちの家の下にもこんなあるんや」いうて。

池上：今もこの家が立派に建っている。その人が今も住んでるんですか。

榎：住んどるよ、もちろん。帰りに寄ってもいいよ。江上さんは行ったかな。

江上：前を通りました、このあいだ。「ここか」と思って。

池上：こそっと見たいです（笑）。

榎：今、ちょうどいい時期やし。

池上：その次の年、国立国際で「芸術と日常—反芸術／汎芸術」（大阪・国立国際美術館、1991年10月10日～1991年12月1日）という展覧会に参加されて、篠原有司男さんと出会うという。

榎：この後は《葉莢》やったんかな。そうそう、この次が葉莢やねん。その時山脇（一夫）さんが名古屋の美術館行ってた頃かな。その時ちょうど日本と、アメリカの西海岸と、メキシコの現代美術をやりたいということで。山脇さんが日本側を担当しとってね。それでやりたいということで、サンタモニカの美術館の館長が山脇さんと一緒に、どういう作品をやるか、人選してた。ちょうど僕は穴を掘る作品をやってたわけ。その時に一緒に来てくれてね、その館長が。それでこんな穴掘るような作品やっとして。向こうも「こんなことやるか」いう感じでね（笑）。それでもう一発で僕に決まってしまうて。

池上：そのサンタモニカの館長さんがたまたま日本に？

榎：たまたまいうんじゃなしに、人選しに来てたわけ。いろんな作家、東京の作家とか色々ずっと行って。

池上：地図にもないような新興住宅地にやってきて（笑）。

榎：県美に前おった山脇さんという人が館長を連れて、ちょうど今僕が展覧会をやっとなるからって、見に来てくれた。向こうの館長もごっつい喜んでね、「おもしろい」いうて。それから、次、この《葉莢》に入ったわけ。

江上：山脇さんの展覧会の方が国際の展覧会より先なんですか。

榎：先。その時、中村敬治（1936—2005）さんが「芸術と日常—反芸術／汎芸術」展を計画しとってね。

池上：計画中だったんですね。

榎：僕には、ほんとは《原子爆弾》をやってほしいいうて。あの時中村さんは《原子爆弾》を気に入ってて、あれを国際美術館でやってほしいいうて。僕は、いっぺん作ったものはやらないし、ああいうものは、その時代とか、僕の熱意があってできるものであってね。展覧会やからそういうものって、できない。

池上：「もう一回やって」とかいうのではできないと。

榎：「もうないんか」言うから、「もうない」って。ほんとはどこかに僕置いてたんやけどね（笑）。そんなの説明するじゃまくさいから、「ない」いうて。今から思ったら失敗したなと思って。

池上：そうなんですか？

榎：みな購入してくれたわけ、あの時、作品を。そういうつもりで選んでくれたんよ。

池上：言ってくれたらよかったのにね（笑）。

榎：僕の作品はほとんど残ってないやん？ だからあれをやりたいいうて、残すべきや言うてたんやけど、僕は「そういうのはできない」いうて。

池上：あの《リトルボーイ》の作品は、その時はどこかに置いてたけれど、今はもう。

榎：たぶんないと思う。昔、靱ギャラリーというのがあって、桜井さんという女の人がギャラリーをやっている。すごい豪傑な感じの人でね。どういう状態か知らんけど、彼女が僕の作品、「原爆」を買って、ごつつう費用がいったんよ。費用がいったというても、今から思たらそうでもないんだけど、彼女にしたらすごくお金を使って。

池上：管理するのも大変ですものね。

榎：兄貴が、河内の方やったかな、農業やってるとこやから、置くところないからって、そこの納屋に置いてただけ。最初の頃は、「どうなってる？」とか聞いてたんやけど、彼女、どこか行方が分からなくなってね。三重県の方で自分も作品やってるみたいなのを聞いたりして。けどちょっと分からない。案外、僕も作品に対して、残してくれたり、買ってくれた人がおるのに、あんまり大事にしてないなと思って反省はしてるんやけどね。

江上：中村敬治さんは、榎さんが「原子爆弾はやらん」言うたら、どう言い合ったんですか。その後はどうなったんですか。

榎：《薬莖》をやってるのは聞いたりしてたから。「僕はそういう作品ないから、できないかも分からん」いうて。けど、「今までやった、写真でもいいから出してくれないか」いうて。で、「ハンガリ」とか「ROSE CHU」とか「原爆」とか「大砲」とか、6点ぐらい、大きな写真にコラージュしたみたいな感じで。作品いうより、コラージュして、写真と、その頃はコピーってあんまり良くないコピーなんだけど、そんなのでコラージュみたいなのをして6点ぐらい出したんかな。それで《薬莖》を2トンぐらい。袋に、ドーンと1トン入ってるでっかい袋を、バーンとばらまくみたいな感じでやって。

池上：薬莖はどこで集めてこられてたんですか、その頃。

榎：これがまた面白い話でね。うちの会社の、兵庫の近くにあるんだけど、江上さんは何回も行ってるとやけど、僕の勤めとった会社のすぐ近くやねん。こういう仕事というのはものすごく汚れる仕事やねん。きたない、いうたらおかしいけどね。どんな仕事でも汚れるのは当たり前やけど。うちのすぐ前に銭湯屋があって、みんな働いた人がそこへ風呂に入りに来るわけ。その時、僕は前から薬莖を見とってね。前に見てた時は、作品にするとか、作品にしようとも思ってなくて。なんとなく気にはなっていたん、あんな薬莖どこから入ってきたんかとか、いろんな想像するわけ。「アメリカでやらないか」という話が決まってから、何やるか色々ずっと、何か月前からかずっと考えてたのかな、やりたいこと。そして風呂屋で裸になって。みんな来とるやん？ 洗剤で、汚れた人がみんな洗ったりしてる時に、横におった会社の人に聞いたわけ。「今、薬莖なんかあるのかな」言うたら、「うん、時々入ってくるよ」言うわけ。「えっ？」いうて。そして聞いたら、「いま入っとんちゃうやうかな」言うわけ。そうして行ったら、あるんや！「これどうしたらいいんやろ。売ってもらえる？」いうて。「もちろん」って。売るために仕入れるんやから。だけど、僕らみたいな一般人には売ったことないから、「それは分からん」、いうてね。

池上：普段どこに売ってるんですか。

榎：全部自分とこの会社が、姫路の方に溶鉱炉、新日鉄とかあいう会社に行って、全部溶かすわけ、銅にするわけ。そういうふうにならたら、そういうところで。銅の相場というのがあってね。安い時に大量に買って置いて、値が上がった時に銅に還元して売っていくわけ。その「利ざや」みたいなものでね。

池上：廃材としてただで入ってくるんじゃないくて、その人たちも安く買ってるわけですね。

榎：買ってるわけ。

池上：その材料にするために。

榎：うん。だから100円の場合もあるし、1,000円、そんな極端には違わないんだけど、100円とか200円とか300円とか、変動があんの。100円ぐらいの時買っといて、寝かすところ、倉庫があるところは値が上がるまでずっと置いておくわけ。で、値が立つというか、「今頃かな」というところで感じをつかんで。300円、400円になって、「上がりよるな」と思うやん？ それをもうちょっと待ってたら上がると思ってたら、また下がってしまう時があるわけ。だからそこのカンやねん。相場みたいな感じで。そういう感じで。僕は初めてのことの取引やから、「現金でなかったらあかん」というわけ。現金で。最初7トンぐらい、場所的には欲しいなと思って。

池上：7トン！（笑）

榎：その時、1トン20万ぐらいやったかな。

池上：1トン20万円。

榎：今はもう60万ぐらいになっとるな。

池上：安いか高いか分かりませんね。

江上：単位がトンやから（笑）。

榎：どう使うか分からんけど、量がなかったらあかんと思って。一応7トンぐらい予定して。その時20万ぐらいと聞いてたんやけど、実際買うようになったら30万近くかかったんや（笑）。向こうも、「買うつもりやな」と分かったからかしれんけど、「今また値が上がるとる」みたいなこと言うて、25万とか30万とかいうて。とにかく7トンいうたら200万近くやったかな。そんな急に……、嫁はんはどう言おうかなと思って（笑）。

池上：それは考えちゃいますね（笑）。

榎：「そんなの急に言われたって、いつ、どうするの」言うたら、もう2、3日うちにしなかったら向こうもほかのどこへ流すみたいなこと言うわけよ。しょうがないから会社に言うて。「急にちょっと金がいるようになって」って。言うたんよ、実際そこの品物というか薬莖買うから、「なんぼか足りないから貸してくれないか」いうて。会社のほうも急きょ銀行から金貸してもらて。

池上：いい会社だ（笑）。

榎：で、すぐ買い付けを決めてしもて。そういうふうには、ほんとにうまくいった作品。

池上：この薬莖自体は、どこで使用されたとかいうのは。

榎：聞いた話では、沖縄のなんとかいう基地があるわけ、米軍の基地が。海兵隊とか言いよったけど、そこに集まってくるんだって。日本の業者何社かが、競売みたいなので専門に入ってるんやって。その中で値を高く買う人にやっぱり売るんやって。その頃は結構アメリカの方も、ちょっと景気が悪い時は、アメリカは結構持って帰ってたんやって。自分のとこで処理するの。だけど景気がいい時やから、日本でほとんど処理してたわけ。その時に、うまい時期に当たったというかな、なんか知らんけど、偶然いうのか。今回の美術館でやったのも、偶然あったんや、大砲のやつも。前はこんな小さいやつばかりやったんだけど。そういう、なんか知らないけど偶然で作品が出来上がっていくような。

池上：でもすごく想像力が刺激されますよね。沖縄に集まってくるといっても、全部が沖縄で使われたものじゃないでしょうから、どこでどう使われてたんやろうという。

榎：沖縄で使うというとはほとんどもう練習しかない。

池上：ですよね。

榎：その頃聞いたのは、カンボジアとかベトナム戦争とか、そんなのがいま集まってきとるんや、いうて。このあいだの大砲なんかは戦争中やったもんね、1940年とか43年のやつやったし。いろんなところから集まってくるわけ。

池上：実戦で使われたものだった。それが沖縄に集まるということも普通は知らないですものね。

榎：知らんもん。だから僕ら、たまたま横に会社があってね、その前をよく取ったりするから薬莖は見てたんよ、どこからどうように集まってきとるのかなと思ってね。その頃は、最初、ほんとにゾクッとするようにすごかった。パトローネを見つけた時みたいに、「わー、何かな」って。最初分からへんかって。で、そこのおっちゃんと風呂屋で知り合いになってるから、ちょっと見せてもらったら、「薬莖や」言うからな。

池上：そうか。最初は薬莖ということも？

榎：いや、薬莖は知ってたよ。でもそんな大量の見たことないもん。

江上：時々ドーンとあるんですね。入ってるのをたまたま見たということですね。

榎：このあいだもそうやけど、選り分けするんよ、異物が入るとるから。石みたいなのが入ってたりするから、選り分けするわけ。そういうので見とった。

池上：やっぱりすごいですよね、これだけあると。

榎：それで、一発で薬莖に決まって。だけどこれは一応危険物になってるんやって、大量になったら。この中に火薬ってほとんど残ってないんだけど、残ってる場合もあるし、それを一度釜に入れて、全部爆発させたりなんかして、汚れをとったりなんかしてするんだって。だけどそんなのやから、一応危険物になるから、一般の人は買えない。だけどほとんど大丈夫やということで、使えることになったんやけど。

池上：美術館でこれをこのまま、この国際の時も、美術館側はそれは大丈夫だったんですか。

榎：オッケーやったよ。ちょっと心配したけどね。

池上：ちょっとそうですよね、たぶん。

榎：山脇さんのほうでも、送り出したりなんか、これは向こうへ行ってできるもんかどうか心配してたんやけどね。まあ作品ということでやろうか言うてただけど、実際は運んだ時に大変なことになってね。僕らはこれ1年ぐらい前から準備して、その展示会をやるのに。だけど、ちょうど湾岸戦争をやるかやらないかで、夏頃からもめとったんよ。それでだんだん。次の年の初め頃やったんかな、1月頃に運び出さなあかんいうて。その間に国会の方で、(湾岸戦争に)人を出すのか、金を出すのか、もめてる時に、僕が先に名古屋の港から武器を出しよったわけ(笑)。それで税関にひっかかってもうて。で、実際、こうやって「自衛隊」って入れてたわけ。僕は「LSDF」って使わんやろ。これもJにしてね。それを出しとってね。税関で。

池上：これは榎さんが入れはったんですよね。

榎：そうそう。シルク印刷みたいな感じでね。結構印刷しにくかったんやけど。

池上：それでまずアメリカに持って行かれたんですよね。

榎：持って行くのに、税関でひっかかってね。山脇さんが「あちゃー」いうてね。

池上：アメリカ側の税関ですよね？

榎：うん、日本の。名古屋から運ぶということでね。豊田が運送代なんかもってくれたみたい。7人の作家やったのかな。若い子は松井智恵とかそういうので。名古屋で7人の作品が集まって運ぶ時に、僕のが税関で引っかかって。で、山脇さんが「えらいこっちゃ」ということで、防衛庁か通産省へ行って書類を。これは使った、使用済みやということで、印鑑を。

池上：証明してもらって。

榎：それがあつたらべつに税関はどうっちゃうことないの、書類さえあれば。それは上の許可があればね。

池上：それでようやく通って。

榎：うん。アメリカ、3か所やったかな。最初サンタモニカ美術館いうところ、あとポートランドの方でやって。

池上：シアトルの方ですかね。

榎：その後、メキシコに先に行ったのかな。それからニューオーリンズの方へ行って。結構向こうでも、外国の人はもっと、アメリカなんか特に葉巻なんかよく見てるのとちがうかなと思って。向こうの人も「そんなの普段見るもんちゃう」いうてね。

池上：しかも大量ですしね。

榎：向こうの人もびっくりしてたね、「わー、すごい！」いうてね。

池上：やはり湾岸戦争と時期が近かったからとおっしゃってましたけど、アメリカではそういうふうに理解されたところもあったんですかね。

榎：向こうの人は作品で見てくれる。もちろん戦争とか、時期が時期やったからこっちは心配してたんやけど、向こうはあんまりそういうふうには思ってたというか。

池上：表現は表現として。

榎：うん。やっぱりそういうことが、実際これだけ大量に使われてたというのでは、やっぱりショックなのか。見えないとこで戦争とかに使われてるということは、みんなそういうなかで想像したりとか。アメリカは特に関わっているというのか。サンタモニカいうたら、もうちょっと西の方へ行ったら、なんとかいう海兵隊の基地があるから、やっぱり向こうは気になつとるし。そして戦争が始まって、若者とかが徴兵みたいな感じで入隊して、ダーッと前線へ行ったりなんかするわけ。すごかったのは、スーパーに黄色いリボンというのが売ってね、サボテンとかあんなのがある砂漠みたいなところへ行ったら、サボテンにいっぱい黄色いリボンを結んだの、ダーッと道に。それは、やっぱりみんな無事に息子とか子どもに（帰ってきて欲しい）。

池上：土地によってどこに結ぶかが違うんでしょうね。

榎：うん、あれはすごかったなと思って。家の前にそういう黄色いリボンを結んだりして。スーパーにいっぱい売ってるの、黄色いリボンを。それだけ向こうの人はそういうのに参加してるいうのか、関わってるいうのか。

僕らはあんまり分からないからな、そういう世界って。いろんなことがあって。

池上：米軍がアメリカの外で使った葉莖が、そういうかたちでまたアメリカに戻っていくというのがすごく面白いなと思います。

榎：最初ね、山脇さんなんか気にして。オープニングをサンタモニカでやる時、日本の大使館とかそういう偉いさんが、日本の人が来るわけ、見に。ほんだら作品を隠すかどうかいうてな（笑）。隠すってどうやってやるんや。布を被せるのか（笑）。

江上：余計目立つ（笑）。

池上：何トンもあるのにね。

榎：それは余計おかしいんちゃう、いうて（笑）。

池上：やっぱりちょっと心配されたんですか。

榎：うん。やっぱり時期がね、ほんとに生々しい時期やったから。日本では映像って、いつも決まったような、バーンと砲撃しとるような映像ばかり毎日ぐらいニュースで流れてたから。

池上：あの戦争で、テレビに実際の爆撃場面とかがバンバン出だした時期だったので。

榎：日本はあんなのやけど、向こうはもっとすごいんやって。

池上：でしょうね。

榎：今回の原発でもそうやけど、向こうは戦地の被害にあった人とか、ああいうのも入ってくるんやって。このあいだも津波でやられた死骸とか、日本では映さないでしょ。向こうは映してるんやって、結構。

池上：そうです。

榎：だから僕らが思ってるより、向こうの人はもっとそういうものを実感として。だから批判もすごく起こるわけ。反戦運動なんかでも、すごい。

池上：それでアメリカを回って、国立国際へ。

榎：その間やったんよ。さっき言った中村さんも、「《葉莖》を見たい」いうて。なかなか美術館でやるのは難しいなんて言いとったけど、敬治さんは、やらなあかん、「日本でもやらなあかん」いうことで。で、また余分に買ったわけ、2トン。

池上：じゃあ同じものじゃないんですね。

榎：もうやってるもん。アメリカを回ってるからね。

池上：買い足しですね。

榎：買い足し。

江上：すごい！

池上：で、2 トンを国際で。

榎：そう、国際美術館でやった。結局、9 トンぐらいになったんやけどね。

池上：すごいですね。

榎：名古屋へ帰ってきた時は、帰国展いうのをやったんだけど、その時は使ったんだっただけかな、ちょっと今覚えてないけど。

池上：さっきちょっとお聞きしようと思っていたのは、国立国際にそれをまた出されて、篠原有司男さんと。

榎：そう、初めてな。

池上：ずっと知ってたけど、会うのは初めてだったという。

榎：そうや。ギューチャンもやる言うからね、そういうのもあったから、「ほなやろか」と僕もなって。作品はないんやけど、こういう感じで、写真とかそういうのでやったらできるかもわからんいうて。

池上：篠原さんのことはどれぐらいから。

榎：僕はもう絵を描いてる頃から、23、4 ぐらいの時やったかな、その頃から。僕は絵では表現するのがなんかもの足りんというのか、なんか違うな、というのを感じたりしてた頃やったかな。

池上：最初に篠原さんの作品を知った頃というのは、篠原さんはまだ日本にいらっしたんですか。

榎：おった頃。

池上：69 年にアメリカに行かれています。

榎：「芸術の道」か。

池上：『前衛の道』（美術出版社、1968 年初版）。

榎：あの本を出す前に、僕、映画観たん。『日本残酷物語』（1963 年）かなんかいう。彼がむちゃくちゃ、絵の具とかあんなのでビヤーツとやってるのを見た時、「うわー、すごいやつがおるな」って。それもモヒカンでな。モヒカンで暴れまくったんや。映画で見たんや。すごい人がおるなと思って。それでその後『前衛の道』か、あれ読んで。そんならまたイラスト入りで、彼の独特のイラストで描いてるし、しゃべってる言葉が彼の言葉やねん。なんかギャーとかボワーツとかな、すごい擬音いうのか何いうのか。

池上：すごい勢いがよくて。

榎：そうそう。絵もすごい。漫画みたいに、ビビーンとか、バリッ!とかな、そんな音書いて。すごい人おるなと思って。その間いろんな情報とか。僕もハプニングとかあんなのをやり出した頃に、ハイレッド・センターとかネオダダとかの情報が入ってきたりしてたから、「わー、すごい人らが、そういう表現してる人がおるんやな」と思って、ずっと気になりながら。時々ギュウチャンの一点とか、オートバイとか、京都の美術館なんかでっかいオートバイがあったりして。ものすごいデッカいやつでね。びっくりするぐらい「おー、こんなギュウチャン作ったんや」と思ったら、余計欲しくてね。なんとなく情報みたいなので聞いたら100万ぐらいする、いうてね。

池上：その大きいのが。

榎：大きいのが。今やったら買おうかなと思うけどな。

池上：今だったらそれはお買い得ですけどね（笑）。

榎：その頃やったら、今の言うたら1000万以上になるから。

池上：まあそうですよね。

榎：そらもう欲しかったけどな。盗んで帰ろうかなと思っても、でっかいから盗むわけにいかんしな（笑）。そういうところはすごいなと思って。会いたいなというのもずっとあったし。それがたまたまその中村敬治さんからそういう話があった時に、「そういう時代の連中とやるから、やらないか」いうて。「ギュウチャンもやる言うてるから」いうて。「ほな、僕も出したい」いうて（笑）。それでかな。

池上：実際に会われて、あの時篠原さん《ボクシング・ペインティング》とかも実際にやられて。

榎：実際やったんや、その美術館で。

池上：その時はいました？

榎：おったよ。散髪は秋山祐徳太子（1935—）がバリカンでびゃーっとモヒカンにして。なんか面白いおっさんやな。またまた秋山さんおもしろいやねん。二人がごちゃごちゃ言いながら、散髪しよるん。みんなどーっと思とるんよ。オープニングにやったんや。散髪してからやるのがカッコ良かったんやな。最初、ボクシングやる前けど、向こうからやってきて、紹介してくれて。ギュウチャン来て、「おまえか」いうて。向こうも僕に会いたかったんやって、どんなやつやろかと思って。どういう作家と一緒にやるかいう、資料送ってるやん？

半刈りの写真も送ったみたい、ニューヨークへ。だからギュウチャンも気になってたんやって、「どんなやつかな。会いたい」いうて。

池上：「こいつデキル」と（笑）。

榎：「おまえか！」という感じで。それで一緒にボクシングのあれやったりなんかして。オープニングが終わった後、みんな一杯飲んだりなんかして。みんなもう暴れん坊ばかりやん？ 飲み会や。美術館は田舎やん、万博

のとこってなんもないやん、お店とか。で、中村さんが僕に、大阪でも神戸でもいいからみんなどっか飲み連れて行ってくれへんかいうて。ほかに誰やったかな、福岡（道雄）さんはおったのかなあ、村岡三郎と、大阪では森村（泰昌、1951—）くんと、何人ぐらいおったかな、4、5人おったかな、関西の人が。飲めへんの、ほかの人。村岡さんも福岡さんも飲めへんし、森村くんも苦手みたいでな。しゃあないから、「忠さん、このおっさんら連れて行ってくれへんか」いうて。それで僕がみんなを大阪へ案内するようになって。地下鉄か、モノレールみたいな電車に乗って行くんやけど。おもしろい。電車の中でな、つり革にぶら下がってな、網棚の上へ上がろうとするしな（笑）。

池上：なんか子どもですね（笑）。

榎：子どもなん。ええおっさんや（笑）。さっき言うた平賀敬さんはビールを片時も離さへんの。

池上：モノレールの中で飲んでるんですか。

榎：ずっと飲んどるの。カバンにいっぱいビール缶を、美術館でオープニングやったから、残りをカバンにいっぱい入れて。面白いの。年寄りが座る場所があって、みんな座りよって。「おっ、ここ年寄りの席や」いうて。「おまえいいんちゃうか」とか言いながらね。面白かったね。

池上：ちょっと乗り合わせてみたいような。

江上：ちょっと見たくないような。隣の車両ぐらいから見たい（笑）。

榎：僕も若い時、結構飲んだり、暴れん坊やったけど、あのおっさんらがやると。自分がやってもあんまり、ひとがやったらなんか恥ずかしいてな（笑）。

池上：ちょっと常識人になったような気が（笑）。

榎：そう。「榎クン、今度どこへ連れていってくれるんや」とかいうてな。僕が連れて行くみたいな役目やったから。だから迷子にならんようにいう感じ。もうどこへ行くや分からへん。東急インか阪急のホテルを借りて、迷子になったらここへ帰ってくるんや、いうことで。分からなくなったらここへ帰ってくるように、みんなに地図とか渡して。で、飲みに行ったら、何人かは一緒に行ったんやけど、もうバラバラになってどこ行ったんか分からんようになる人もおるし。もうすごかった。おもしろい。そういう出会いやったかな。

池上：それで豊田（豊田市美術館）で「ギユウとチュウ 篠原有司男と榎忠」（2007年10月2日—12月24日）という展覧会もされてますし、このあいだも埼玉（注：「篠原有司男と榎忠」、埼玉県立近代美術館、2012年2月28日-3月4日）で一緒にされて。

榎：その間にもギユウちゃんとなんか知らんけど縁があって。「痕跡展」（注：「痕跡——戦後美術における身体と思考」、京都国立近代美術館、2005年）というのがあって。

池上：ありましたね。

榎：それも一緒にギユウちゃんとか僕も選ばれて。

池上：あれも国立国際ですか。

榎：京都が最初やったんかな。尾崎（信一郎）さんなんかやってたんやな。

池上：ああ、「痕跡」は京都に移られてからですね。

江上：そうです。京近美。

榎：京都（国立近代美術館、2004年）の後、東京（国立近代美術館、2005年）へ行ったんちがうかな。東京の国立。

池上：そうです、そうです。

榎：そういう感じで時々一緒にりだしてね、展覧会。なんか縁があるない感じになってね。それがまた、たまたま豊田で。最初は個展をやるという予定やったんや、ギユウチャンのも僕のも。だけど都筑（正敏）さんが、「これは二人展のほうが面白いんちゃうか、やろか」いう感じで。

池上：オープニングでボクシングも大砲のパフォーマンスも両方見て、すごい面白かったです。

榎：ああ、来られてたんや。

池上：はい。すごく暑い日だね。

榎：そうや、天気良かったから。

池上：でもいい日で。

榎：不思議とそういう出会いがあったというのか。だけど不思議と、作品でもモノでもそうやけど、思ってたら、後で、「ああ、なるもんやな」と思ってね。不思議やなあと思て。

池上：その後の展開で、さっきもちょっと《AMAMAMA》を作られていた時に、鉄片のベロ耳ですとか、鉄片の切り口の面白さというか、美しさというか、そういうのを発見されていたということなんですけども。1994年に「ギロチンチャー」（JR 神戸駅浜の手出口より西高架下、1994年11月27日—12月11日）という個展をされていて。

榎：この後。

池上：これのもうちょっと後ですね。

榎：1994年か。

池上：《AMAMAMA》の時もそうなんですけど、カネニシ興業さんという。

榎：兼正ね。

池上：カネマサさん。ちょっと間違えてました、すみません。兼正興業さんのところで《ギロチンシャー》を発見されるんですかね。

榎：これはね、《GUILLOTINE》は。僕は、ここの兼正というのは10年も20年も前からずっと出入りしとって。大砲作る時からずっと出入りしとって。《GUILLOTINE》というのは、ずっと見とるから、いつか何かできないかというのはずっとあってね。それも場所があるからね。いろんなのを探してたんだけど、たまたまJR神戸駅の、ちょうどホームの下になるのかな。

池上：「元コー」（注：元町高架下商店街の略）と言われるところですか。

榎：「元コー」いうか、ずっと神戸駅の方やけどね。そこに前から空き家になってる倉庫があったわけ、広い。国鉄時代は、荷物とか小包いうの、チッキいうて、こういう箱詰めの荷物を国鉄時代はやってたわけ。受付があつてね。それをJRになってからやめて、そこが空いて。倉庫がすごい広いとこやったわけ。天井が高いしね。

池上：じゃあ元コーの下じゃなくて。

榎：違う。

池上：また別のとこに倉庫があるんですね。

榎：そう。でっかいの、そこ。天井も高いとこ8メートルぐらいあるしね。そういうとこがあつて。ずっと面白いのと、「こんなとこで展覧会できないかな」と思ってたわけ。

江上：その場所も前から知ってたんですね。

榎：知ってた。何回か知人に聞いたりなんかするんやけど、どこへどう聞いていいんか分からんし。聞きに行ったこともあるんや、駅へ。だけどそこの駅長に言うたつて、「そういうことはできない」つて。

池上：まあよく分からないですよ、きっと。

榎：僕らの友だちでたまたま『KOBETTO（月刊神戸っ子）』に勤めてた女の子が、大阪の関西なんとかいう雑誌の会社に勤めとって、JR西日本の社長とのインタビューがあるというので、それに行くからということで。それ聞いて、「おっ、あれ聞いてくれ」いうてね、神戸駅のトップに。そしたらちょうど運が良かったのかなんか知らんけど、ちょうど東海道と山陽とを結ぶ拠点が神戸駅が発で、120年になるんやつて、僕がやろうとする年が。それで神戸駅でもいろんなイベントとかそんなのを、コンコースとかいろんなとこで考えてたんやけど、まあ出店しか考えなかったみたいでね。それで僕がそういうプランを持っていったの。「ああ、ぜひ使ってくれ」いうてね。ひとつのイベントやから、いうて。

池上：なんか、トップに理解があるというケースが結構ありますね。

榎：あるねん！

池上：すばらしいですね。

榎：だからなんぼその辺の駅の駅長に言うたって。

池上：権限がないですもんね、彼らは。

榎：許可できない。そうして一発でそれもオッケー。それでまた「好きなとこ使ってくれ」いうわけ、いろんなとこね。淡路屋の弁当とか、ああいうとこもみな入ってた、その近くに。今はきれいになっとるけどね、あそこは全部空きの倉庫やったんや。それを、いずれ開発する予定はあったんやけど、まだその頃はなかったから、いろんな場所いっぱい見せてくれてね。すごいのは、神戸駅のコンコースのところに、広い、天皇陛下とかそんなのが来たら寄る「貴賓室」いうて、ごっつい木でできた、どういうか、木で彫った御紋があるわけ、菊の。

池上：そんなのも見せてもらったんですか。

榎：見せてもろた。ここやったら今使ってないし。

池上：そこ使っていいって？（笑） すごいですね。

榎：資料とかしかないから、ここで展覧会やったら人来るよとかね。コンコースやし。「僕はこういうとこではやりたくない、あの倉庫がいいんや」いうて（笑）。

池上：菊の御紋使ったらちょっと面白そうですけど（笑）。

江上：榎さんとはちょっとまた違うからね。

池上：テイストが違いますよね。

榎：それで僕はあそこの倉庫を。「だけどあそこはあんまり人も通らへんしな」言うから、「だけどあそこがいいんや」言うて。そこは放ったらかしてたから、中にホームレスが入って、たき火やったりなんかしとるわけ。その片付けから始めていくわけ。ずっと掃除して、石ころ拾ってね。それでまあなんとかやり始めたんや。またここの難しいのは、全部電気を止めてたわけ、シャッターとか使ってないから。それを動かすのに関電の電気とか、僕は安くできないかなと思ってたんやけど、JRの方は使わせてくれへんわけ。もし事故とかそんなのあったら、よその電気使って事故あったら、責任問題があるので大変やから、うちのJRの電気を使ってくれ、いうて。そういう手続きとかまたうるさいの。また印鑑証明とかそんなのがいるわけ。

江上：ややこしいね。

池上：書類がいっぱいいるんですね。

榎：だけどやりたいからな、じゃまくさいけどそのぐらい我慢せなあかんとて。ほんで、やったんかな。だけでものすごく応援してくれてね。JR 西日本の社長がオッケーしたから、みんな、各沿線の駅長クラスが全部見に来たくらいの展覧会。広告いうの、ビラなんか全部駅に貼ってくれたり、みなやってくれて。

池上：そのJRの人たちの反応は。

榎：さっき言うたように、結構みんないろんなところから見に来てくれるし。

池上：みんな喜んでましたか。

榎：120年の、ひとつの節目いうのかそういう時期やったし、いろんなところから見に来てくれたり、鉄道マニアとかそんなのも。

池上：鉄ちゃんの人たちは絶対これ好きだろう（笑）。

江上：この場所で《GUILLOTINE》というのは、セットで最初から考えておられたんですか。

榎：やるのは、ここ。

江上：ここやったら《GUILLOTINE》できるやろ、って？

榎：なぜかいうたら、ここは大きい重機が入るの。入口も大きいしね、天井が8メートルあるしね。そうしたら重たいものをそばまで行って、ザッと、ガチャッとつかんでセッティングできるわけ。

江上：ここやないと逆にできない。

榎：そこでしかできないの。ここの場所は下が土でね、そこへ溝作ってね、セメント池作ったり、川みたいの作ったりね、いろんなのをやったんだけど。そういうことができるからなんとかここの場所をね。だけど大変は大変やった。一個石が落ちてきたらどこから落ちてきたか、ものすごいケンカしたりとかね、そういうのは大変やったけど。あんまり深く掘れないんよ。掘れるとこもあるんだけどね。下にも大きく基礎のセメントが入ってるわけ。だから掘れる場所が決まってるね。作品も置く場所も決まるというのか、そうってしまったんだけど。だからあんまり空間的なとか、デザイン的なとか、そういうもんは無視せなあかんという感じ。雰囲気やっていくという感じでしたんだけど。

池上：運んだり、実際のモノを持ってくるのとかも兼正興業さんの全部協力を得て。

榎：兼正がみな応援してくれた。全部ただでやってくれた。

池上：へーえ。

榎：休みの時とか毎晩行って、そこで溶接やったりして。その時、智恵子さんなんかが学生やったのかな、まだ。

江上：木ノ下智恵子さん。

榎：智恵子さんなんか手伝いに来とって。

池上：やることによって、いろんな会社の協力を受けていらっしやると思うんですけども、兼正興業以外にはどういふところと今までお仕事をされてますか。

榎：この近くにもあるんやけど、溶接やってる職人とかそういうのが何人かおるわけ。この溶接はここでやる、

とかいうのはそこへ持って行って、そこでやらせてもらったりとか。

池上：やりたいことによって協力を頼む会社というか、工場も違うという感じですか。

榎：そうそう。何人かおるわけ。そういうところは小さい会社が多いんだけどね。どうしても僕ら大きいところへ頼めないというのは（お金がないから）。もちろんお金があっても大きい会社はやってくれないんだけど、小さい会社だと休みとか自分らの仕事が終わった後に手伝ってくれたり、協力してくれる。大きい会社はどうしても無理がきかない。だからなんぼお金払っても、ああいうところは決まったところの仕事やってるから、よそのそういうものはやらないから。

池上：大きいところというと、例えばどういうところですか。

榎：例えば、さっき言うたような、久保田鉄工とか三菱電機とか（三菱）造船とか、ああいうところ。何か、市とか県がやるいうたら、そういうところも協力してくれる場合がある。材料とかをわけてくれるんだけど、そうでなかったら個人的なものはなかなか。

池上：なかなか難しいですか。

江上：そのために休みの日全部開けてとか、ライン止めて、みたいな話ですもんね。

榎：そんなのできないもん。

池上：大きいところは確かにそれは難しいでしょうね。

榎：そういうことで、自分のやれる方法は、自分で友だちや仲間をつくっていくとか。そういう人がいなかったらできない。だから個人だけでやろうと思ったら限られてるのね。だからどうしても発想とか、やりたいことが限られたようななかで、どうしても作品らしい、彫刻らしいような作品になってしまうのか。そうでないもんをやっぱりやりたいなと思っちゃったから。それにはどうしたらいいかいうたら、やっぱりこういう工場跡とかどっかの倉庫みたいなのを借りたいとか、山の中の、さっき穴掘ったような場所とか、そういうところになってしまう。そのほうが大変だけど、その大変というのが、まあ僕にとってはものすごく面白い要素があるわけ。いろんな人との出会いとか接触とか、今でよく言う「絆」みたいななんがいろんな意味で生まれてくるのかな。僕はそっちのほうが好きやから。

池上：いまちょっと「絆」という言葉も使われてましたが、こういう大きいものを作られてきて、1995年（1月17日）に阪神・淡路大震災というのが起きて、すごく大変なことになったんですけど。

榎：そう！そうやねん。この1か月後やねん。まだ全部片付けしてない頃やったんや。

池上：そうですね。

榎：次の年の1月やからね。

池上：これが、12月11日までやってるから。

榎：後片付けとかそんなので。べつに決まった日に片付けるとかなくて、展覧会でも、見たいという人がおっ  
たらまだ開けとる場合もあるしね。

池上：震災が起きた時はまだ撤収されてなかったんですか。

榎：だいたいはしてたけどね。大部分はまた兼正に返してたわけ。その間に、名古屋と、どこか2か所ぐらい  
やる予定だったのかな。大阪の集雅堂という、岡田（一郎）さんいうところが「やってほしい」いうてね。

池上：そうですね。集雅堂に震災の後に回って。

榎：5月頃ちがうかな。4月か5月頃やろ。

江上：4月ですね。名古屋でも「コンテンポラリーアートフェア」（名古屋市民ギャラリー）が、4月に同じ  
く重なっていますね。

榎：何かやってほしいいうて、それが決まってたんだけど、その作品は兼正の会社に置いてもらってたわけ。  
でも、兼正（神戸市長田区）が結構やられてね。

池上：でしょうね。

榎：作品なんか、上からいろんなものが重なってしまって、掘り出すみたいない感じやった。それはまあ兼正の  
人がやってくれたけど。ほんと1か月ぐらい後やったかなあ。びっくりした。まさかその震源地が、穴を掘る  
前に調べに行ってた野島断層が震源地やったわけ。その化石が出てきた。だから余計びっくりしてね。

池上：すごいとこでつながってますね。

榎：すごいことやったなと思ってね。

池上：榎さんのお家とかご家族は、震災の影響というのは。

榎：それは大丈夫やった。家がちょっとやられた。言うたって半壊いうのか、そんなもん。そんなのどこでもね、  
そういうようになってたから。うちの家も、やりかえした後やったからね。古い家に住んだ時やったらもう  
完全にやられてたと思う。基礎をやりかえして、打ち込んで。ちょっと崖みたいなのこやったんや、山の方でね。  
だから助かったんや。

池上：よかったですね。

榎：うちの親戚とか、絶対うちの家やられたと思ってたけど、そういうので助かった。

江上：でも震災の後で引越されたんですか。

榎：もちろん震災の時はそういう感じでね。地元におばあさんがおってね。そのおばあさんが「地元を離れた  
くない」いうてね。娘さんなんか、子どもたちは「変わるうや」言うったんやけど、おばあちゃんは自分の  
住んでたとこやから、生まれたとこいうのか、「よそへは行きたくない」いうて、向こうも家探しとったわけ。

僕も山の方で、作品とかそんなのがだんだん、クルマで、担いで上がとったんや、階段みたいなどこ。

江上：そうか。高取山のどこやから。

榎：だから駐車場、クルマが置けるような感じでいうこともあって。ずっと思とったしね。そういうとこで友だちに工務店をやってるやつがおって、情報は言うとったわけ。

江上：「入ってきたら」と。

榎：ほな、垂水の今住んでるところが(空いて)。その頃はなかなか家もないくらいやってん、みんな。だからちょっと高かったんやけど、なんとか。そこもやられとったんや、ひび割れとかそんなのはあったんだけど、でもまたメンテナンスして、直して入ったんやけど。

池上：そういうふうには被害も受けられて、いったん制作はストップした。

榎：うん。できなかったというのか。うちの家は助かったんやけど、会社がやられてしまったんや。会社は、菅原というものすごく火事になったとこでね。火事は助かったんやけどね、もう煙突は倒れるし、ボーンとやられて、2階にあった機械なんか下に落ちてるし。そういうので仕事は全然だめ。後どうするかいうので、片付けしながら、また仕事立て直していかなあかんし、その準備もせなあかんし。片付けを何か月もかかってやって。うちの場合は、今までやってた仕事特殊な仕事やったから、地震で仕事がストップしたら、またよその仕事だめになってしまうやん？　そういうとこで、うちがやってた仕事をよその会社に教えに行かなあかんわけ、頼むのに。得意先がそこで切れるんやけど、それはもう仕方ないやん、あとやっていくのに。それで三重県とか名古屋とかいろんなとこに、いろんな機械とかを揃えてもらって、僕の技術を教えて。今までうちは35、6人から40人近くおったんやけど、もう仕事もないしね、そんなことやっていかれへんから、半分ぐらい、今までおった人をうちの得意先とかそういうとこにみんな振り分けして。若い人は遠いとこへ行けるんだけど、年いった人は「遠いとこは行きたくない」言うから、近くのとこ探して。そういう作業は1年ぐらい続いたかな。だから作品どころじゃなかった。

池上：そうですねえ。

榎：その時結構、ギャラリー16とか、いろんなとこから「何か作品出してくれないか」言うんやけど、そういう考えってできなかったなあ。そこまでして作品なんかやっても。

池上：それどころではないような状況ですよ。

榎：作家と言われている人はみんなやってるけどね、僕はあんまり作家いう意識がなかったから。それよか生活とかそういうものほうが、そういうもんがあつてこそ作品も生まれてくると思うし。できない時は仕方ないんだから。

池上：でも、この《ギロチンチャー》の作品は、4月には大阪とか名古屋で。

榎：やったよ。

池上：やっついで。その頃にはなんとか展示作業とかも。

榎：できない、できない。だけど僕の作品は、いっぺんできたらわりと動かすだけやから。あと展示するだけやから。あまり変な細工とかそういうのもいらないし。ただ重たいだけでね（笑）。

池上：運ぶのが大変という。

江上：道が、よく持って行けたなという感じですよ。4月やったから。

池上：そうですね。3か月しか経ってないのに。

榎：それはまあ場所が大阪の方やったし。神戸ではたぶん無理やったと思うけど。

池上：そうですね。なんとか運ぶだけは運んでという。

榎：そうそう。

池上：こういうのを選ばれる時というのは、こういう部品というか、裁断されたものを見に行かせてもらって、これとこれ、というふうに自分でピックアップされるんですか。

榎：このあいだのは小さいやつで、選んでくるやつも多いんだけど、今回、これは大きいスペースでやるから、大きいやつがいるわけ。それは、「こういうふうに切ってほしい」とか言うわけ。ギロチンのとこ行って、置いて。ほんとはそこへ入って、中へ入ったらあかんのやけど、入ってね（笑）。「角度とか、そういう感じで切ってくれ」というね。小さいものは破片みたいなものでね、その辺にあるやつは。だけど大きいやつは、やっぱり切ってもらって、指定してやるわけ。このあいだの《サラマンダー》でも、5、6メートルあって、半分にしたりするんやけど。

池上：では、発見したものと、自分で切ってもらったものと、組み合わせられている感じですか。

榎：そうそう。こんなでっかいやつとか、そういう感じでやっていた。

池上：じゃあやっぱり「ほかのものじゃダメだ」というのがあるんですね。震災なんかでほかのと一緒くたになってしまっ。

榎：まあそのへんはね、どういふのかな、震災でやっぱり三宮とか、ビルなんかひどかったんや。高速が倒れたり、ああいう骨組みがむき出しになったりとか。解体し始めたら、こういう世界が、こういうでっかいやつがいっぱい街の中に出てくるわけ、パーッと。だから、どういふもんかね、地震の前やったからこの作品ができたと思うの。地震の後はこのいふのが街中にあふれてしまっってね、もうほんとにショックで。

池上：わざわざつくろうとは思わなかったかもしれないですね。

榎：うん。地震の前やったから、これが作品としてできたんやと思うけど。

池上：湾岸戦争と《葉莢》の時期が重なったというのと、ちょっと似てるような。

榎：そうやね。だから結構みんなに言われたことあるんよ、「おまえがやった後、何かが起こるな」いうてな（笑）。

池上：そんな（笑）。

江上：「嵐を呼ぶ男」や（笑）。

榎：ほんとにな、何かやったらそういうもんが起こったりするいう。

池上：戦争が起きたら困りますけども。

榎：うん。

池上：震災の後、制作はどういうふうに戻していかれたんですか。お仕事のほうをまず立て直して。

榎：僕は、あまり先のことは、次何やるかってあまり考えん方の人間でね。そういう生活とか社会の流れの中で（やっていく）。これなんかは代官山いうとこでね、関東大震災から七十何年の節目で、この同潤会の建物が古くなって、取り壊しになって、新しいものを作るいうて。（注：「さよなら同潤会アパート展：再生と記憶」、1996年8月8日—12日。『Everyday Life/Art Enoki Chu』、156-59頁）。安藤（忠雄、1941—）さんがやったらしいんやけど。これはもうみんなに親しまれて、建築界の方でも結構有名になっとったんや、建物が。けども、あの時代のやつやから、木造やったし、やっぱり潰して、また新しくやるいうことで。阪神大震災を体験した人にいっぺんやってほしいなということで、僕が関西の方から（出向いた）。この時も10人近くやったんかな。その時実際、長田で出てきた鉛のやつを1トンぐらい持って行って、ここで階段に流したり、庭に流したりしたんや。現場で溶かしながらやったんやけどね。

池上：そうなんですね、やっぱり。うまいことつながってるなって。実際に流しているんですね。

榎：流してる。

池上：実際にそこで鉛を熱してやってるんですか。

榎：そうそう、ここでね。安齋重男（1939—）というカメラマンがおるの。彼なんか「やりたい」いうてね。写真を撮りに来てくれるの。安齋さんは、写真撮るだけでなしに自分もやりたくなくなって、「いっぺん溶かしてみたい」いうて、バーッと。こういうパイプとか、実際、これ持って行って、インゴット（鋳塊）にしたやつを持って行ったり、水道管のパイプみたいなものを持って行ったりして。

池上：これが鉛の塊？

榎：これを溶かしてね、鉛にしたわけ。

江上：で、そこに置いて。すごいですね。

榎：これを企画したのは、北川フラム（1946—）の、あそこがやったんかな。

池上：熱する器具はどういうものなんですか。

榎：これは向こうで調達して。ガスバーナー。

池上：ガスバーナーみたいな。ああ、これですね。

榎：そういう感じで溶かすわけ。

江上：鉛は融点低いですよ。

榎：低い。だいたい600度もあれば十分溶けるわけ。だからこのバーナーで速くやったらすぐ溶けてしまう、水みたいに。

池上：こういうふうに展示して、その後はデロってなった状態のまま。

榎：これまたね、乾いたらペロッと剥がれるの（笑）。だけど古いモルタルのセメントやからね、下のセメントも剥がれてしまうような感じ。だけど剥がすのもわりと簡単。

池上：これもその場でやって、これだけの展示になるんですね。

榎：そうそう。

江上：後ろに1個あります、インゴット。

池上：あ、ほんとだ。

榎：そんな感じのやつ。それは鉛を使った作品で。震災の後、鉛にちょっと取り組んだの。それもみんな、長田とかああいうとこで出てきたのが兼正に集まってきよったわけ。水道管の、ああいうグニャグニャとした感じで。それがたくさんあるからね、いっぺんやってみようと。鉛を扱ったことないんやけど、面白いからね。だけど扱いやすいようで扱いにくかったな。これは動かすことができないの、作品として。作って、どこかへ展示するとかいうのは難しいの。

池上：形を作ったらそこで終わりというか。

榎：そうそう。ある程度の大きさやったらできるんだけど、あんまり大きいものをやったら、もう持つのに、機材があれば、フォークリフトやなんかで持つんやけど、変形してしまうの、グニョッとなってしまうわけ。

江上：このあいだも、これ、枠に入れて置いてたけど、結局ちょっと使えなくて、切り離して使った。

池上：兵庫県美での展覧会の時ですか。

榎：この中できれいそうなのだけ外してしまっただけ。

池上：融点が高いというのはそういうことでもあるんですね。形を保持しにくいというか。

榎:これは芦屋のルナホールというところで、フラメンコやってる友だちが「いっぺんやりたいな」いう感じで。ステンレスとかいろんな、切り抜いた後の部品の、抜け殻いうの、それを組んで立体的な。移動できたりとか、天井からでっかいそういう金属がバーンと降りてきたりとかね。

池上:舞台セットとして?

榎:そうそう。これ、すごかったよ。フラメンコ見に来たら、みんなこの舞台の写真を撮る。始まる前にバーツとみんな写真撮って。

池上:主役を食ってしまうような(笑)。

榎:最初、舞台の大道具の人が、仕込んだりなんかする人が、重たいやん? もう嫌がってね。「こんなクソ重たいん」いうて。だけど、だんだんやりだしたら、「やっぱり木や紙とちゃうな」いうて、ごっつい喜んでくれたけど。

池上:この次の、2000年の《PLAYSTATION》という個展ですかね、それについてお聞きしようかと思っ  
ていたんですが。(神戸・グストハウス、2000年10月29日—11月11日)

榎:ちょっと余談やけどね。この穴掘った作品(「表出する大地展」、1997年2月8日—3月30日)は、広島  
の現美(広島市現代美術館)で、今、兵庫(県立美術館)にいる出原(均)さんがこの時担当しとってね。  
7人くらい、土をテーマに作品を扱っている人をやっていて。ほかの作家は、美術館の中に置ける平面であり、  
土の塊みたいなのをやったんだけど、出原さんはもうひとつ何か違ったのをやりたいなと、ずっと調べとった  
らしいわ。で、僕を見つけた。今井祝雄(1946—)が出してる本で、こういう穴を掘ってる関西のもんがお  
るいうて、それを見つけて、「やらないか」ということだね。で、やるんだけど、全然どんな土かも分からんし。  
「掘るとこあるんか?」言うたら、「掘るとこいうたって、美術館の庭しかない」言うから。「庭ってどんなん?」  
言うたら、全然クルマが入っていけないような庭だね。まあ技術的なことはなんとかしたんやけど。出原さんも、  
「何かこういうことをやりたい」いうのを探しとってね。で、僕を見つけて「ぜひやらないか」いうて、やり  
始めた。

池上:そうか。じゃあここで再び掘ったんですね。

榎:そう。初めて2度やった。それもね、仕事終わって、金曜日の晩とかね、新幹線に乗って穴掘りに行きよ  
る(笑)。

江上:広島まで(笑)。

榎:広島まで。2か月、3か月ぐらい行っとったかな。あと、掘り残しとか、こういうとこ、誰でもできるよ  
うなとこは、向こうの学生とかバイトみたいなので来とった人に頼んで、「今度来るまでにここまで掘っとい  
てほしい」とかそんなの言うて。これも面白かったけどね。そういう若い子と一緒に。

江上:でも、そう思ったら、中村敬治さんの展覧会もありましたけど、震災の後ぐらいから、北川フラムさん  
が声かけてこられたり、出原さんが声かけてきたり、ちょこちょこいろんな人が、「こんな面白い人がいる」  
いうのを聞いて、「何かやらへんか」いうのが増えてきてる感じですね。

榎：そうよ。国際美術館で「反芸術／汎芸術」やったのもそうやねん。「ハンガリ」の写真とか「ROSE CHU」とかいろんなのをやったわけ。やっぱりみんな見に来るわけ、国際とかああいうとこでやったら。やっぱり若い、勉強してる子は、あの時代の、ネオダダとかあのへんの時代に興味のある人がおるわけ。その時に村上（隆）とかが見たわけ、「ハンガリ」を。それで。

池上：「何だこれはと」（笑）。

榎：「なんや、こんなアホがおるんか」という感じで（笑）。おもしろいな、いうことで。で、「会いたい」と。美術館でやると、そういう大事な要素もあると思うしね。それまでは僕は個人的には、誰が来るかという、近所のおっちゃん、おばちゃんばかりみたいなのを思ってたけど、ああいうとこでやればいろんな人が見てるやんか。そういうなかでいろんな方向にまたつながって。それは、徐々にだんだん美術館のやり方とかそういうのって、最初はある程度興味なかったんだけど、そういうなかで美術館でやる大事なこととか必要性というのがあるな、と思って。そういう中で、自分だけの必要性でなしに、やっぱり見る人の必要性をもっと考えていかないとあかんというのは、まだまだどこかにはあるんだけど。この後ぐらいかな。こういうなかで、ああいうとこでやったりするから、だんだんつながって、いま言うたように、北川フラムとかああいう人に伝わっていくというか。

池上：さっきの神戸の学園都市のところは、掘った跡はガレージに、ちょうどよくなったわけですけど、ここはどうされたんですか。

榎：また埋め戻したよ（笑）。

池上：やっぱり（笑）。

榎：それがまた面白かったんや。その時穴掘ったら、中にゴミがいっぱいあるわけ。工事現場の、美術館をつくる工事をやってた時の、いろんなセメントの塊みたいなものとか、工事する現場に、危ないから入ったらいけないという金属のやつとか、全部埋め込んでるんや。「こんなことやとったんか」とって文句いいながら、出原さんなんかと。それは設計者が悪いんじゃないしに、工事現場の人が。

池上：見えへんし、みたいな感じで。

榎：見えへんと思ってな。まさか掘るとは思わへんやんか、美術館なんか。その時おもしろかったのはね、有名な建築家の、何という人やったかな。美術館をつくった人の、先生と言われる有名な建築家。外国の人で。

江上：外国の人？

榎：その人が、環境とかそういうことをものすごく大事にしながらやってる、その弟子やから。まあ言うたら黒川紀章クラスの人やと思うんやけど。あ、（ル・）コルビュジエ（Le Corbusier）か、その展覧会やってたんや、そこの美術館で、ちょうど僕が穴掘りよる時に。ほな全国からその展覧会を見に来るわけ、建築家も。僕が穴掘る時にゴミが出てきた話をしとったわけ。ほな、こういう後始末は、設計者はどこまで責任あるのか、こんな現物見せられたら。そら設計者の責任ではないけど、管理がなってない、いうて。

池上：後のこともちゃんと考えてという。

榎：うん、考えて。そういうことがもろに出てきたんよ。

池上：広島建築は黒川紀章ですよ。

榎：黒川紀章か。なんかそういう感じで。

池上：ちょっと具合が悪い感じですね。

榎：具合悪いことですね。UCCの腐りかけた缶とかあんなのがいっぱい出てきてね。

池上：それはいかんですね。では、神戸の時とはまた違う歴史が掘り返されたというか。

榎：そう。埋める時に、沖縄から持ってきた土だったんよ。沖縄の、米軍の嘉手納基地かどこかの土を持ってきた。その時一緒にやってた……、犬島でやってたの、誰やった？

江上：柳（幸典、1959—）さん。

榎：彼が土を沖縄から持ってきてたんや。ある面積を掘って、木箱にバツと入れて。それが何個かあったのかな。「それも一緒に埋めさせてくれ」いうてね。だからまた掘ったら。

池上：それをどこかにやらないといけないから。

榎：それを一緒に埋めたりとか。本当かどうか知らんけど、出原さんが、もし誰か次掘る人がおったら、そこにメッセージみたいなのをに入れて、タイムカプセルみたいなのをに入れて、埋めるいうて。

池上：埋められたんですか、実際。

榎：うん。

池上：何が入ってるんでしょうね。

榎：文章か何か書いてるのとちがうかな。

池上：出原さんが？

榎：うん。と思うよ。

池上：広島土地に米軍基地の土がまた入るということが、なんかすごいですよね。

榎：ここは、真砂土（まさつち）いうてね、岩がないの。砂岩いうのか、岩が溶けて全部サラサラの土やねん。その山は、山いうか比治山いうところは、こういう感じの土ばかりで、なんぼ掘っても岩が出てこない。

江上・池上：へえ～。

榎：だから掘りやすいのは掘りやすかった。ただゴミがあったのが掘りにくかったけど。だから結構、裏側は防空壕があったり、いまだにNHKの基地があるのかな。それとかアメリカの研究するのが残ってるわけ。あの山は半分は原爆でやられたんやって、だけどその裏側は原爆でやられてない。そういうので、いろんな資料とかを調べる研究所が米軍の中にまだあるらしいわ。

池上：建物だけまだありますよね。

江上：あります。

榎：だからこれもある意味面白かった。そういういろんな。

池上：《肘山蠢動》というタイトルで。この肘ってわざとですか、それとも。

榎：いや、そういう字よ、肘山いう。

池上：ヒジ山って。

江上：比べるに治める。

榎：これ、出原さんに調べてもろたんよ。古いやつかな。

池上：ああ、昔の（漢字表記）。

江上：昔はこういう漢字やったんかもしれないですね。

榎：昔の土のこともあったしね、その文字を使ったんや。

池上：面白いですね。

榎：そのなかに、蠢動いうて、虫とかいろんなもんがうごめいてるいうのか。それが、ゴミがうごめいてたという（笑）。なんか企業のそういう悪い面を暴いたという。その後、これも北川フラムの計画で、地震の後、あの辺に復興住宅みたいなのができた時に、ちょうど美術館もできる時やったんや。まだ土が山盛りやったんや。

江上：HAT 神戸ですね。

榎：HAT 神戸。その時に神戸製鋼の、こういう溶鉱炉から出てきた「湯」（注：溶けて真っ赤になった液状の鉄のこと）を運ぶやつやねん、これも。ここへいっぱい入れて。中は耐火レンガでね。冷えないように全部レンガでできてて。それをプレゼントしてくれるの。好きなように使っていいから、いうてね。それであそこへモニュメントとして何点か作ったわけ。その時僕はこれを、最初は何十個もらってやるつもりやったんやけど、結構重量がありすぎて、下の基礎を作らなかつたらなかなかそういうとこに置けないみたいな感じで。これも重たいんよ、結構。4、5トンあるような感じでね。

池上：じゃあ、復興プロジェクトの一つみたいな感じですよ、こういうのは。そういうのに参加されて。

榎：これは全部鉛で作ってやってるんです。長田もいろんなのがあるんだけど、一応長田とか菅原のパイプを使ったという感じで。昔、ここは製鋼所やったから。

池上：震災の後、神戸の街並みも大きく変わったところがあると思いますけど、そういうのはどういふふうに見ていらっしやいましたか。

榎：もちろんいろんな建物とかあんなのが壊されて、新しいものになっていくんだけど。三宮いうたら阪急会館とか映画館とか、僕らよう行ってた阪急文化とか、ああいう古いものがなくなってしまったわね。それと街柄が、どういふか、きれいになって、昔はあの辺の三宮駅前、今、石をボンと積んだ、でこぼこの公園みたいなのあるやん、山の。あそこなんかでも屋台があったりとか、何とも言えん古い街のそういうのが残ってたんだけど、それがもうきれいになってしもてね。きれいがいいのかどうかは分からへんけど。まあたしかにきれいになって、安全になったのかも分からないけど、なんとも言われへんね。

池上：開発できれいにしたんじゃないくて、一回だめになってしまったものを、新しくせざるを得なかったから。

榎：だから、神戸って昔から、やっぱり古い建物とか税関とか、横の商工会議所とか、古い検査所とかいろんなのがいっぱいあったんや。だけどほとんど潰してしまうんよ。そのへんでいろんな建築仲間と、残してくれていろんな保存運動やったりしてたんやけど、もう簡単に神戸市いうのは潰していつてしまう。北野でもそうよ。どんどん潰しよった。たまたま『風見鶏』かなんかいうテレビをやって残すようになったんやけど。北野開発いうのか。その頃、Rose Gardenとかああいうのが残ったのも、安藤（忠雄）さんなんかはまだ若い、まだあんまり売れてない頃やったんかな。

池上：出世作ですよ、あの辺は。

榎：そうそう。その時あそこの Rose Garden に最初に取りかかった、僕らの友だちの、同世代の子とかそんなのが、あの辺で洋服屋とかを作ったりして。あの頃はワールド（WORLD）とか、そういう大きい会社なんかがポートアイランドへ移転し始めた時期やったんかな。あの辺が『風見鶏』かあんなので一気に、ファッション的なものがダーッとでき始めた頃やった。だから僕らも結構関わってたんや、保存運動とか。Rose Garden の Rose Garden 大賞とかいうて、展覧会をしたり。

江上：やってみましたね。

榎：その時僕はポスターをずっと作ってた、展覧会の。古いもんがいいとか悪いというのでなしに、そういうもんがあったこととか、そういう建築の良さとか、神戸はこうやったという歴史的なものがだんだん潰されていくといふのか、そういうのがね……。単なる新しいもんをつくるだけでなしに、そういう古いもん、歴史的なもんとか、そういうものを同時に考えていかなかったら、単なる新しいものってなんかなと思うんだけど。それは建物だけに限らずね、何でもそうなんだけど。

池上：神戸なんかそれが財産なんですけど、ほんとは。なんで潰すのかなと。

榎：それを平気でね、やって。新しいことをどんどんやらなあかんいうて、前ばかり進んでいくといふのか。それも大事やけど、やっぱり大切な先祖とか先輩たちとか、そういう人が残してくれたものをもっと見ていかないとあかんと思うし。だから神戸は結構、昔から「神戸株式会社」言われてた。「金儲けばかりや」いうて。

宮崎（辰雄）さんの頃からずっと言われとったわけ。よそからそんなの言われたら、僕ら神戸に住んどったら、やっぱりどっかで腹立つところがあるんよ。クソッと思うけどね。僕らの力ではどうしようもないけど、やっぱりそういう考えを持つ人と、そういうことをやらなあかんと思うし。建築学会は建築の方で、保存運動をやったりとか、座り込みみたいなのをやったりするんだけど、僕らは美術でそういうことがあるのかいうと、ほとんどないし。そういうとこでわれわれは、地震のことにしたって、アートが何の役に立つんかとか、色々問われたり聞かれたりするんだけど。絶えずどっかでは思うわな。だけど、やっぱりなんかそういうものだけでなしに、美術というのはもっと違ったとこでやる仕事があるのとちがうかなと思って。たしかにそういう、その時代、時代で立ち向かっていけないとあかんこともあるんだけど、それだけではちょっと。「前を向く」言うたらおかしいけど。どう前向いていいのか分かんないけどね、一つひとつ思うことを、やっぱりやっていきたいもんを、自分は正直にやっていくしかないかなと。それがどういうように伝わるかはまた別としてね。

池上：これですかね。さっきお聞きしかけた《PLAYSTATION》の、すごい写真が。

榎：これは豊田市美術館でやったんだけど。これは、最初は拳銃とかあんなのを作りたいとずっと思ってたわけ。それは、地震の後、オウムがこれを作ろうとしとったんや。このAK-47、カラシニコフの銃を。

池上：同じ型ですか。

榎：うん。それは壮大な計画でね。部品をロシアから買って、柱に隠してたんや、部品をずっと。それを大量に作ろうとして。

江上・池上：へえ。

榎：その前にサリンを発見したから、サリンの方を実験したくなって、ああいうようにばれてしまったんだけど、これも大量に作る予定やったんや。

池上：へえ。やっぱりなんか時代とリンクしますね。

榎：それで、拳銃でなしにAK-47を作りたいなと思って。それは全部アメリカに関わってるやん、そういう戦争とか武器って。だからものすごく分かりやすく、ソ連とアメリカの銃を作ったんだけど。

池上：これはいろんな展覧会で発表されているんですね。

榎：結構やってるよ。

池上：豊田市美術館で最初にやって、その次、《PLAYSTATION》という展覧会の名前は神戸でやったんですね。

榎：神戸でやったんや。

池上：あ、Mokuba（木馬、神戸にある老舗のジャズ喫茶）でやられたんですか。

榎：Mokuba。Mokuba知っとんの？

池上：はい、知ってます。この辺で育ってるんで。

榎：ああそう。だからこの時は江上さんも、銃運び時。

江上：Mokuba がトア・ウエストにあった頃です。

池上：今はトアロード沿いに移転してますね。

榎：Gusto House いうて、神戸駅の上の方にある、地下にあるギャラリーやけど。運ぶのに、銃を持って行くパフォーマンスは豊田でもやりたかったんやけど、豊田ではちょっと無理やった。で、Mokuba という知り合いの場所を、一応オッケーをとって。「こんなことやりたいんやけど、どうや」言うたら、マスターが「ええよ」いうて。ギャラリーの方も「2 週間ぐらい展覧会やりたいんやけど、やらしてくれないか」いうて、それで始めた。最初は全部の銃をそこへ展示して、一部運び出すのは別にずっと壁に並べとって。それは、文化の日を狙って、人が集まりやすい、人がおる時にやりたいなと思って。最初は電車に乗ってやるつもりやったんやけど、その 1 か月か 2 か月ぐらい前、プランやりよる時に、石原（慎太郎）知事が自衛隊の訓練を、電車の中とかあんなのを使ったんよ。デモンストレーションみたいなので。街に実際出られるのかどうかいうて、自衛隊が。いろんなもの、タンクとかを東京に。

池上：東京の銀座に戦車を走らせたというの、ありましたね。あの時ですか。

榎：その時に自衛隊が電車に乗って移動するわけよ。これはやられたな、いう感じでね。

江上：うわ手やったみたいな（笑）。

榎：これはもう電車はやめとこう、いう感じ。実際やめて良かったんや。ものすごい人でね、電車が。当たったら危ないやん、硬いし。

江上：すごい重いし。

榎：重いし。ケガでもしたら。ほかのことでケガしたらなんのことかわからないからやめよういうて、歩いて運んで。新聞社の人とかにもいろんな意見言われて。やはりこれは、この銃は法律にはひっかからないんだけど、これを集団で街で持って歩くというのは、これは騒乱罪とか違反になる。違反というのか、絶対やられる、いうてね。

池上：まあ捕まっちゃいますよという。

榎：それは、密告されたり、誰かに言われたり。若いもんがこんな銃持って、本モンみたいなものを持って運ぶというのは絶対通報されるいうて。で、警察に届けたら許可は出ないから、いうて。それは僕もしたくなかったわけ。それは新聞社の人に言われて、そうかと思って。やっぱりデモとか、交通局とか警察へ言うて、オッケーが出たら、これは運ぶ意味がなくなるの。

池上：確かに。

榎：ああいう危険なもんとか、戦争に使われるようなもんを日本の市民が持って歩いてるいうたら、何かと思うやん？ そういうとこをまぎらわすようなことをやったら、絶対オッケー出ない。持つほうも、オッケーに

なった銃持ったって、緊張感ないわけ。

池上：許可もらってやってもしょうがないですね。

榎：みんなドキドキしながら、「こんなん持って歩いていいのかな？」と思いながら、ハラハラしながら持って、人に見られる、見せるいの？ そういう行為をみんな持つ人が感じてほしいというのか。なんとか無事に運び終えてね。その日はたまたま豊田で、これを美術館が購入するかどうかで美術館の館長や役所の人とかがいっぱい集まって、なぜ銃を購入するか決める日やったんや。

江上：そうなんや（笑）。

榎：都筑さんに言われてた、「もし警察にそれがひっかかったり何かになったら、パーになるよ」いうて。

江上：そんな裏もあったんですか。

榎：あったねん（笑）。だからこっちにしたら、これ作るのにごっついお金がかかるとるわけ。だから嫁はんに相談せなあかんかと（笑）。で、嫁はんに一応、今こういう感じで、豊田の方が「コレクションしたい」言うるとし、それはこの3日の日にやるから、もしなんかあったらパーになるんや、いうて。それは嫁はんのほうも、「僕がやりたいことやからやったらいいんちゃうか」いうて。「あかんようになってたらしゃあないやん」いうことで。

江上：いやー、えらいわ、やっぱり。

池上：器の大きい方ですね。それは、まず型を作られて、鑄造はどこの工場で。

榎：これは大阪の大正区いうところで。三好さん（三好製作所）いうて。このあいだの兵庫の県美でやったのも手伝ってもらったんやけど、そこの会社で。今は枚方の方へ変わってるんやけど、古い、おおかた80年か100年ぐらいになる、鑄物会社を大正区でやってた。昔は工場街だったんやけど、その辺もいろんな住宅が、マンションとかいろんなのが建って。そこで鑄物をやるいうたら、汚れたり煙が出たりするから、逆に非難されるわけ、住民に。それで工業団地いうのか、そういうところが集まっているところへ移転してしまったんやけどね。時代によっていろんなのが変わっていくというかな。

そういうとこで、たまたまここの三好（芳郎）さんいう人が、ええ人いうのか、すごい人でね（笑）。やっぱり彼もほんとに彫刻やってたんやって、金属の。金属は自分とこでもやってるから、やっていたんだけど、やっぱり親の跡を継がなあかんようになって、「作品なんか、遊びなんかやとったらアカン」みたいな感じで。自分もそういうふうにやりたいというのはどこかにあったし、すごくうまくオッケーが出てね。

池上：うまくマッチして。

榎：これを作るのに、三好さんのとこでやるには、木型を作らなあかんわけ。木型も、向こうの人が図面見てほしい作るんやけど。ふつう円とかパイプみたいなものとか、変形したものは、図面があるから職人が木型を作るわけ。立体的なこういうのって、なかなか。こういう直線的なものはわりとできるんやけどね、ほかだとできないから、僕が木型の見本を作ってね。僕のはほんとに僕が持ってるイメージの木型やから。それを抜き型みたいなのにせなあかん、石膏で。抜けるようにせなあかん。それはそういう専門の木型でやらなあかんわけ。木型やるオッケーが出ないとできないわけ。そこの人が、木型やとる人がまたガンマニアやったんや、

たまたま（笑）。「いつか仕事でできる」言うたら、喜んで、「やる、やる」いうて（笑）。面白かったんや。『Gun』とかそんな本いっぱい持ってんの。だから出会ってほんまに面白いなと思てね。うまくなってんのかな、と思うぐらい。

豊田で、プラン、銃を持って行った時にびっくりしたのが、都筑さんも、「わー、こんなの美術館でできるかな」いうて。「だめなんか？」言うたら、「いやだめいうか、美術館ができるかどうか分からへん」いうて。その時たまたま青木（正弘）さんという人がそこの課長かなんかで。

江上：学芸課にいましたね。

榎：あの人が、あの頃はまだ都筑さんが若い時やったから、「やりたいと思ったらやれよ」いうて応援してくれてね。そしたら都筑さんも元気出て、「やる！」いうてね。予算とかそんなのは、その時も何人かのグループ展やったから、一人の費用は決められとるんやけど、全然、何倍もオーバーしてしまうわけ。それを向こうがなんとか工面してくれて。その工面をしてくれたのが、また面白い、森村くんの作品とか扱ってる、奈良の何とか言う人。ギャラリーやってる人。

江上：西田（孝作）さん？

榎：そう、その人が結構中へ入ってくれて、色々応援してくれて。なんかうまく動いていくというのか。

池上：この銃は「MADE IN KOBE」という銘が入ってますよね。それはどういうふうにして付けられたんですか。

榎：これは「僕がつくったよ」、「うちの会社がつくったよ」いう感じで。榎忠のコーポレーションがやってるという感じ。だから一応アメリカの型とかロシアの型やけど、神戸でもつくってるというのか。作るのは、まあ言うたら銃やん？ ほんとの武器はだめかもわからんけど、作品やから、僕が作ってるいう感じで。これは「L・S・D・F」って、ずっと僕が使ってるなにて、それも全部入れてるんだけどね。だから僕は、美術の世界でもやっぱり自分の身を守るいうか、自分の生き方いうのをやっぱりこの銃に入れてる。単なる見せかけが武器というだけでなしに、それも含めて僕が活動していくこと自体がひとつの武器いうのか。

池上：「メイド・イン・ジャパン」じゃなくて、「メイド・イン・神戸」というのがいいなあと思ってるんですけど（笑）。

榎：神戸のそこでやったのとか、中京大学（名古屋市）でやったのと、（京都）精華大学（京都市）でもやったのかな。

池上：そうですね。書いてありますね。

榎：その時も、誰やった、小林さんか。

江上：小林正夫さん。

榎：前に国際におったんかな。その人が向こうにおって。僕は長い間、美術館でやったことなかったやん？ その頃、僕が《PLAYSTATION》やってる時、倒れて。銃を運ぶこととかいろんな緊張で、その緊張かどうか知らないけど、倒れて、立てなくなってしまっ。C型肝炎という病気やと分かったんやけど。その時ほんと

に動けなくなってしまって。もう展覧会どころやなくなって。C型肝炎って、その時はまだ薬があんまりなかった。インターフェロンというのがあったんだけど、効くのが20%かそこらやったんやって、完治するのが。だから注射やりながら、半年ぐらい、80クールいうて、1日おきにやるの、注射を。それを半年間やって、それで結果を見て、それが合わなかったら違う注射とか薬でやるわけ。

池上：結構長期間にわたりますね。

榎：長期間で検査するわけ。それが高いの、薬が。会社へ行っても保険があったから、なんとか、半額とかでできたんだけど。高いしね、薬もランクがあるわけよ、2,000円とか、3,000円とか、5,000円とか。

江上：ウワー、やらしい。

池上：やらしいねえ。

榎：1万円とかね。そんなの聞いたら、やっぱり高いほうするやんか（笑）。

池上：治りたいですもんね。

榎：医療の世界ってそんなもんかなと思いつつながら。

池上：そんなもんなんですね、ひどいなあ。

榎：それも治るかどうかわからん、その頃は。今は、検査は無料とか、ひどい人は国から出るということになったんだけど。薬も、今は80%から90%の確率でいたい治る。でもその頃はそういう感じやった。それで僕も、治らんかったら、肝硬変になって肝臓がんに直行するだけやいうて。余計もう精神的に参って。会社へ行くこと自体がもう大変やったけど。僕は1か月近く入院したんかな。あとは町医者で、一日おきに注射へ行くんだけど。だけど僕は休まないで会社へずっと行った。家におったら変なことばかり考えるの。変なことばかりね、田舎のこととか、昔の友だちのこととか、もうほんまにね。

池上：よくないですよ（笑）。

江上：よくない。

榎：いろんな資料とか調べて。昔はあんなことあったなあとか。いろんな写真とか資料がいっぱい残ってたから。僕らはいろんな人に手伝ってもらったり、ZEROでいろんな人と一緒にやったから、そんな資料を見たりしよったら余計おかしくなってくるんよ。

池上：振り返りだすとね。

榎：これあかんと思って。もちろん会社行かんかったら、こらあかんと思って。だけど注射がまたきつい。打った後はガーッと寒気がしてね、筋肉がこうなってね、ものすごい寒気がしてね。ひどい時は熱も出るんだけど、熱が出た時は入院しかないの、病院で。あと、それが治ったら、町医者へ行ってその注射を打ってくるわけ。そういう状態を繰り返しとるわけ。

そういうなかでいろんなことしよったら、さっきの小林さんとかそういう人が声かけてくれて、「どないや」

いう感じで。今までは、僕は美術館とかハコモノではやらないというレッテルを貼られてたんよ。最初はいろんな人が企画展とか声かけてくれとったんやけど、僕はそんなのはやってなかったから。僕はそういうのはできないし、やるいうつもりがないからね。そういうのはやることはできない、いうて。そういうなかで、病気で、みんな心配して声かけてくれてね、「こっちができないことは色々協力するから、やらないか」いうて。それでまあやり始めたんかな。精華もやったし、中京大もやったし。それから銃の時も、江上さんなんか「未来予想図」(「未来予想図～私の人生☆劇場」、兵庫県立美術館、2002年11月19日—2003年1月13日)か、あれなんかも「やらないか」いう声かけてくれて。とにかく動いてなかったら変なことばかり考えるの。

池上：逆にたくさんお仕事されてしまった(笑)。

榎：だから僕が一番展覧会やったのって、病気した後やねん。

江上：確かにね。

榎：それまでは3年に1回とか5年に1回やる、そういうプロジェクトみたいな感じで、一つずつの作品をやりよったわけ。だからなんかやってなかったらおかしかったな。その時この本を。いっぱい資料があって、ノマル(Gallery Nomart)の林くんなんか作品とかに協力してくれて、「やろうや」いうて。「それだけ資料があるんやったら」いうことで。そうしたら今度はヤノベくんが訪ねてきて。

池上：うまくつながっていくんですね。

榎：つながっていく。

池上：そのヤノベさんがされた展覧会(「その男、榎忠」)のお話もちょうと。2006年ですね。

榎：2004年ぐらいに来たんかな。

池上：最初はまだちょっとご病気があるとかって。

榎：うん、やっぱりなかなか片手間にできるような展覧会ちがうやん？ それで2004年ぐらいに来たんやったかなあ。「未来予想図」が2003年の初めまでやったかな。

江上：そうそう。2003年の初めが。

榎：3年の1月までやったんやな。その後、べつになにもやる予定はなかったんやけど、病気もゆっくり治したいなあと思いながら。その時、僕も60過ぎて、一応形式的に会社のほうは定年いうかたちで。でも技術のこととか引き継いでいかないとあかんし、会社のほうも「おってくれ」言うし。そういうなかで、「どうなるんかなあ」とか思いながら、こちょこちょ今までやってきた機械とか自分がやってきた金属を、試験的にはぼちぼちやってたわけ、とにかくじっとしておれないから。その時にヤノベくんが訪ねてきて。今までは展覧会の企画はいろんなやり方をやってたんやけど、今度は個人でやる、榎さんとヤノベくんと、もう一人五十嵐なんかというのが。

池上：五十嵐太郎さん。

榎：個人個人に企画できる、自分がやりたい作家を呼んでやるという、そういう企画になったから、ヤノベくんは僕にやってほしい、いうて。「僕らが見てないような資料とか、あんなのも同時にやってほしい」と。そういう感じで、最初、家を訪ねてきたんだけど、僕はちょっとまだそこまでやる気なくて、心配やったんやけど。ヤノベくんも「やってほしい」言ったんやけど、病気のことを聞いて、「まあいっぺん考えとってくれや」いうことで、「できたらやる方向で考えてくれ」いうて。少し金属をやり始めてた時やったんや。そういうことも含めて、試験的にそれを作りだしたわけ。どこまで行けるか分からんけど、最初、試験的にやったのが、近江八幡の「BIWAKO ビエンナーレ' 04」の時（近江八幡市内各所、2004年8月1日—30日）の小さいやつをやったわけ。その時ヤノベくんも見に来てくれて、「ワーツ」いうてびっくりして。「ああ、こんなもんでいいかなあ」と思って。「もちろんもっとこれから色々繁殖していくんや」言うたら、「ぜひやってほしい」言うてね。それからこの作品にかかっていくというか。

池上：「その男、榎忠」（KPO キリンプラザ大阪、2006年2月11日—4月16日）という展覧会の企画と、《RPM-1200》の製作いうのは、わりと平行して進んでいった感じですか。

榎：そうやな。僕も、どういうんか、ほんとにこれがどうなるのか分からんし、どこで発表するか、展覧会やるとも思ってなかったし。ヤノベくんがそう言うて、やり始めてるときに、なんとなく作ってたわけ。だけどそういう話が来たから、わりとキリンでもやれるかなと思って。その一つ手前に近江でちょっとやってみて。手応えいうのか、ヤノベくんは喜んで、「絶対やってほしい」いう感じしとった。

池上：作り始められた頃はまだ病気の治療をされてたんですか。

榎：そう。

池上：どれぐらい闘病してらしたんですか。

榎：闘病はね、1年半ぐらい。あとは月に1回とかで病院行って、いろんな検査とかそんなのがあるから。いまだに行ってるんだけどね。これ、いつ出るか分からんわけ、消えたって。出る人もおるわけ。だからずっと長い目で検査していくわけ。だからどこかに、治ったからいうて安心できないところがあるから、いまだに検査行ってるんやけど。

池上：じゃあ、つきあっていかないといけないんですね。

榎：そうそう、そういう感じやった。だからわりと今までずっとそういう感じで、病気と。まあいつどうなるか分からへんというような病気持ってるから、用心しながら。用心しながらいうたって、べつに作品やったら悪いことでもないし。ただ、食べ物とか、具体的な生活の習慣はやっぱりきちんとせなあかんとか、そういうのはあったけど。それ以外はべつにどううちゅうことないし。

池上：この作品は一応完成になって、それを初めて見せるというのは、「その男、榎忠」展が初めて？

榎：キリンプラザね。うん。

池上：あれはやっぱりすごい展覧会だったと思うんです。それまでも美術館で少しずつ発表されていたことで、美術関係の方には知られておられたとは思いますが、このキリンプラザの個展で、知る人ぞ知るみたいな存在から、バーンと知名度が。

榎：そうやね、結構若い人とかいろいろな人が結構来るからね。

池上：知名度というか、「有名作家」になられたと思うんですけど。言い方が変ですけど、ごめんなさい（笑）。若い方からすごく慕われるようになったり、何かご自分の立場みたいなものがちょっと変わられたような感じはしますか。

榎：そうやねえ、やっぱり東京の方からとか、いろんな遠いところからとか、みんな見に来る、ああいうとこでやれば。今の若い人でも、旅行に行くいうたら、「せっかく関西へ行くんやから」いうて、美術の好きな人やったら、そういう美術館探して寄るとか、そういうふうになってるというのも確かやしね。やっぱり東京の方のいろんな評論家とか、松井みどりさんとか、ああいう人とか、今まで名前は知ってるけど、実際会うようなこともなかった人が来てくれるとか。ROSEをやったら、そういう興味がある人がまた来てくれるとか。そういう意味で、ああいうとこでやればやっぱり違うなと思う。

池上：それはやっぱり素直に嬉しい？

榎：うん、うん。単なる神戸の僻地とかそういうとこでやってるのはまた違うな、いうのか。僕はべつに美術館とか否定してたわけではないんだけど、せっかくやるんだったらいうことで、僕の身の回りのできるような作品いうか、そういうとこでやってたけど、やっぱりだんだんそういうとこでやっていったら、そういう狭い世界だけでなしに、もっとこういうもんはいろんなとこでやるべき、いうことも分かってくるし、その大切さも分かってくるし。作品の考え方も、こういう考えで作らなあかんいうことも、具体的なことにも関わっていかんあんなと思うし。

池上：それで榎木（野衣）さんが、ここに資料が載ってたかな、「ヴェニス・ビエンナーレに持っていきたい」という計画がありましたよね。

榎：そうなんや。その時はギュウチャンと僕のがもう決まっとった。それでその時期に榎木さんが、ヴェニスの審査員の候補に選ばれたから、それで僕を推してくれたわけ。

池上：コミッションの候補としてプロポーザルを出すということだったんですね。

榎：うん。それで豊田の方も一応「やる」言うてたんやけど、「ヴェニスでやったほうがいいんちゃうか」いうて。「うちはまた後でもできるから」いうて。「ヴェニスなんかで候補に選ばれるとか、やるというのは滅多にないことやから、そっちの方をやったらどうか」ということで。それで今度はヴェニスに、プランとかいろんな模型とかいろんなドローイングを送ったりして、わりとええとこまで行ったらしいんやけど、2位かなんかで。

江上：次点かなんかやったんですね。

榎：最後はジャンケンではないけど。

江上・池上：ジャンケン（笑）。

榎：同等やったんやって。どっちを選ぶかで。審査員が何人かおって、一人、岡部何とかいう人がアメリカにおつて。

池上：岡部あおみさんですかね。

榎：ちょうどいなくてね。同点いうたらおかしいけど、どっちにするか分からんということで、もういっぺん投票みたいのをやったんやって。それで3対2かなんかで。

江上：ワー、惜しい！

池上：そういうところは知らなかった。榎木さんと一緒に展示プランとか、こういうことをやりたいというのを考えられたわけですよね。どういうプランだったかというのをちょっとお聞きしてもいいですか。

榎：そこに載ってないかな（『Everyday Life/Art Enoki Chu』、112-13頁）。ここの本館の方は、こういう《RPM》を展示しようかなと思って。もう一個は、ここの下でバーをつくってね。結構広い、僕行ったことないんやけどね、広い公園らしいわ、いろんなパビリオンなんかがあって。

池上：そうなんです。

榎：ROSEは、昼間は散歩したりいろんな会場へ行ったりなんかして、ウロウロして、夜はここで客を呼び込んでバーを開くというのか。

池上：ここが半地下みたいなスペースになってるんですよね。高床式みたいな感じで。

榎：ここに、このあいだ美術館でも貼ってたんだけど、こういう「ハンガリ」のやつを各角に置いて。それでこの中で、これはバーのことやけど。その前の、林のところで穴掘って。中では金属の、光ったほうの《RPM-1200》をやって。ここに錆びてる、まだ磨いてないやつを、穴を掘ったら出てきたという想定でね。それは発掘いう感じでやっていたんだけど。「やっぱりこれは無理ちゃうか」いうて。あそこの土地は国のもんで、あそこのものでないらしいわ。だから掘るとか、植物とか木とかに作品を何かするというのは結構難しいんやって。穴掘るのは。

江上：しかも、あそこ島ですもんね。

池上：水が入ってきても困るし。

江上：いかにも危なそう（笑）。

榎：ROSEは、審査員の方は、僕の作品とかそんなので知ってるけど、実際知らないやん？「何のことかわからん」言うやんか。榎木さんは知るとるからね。なんかあそこでああいうバーつくったり。

江上：ヴェネチアでしかも（笑）。

榎：日本人の、オープニングとかいろんなパーティがあるらしいんやって。日本人のパーティっていつもおもしろないんやって。よその国は、国挙げて、いろんなドンチャン騒ぎみたいなのがずっと1週間続いたりとかやるんだって。そういうなかで、日本のそういうパーティにしたっておもしろないし、「絶対ROSEやったらウケる」いうてね。

池上：ウケると思いますけどねえ。

榎：だけどそういうことで。人によったら、《RPM》だけでも、会場だけでも十分作品としていい、とは言われておったんだけど。

池上：これは榎木さんと相談しながら？

榎：いや、べつに榎木さんと相談したのではなしに、僕が「こういうことできるか？ やりたいんや」いうことを言うたわけ。そしたら榎木さん喜んで、「ああ、面白い」いうて。で、模型まで作って全部。

池上：じゃあこういう場所だというのを聞いて、それでイメージをふくらませて。

榎：そう。図面とかいろんな写真を送ってもらって。

池上：すばらしいプランだと思いますけど。

江上：ねえ。日本館のマイナスを感じさせない。

池上：うんうん、すごいまい使い方ですよ。

江上：建築としてすごい使いにくいって言われてるんですけど。

榎：このへんは、手伝ってくれたのは多田（智美）ちゃんとか原田（祐馬）くんとか建築やっとなる連中が。

江上：なるほど。

池上：これはぜひ、今からでもまた実現させたいプランだと思います。

榎：これも、このあいだの県美で少しはやってみたいことをちょっと入れてみたんやけど。

池上：これぐらい小さい建物でガーデンとやるほうが効くような感じはしますよね。

江上：うちの、兵庫の美術館は壁が黒かったでしょ。だから貼ってるって感じにどうしてもなってしまうて。

池上：確かに。

江上：ここが白だと、より効果的。

池上：兵庫県美、また大きいですしね。じゃあ夢のプランですね。

榎：だけど、このプランがだめになって、森美術館の「クロッシング」につながっていくわけ。森の「クロッシング」（2007年10月13日—2008年1月14日）の時も榎木さんが担当していて、作家の（人選を）。その時、悔しくてね、これ落ちて。榎木さんは結構自信があったみたい、僕のが通ると思って。それで「忠さ

ん、やっぱり東京で発表しないと。そういう審査とかはほとんど東京の人だから」いうて。「まあしゃあない」  
いう感じ。それで今度はギュウチャンと僕との二人展になっていったんやけど。

池上：だから豊田のを待つ必要がなくなったという。

榎：そうそう。だから同時にやったんよ、僕、豊田と森と。だからあの作品が2か所あったわけ。

池上：そうですねえ。

榎：それまでに十分できるぐらい、キリンの倍ぐらいには作品増えてたわけ。

池上：ここにも榎木さんの文章で、「次点」というふうに書いてあって。審査員の名前も全部書いてありますね。

榎：書いてた？

池上：書いてありますね、ここに。

榎：5、6人おったんちゃう？

池上：はっきりさせとこう、みたいな感じで(笑)。豊田の展示ではパトローネを使った展示もすごく印象的だったんですけど。あの素材を使い始めたのはいつぐらいから？

榎：豊田が初めて。

池上：豊田ですよ。なんか「これや！」というのは、やっぱり素材がどこかに入ってきていて、大量に見て、ということですか。

榎：それも、僕がいつも行っている兼正で見つけたわけ。それがボンと大量にあったわけ。最初何か分からなかった。いつも僕、会社に行く時その会社の前を歩いていくわけ、「どんなもんがあるかな」と思って。そんならボンと目に入ったわけ。もうすぐクルマを降りて、ワーッと近寄ったら、きれいやった、太陽が、朝、ものすごいピカピカ光ってね。「きれいやなあ」と思って。よう見たらフィルムのそんなのを圧縮したやつで。すぐ社長に聞いたら、「入ってるよ」言うから。僕、カメラ持って次の日行ったんよ。ほな、ないんよ！ゴソツとないの。あれっ？と思って。「昨日のあれ、あったのどうしたん？」言うたら、「あれ、もう処分、溶鉱部行ったよ」いうて。「えっ」いうて。「いや、また最近入りだしたよ」いうて。「ああ、そう。また入ってくる？」言うたら、「入ってくる」言う。で、写真撮ったり、ずっと検討しとって。豊田のその話もあったし、これと豊田でいっぺんやってみたいなと思って。

池上：兼正に何が入ってくるかで、わりとインスピレーションが。

榎：そうそうそう。

池上：あの時も暗い照明と明るい照明と、交互になってたじゃないですか。そういうのも、いま、朝日浴びてすごいピカピカしてきれいやったということから来てるんですか。

榎：あそこは暗いねん、会社が。油だらけで暗い感じの中で、ああいうもんがピカッと黄金のように輝いてるやん。やっぱりそういうところがどっかにあるから、明るいところで見せるんでなしに、なんかそういうもんが。

池上：交互に、明るいのと暗いのが変わるという照明がすごくいいなと思ったんですけど。

榎：見てる人って、どうしてもそういう動きとか、光の動きとかそんなのがあったら、どっかに入ってくるもんがちがうやん？ 視覚でただ見るいうのでも、なんか体に入ってくるような感じがするやん？ 《RPM》でも、照明の光が、太陽みたいな感じでずっと、朝日が昇って夕陽になっていくいうの？ 短い時間だけど、どこかに入っていくいうのか、人間が自然と持つてる自然の体をちょっと利用するいうのか。

池上：では、ちょっと最近の例で、去年の兵庫県立美術館の個展の話をお聞きしたいんですけど。これは出原さんが「やりませんか」ということで来られたんですか。

榎：それはね、前から話してたんよ。出原さんが兵庫へ来て、もう5年ぐらい前、もっと前かな。

江上：6年ぐらいかな。

榎：「何や」いう感じで出会ってね、神戸。「出世したんか」言うたら、「いや、向こうクビになった。追い出されたんや」言うからね（笑）。で、「ここへ来たんやけど、わし新人やし、今は何もできんけど……」って。

池上：新人？（笑）

榎：新人や、まあ言うたら。美術館で初めてやん？

池上：まあ新しい、違うところに来られたという。

榎：だからあまり何も言えない。

江上：ウソばかり（笑）。

榎：そう言いよったよ。ペーペーやからな。

江上：でも来てすぐに、私に「榎さんの個展一緒にやらへん？」って言いましたよ。

榎：ほんま？

江上：わりと来て間もない頃から。

榎：やりたいというのはその頃からまああったんやけどね。いつかやりたいな、いうて。わしはまだまだ来て間がないから、「こわいネエさんがおるから」いうて（笑）。

江上：「やりましょ、やりましょ」って言ってたんですけどね（笑）。

榎：ずっとそんな話はしてたわけ。この美術館も私ら新人やから何も言われへんのやけど、なんか暴れたい、

動きたいな、とかいうのはずっと言ってたから。それで何年かして。なんとなくそういう時期が来たのかな。出原さんもそうやったし、僕もずっといろんなところでやってきたけど、《RPM》もいろんなところでやってきたけど、何やってるのかな、ということをもういっぺん僕なりに考えてみたいと思って。ほんとに作品いうのを考えてみたいというのか。その頃シマブンも美術館（BB プラザ美術館）やるとか聞いてたし、シマブンにも興味あったんや、昔から。だけどあそこは大きすぎて、なかなか兼正みたいに毎日寄るようなこともできないし、やっぱり避けてたわけ。言うたらシマブンと兼正ってライバルの会社やねん。

池上：ああ、そうですか。

榎：仕事の取り合いになるわけ、ある意味。同じような仕事しとるから。あれは競売みたいなので、ああいう鉄くずを、大きい工場とか会社とかを建て直した時に出てくる鉄骨を入札するわけ。いろんな市場とかでああいうのを入札して、ある程度買う時の値段があってね。そういうので業者同士の、言うたらライバルみたいなの。兼正も、「シマブンのを使う」言うたらあまりいい気しないわけ。

池上：今までやとったのに、って。

榎：うちのでやるんやったらどんどん応援してくれるわけ。だけど今回はそういうのでなしに、もっとそういうとこと一緒に考えるようなのもやってもいいかなと。それは、あいだに美術館があるということで、やろうかなと思って。だから遠慮してシマブンいうところには関わってなかったんだけど、シマブンはちょっと違うもんがあると思ってね、兼正とは。やっぱりスケールが違うから、会社の規模が。そういうなかでやりたいというのと、シマブンいうたら神戸製鋼とか。あの美術館の場所って、元神戸製鋼やん。なんかそういうところで関連性がずっとあるわけ。

池上：シマブンも目と鼻の先にありますしね。

榎：そう。それで昔、神戸製鋼いうたら、銃とかそういう戦争に使うような武器とかそんなのをいっぱい作とったし。そういう中、あの美術館の土地いうのは、そういう歴史的なものがあるわけ。

池上：そうですよね。

榎：ああいう金属の会社やし、だから僕が思とる金属の、見れない世界が見れるのどちがうかなと思って。その時、西村さんという《RPM》の作品をその人がコレクションしてくれた人が、パイプを作ってる工場とかそんなのも分かって。そういうところがスカイツリーのああいうのをやったりとか、新日鉄とか、大きい日本の企業が関係してるというのか。そういうとこへまた見学に行けるんや。だから、君津の大きい新日鉄の工場へ行っているんこと見たりとか、スカイツリーも実際工事に行き、工事の見学させてくれたり。まだ僕らが行った時は450メートルぐらいやったけど。展望台からちょっと上へ上がったぐらいの時やったかな。そういうとこ見たりして。新日鉄のほうも、「できることは応援する」みたいな感じで言うてくれるし。溶鉱炉から鉄が生まれるというのか、僕がずっと昔から思てる、地球とか、噴火とか、火山とか、そういうことがずーと。

土とか山とか、地球ができてくるというのか、生まれてくるというのか、そういうことをみんな含んでるわけ、そういう会社が。そこに人間が関わって、鉄を抽出する。それは自然であり、人間が関わって鉄いうものが生まれてくる。なんか、「鉄の一生」いうたらおかしいけど、地球がそういうひとつの細胞を吹き出してきたというのかな、何か血管みたいなのを地球上に送り出す時に、人間が生きていくために関わっていくというのか、そこにまたいろんな職人が関わる。ずっと僕がやってきたことが、なんか一つの線が出てくるというのか。展

示はああいう方法になってしまったけどね。だから僕がやりたいことは、70%はできたんとかがうかなと思って。それは、出原さんとか江上さんがおったから、美術館の人も色々応援してくれたりしたからできたのであって、ありがたいなと思うし、ある意味幸せやなと思うし。そういうことができるというのが。

だけど逆に、そういうものが大事になるということは、ものすごく、ほんとに大事やねん。作品作るって大変やなと思うけど、それ以上に、人と出会ったり、「絆」は甘い言葉かもわからんけど、そういうのも生まれてくるし。こうやって話ができるのも、ああいうことをやったからできるんであるし。なんかそういうふうに、まあどういふ方向に行くか分からないけど、そういうことで、僕はまだまだやることがあるのとかがうかなと思うし。ないかもわからないけど、まあ生きとったら、何か違うひらめきみたいなのが出てくるのとかがうかなと思うし。まあそういう感じかなあ。

池上：展覧会を担当された江上さんからは。

江上：急にふられると、ちょっと（笑）。

榎：また後で、食べに行った時でも。

池上：私もこの展覧会を何回か見させてもらって。でも、いつ行っても榎さんがいらっしゃるんですよ。観客の皆さんといつもすごいお話をされていて。個展でそういうことってめったに見ない光景でね。私はそれがすごく印象的。お客さんというか、見に来てくれる人をすごく大事にしてるなというのがすごく印象的だったんです。

榎：そうよ。見てくれる人がおるから展覧会をやってるわけ。やっぱり自分と、そういう知らない人と、接触して。また次につながるもんもあるかもわからないやん？ だからそういう中で、僕はなるべく展覧会に行くようにしてるわけ、個展の時でもね。時間でも、ちょっと遅くまで開けとって、休みの時はずっと行けるけど、仕事へ行ってる時はその日はなるべく早めに帰らしてもらって、なるべく遅くまでやるとか、いろんな人と話すとか。ほとんど飲み会とかそんなのばかりやけどね。そういうことが大事やと僕は思ってるわけ。みんな、自分で展覧会やっても、誰もいない時が多いやん、展覧会とか個展とか行っても。みんなどういふ気持ちでやっとなのかと。みんなそれぞれ違うから、それはそれでいいんだけど、僕にとってはそういうことは大事やねん。

池上：私がたまたま見た時は、「現代美術のことをよく知ってるんです」みたいな人じゃなくて、「なんか私、こういうの全然分からへんねんけど」みたいな、いわゆる普通のおばちゃんが（笑）。

榎：そうよ。ほとんどよ。

池上：そういうおばちゃんとすごいしゃべってて。なんか素晴らしいなと思って。

榎：そういう人が声かけてくれるんで。子どもみたいな、中学生とか。おばちゃんとか。どっかの友だちのお母さんとか。結構そういう人も来てくれるわけ。「あんたかな、チュウさんて」「こわい人と思っちゃったけど」いう感じでいろんな話をして。

池上：やっぱりそういう人に伝えてこそと、いうのを私もすごく思うんですよ。

榎：美術家は自分らの仕事やからね。自分らがそれぞれ考えてやればいいんだけど、そういうのを知らない人とか子どもとかいうのは、やっぱり僕は僕なりのことを話していく。展覧会をやるからには、そういうことは

やっぱり僕は大事にしたいと思うし、大事にせなあかんと思ってるの。

池上：その姿勢がすばらしいなと思って。何回行っても榎さんいるから。「あ、今日もいる」みたいな感じでね（笑）。

榎：また電話がかかってくるんよ、「今日行くんやけど、来るか？」とかね。

池上：みんな、気さくに。

榎：どうしてもそういう風にみんなが来れる日とか、田舎から同級生なんかが集団で来てくれたりとか、いろんな人が声かけてくるから。

池上：そういう人が感想とかを言ってくれるのも、榎さんにしたらすごくパワーになりますか。

榎：そうよ。だから昔のこととか、「蕨菜、よう拾いに行ったな」と、一緒に行った子も来るわけよ。「ああ、こんなんを今頃作品としてやってるんか。こんなん作品になるんか」とかね、そんな素朴な話をしたり、田舎のこと思い出したりとか。そういうことも僕の活力にもなるし、「ああ、みんな僕のこと覚えとったな」とかって、一緒に遊んだことも思い出したり。そんなのみんなだんだん忘れていくやん？ だけどそういうこと、何かきっかけを与えたら、昔のことがまたよみがえってきて。ああ、あそこによく山菜採りに行ったなとか、キノコ採りに行ったなとか、そんなのがずーっとほんまに浮かんでくるやんか。そういうことが、僕はいいなと思って。

池上：また今日もたくさんお話を聞かせていただいて。江上さん、何か最後にお聞きしたいことありますか。

江上：だいぶお聞きしましたね（笑）。

池上：予定していた質問はお聞きできたので、榎さん、最後にこれをもう一回強調したいとか、そういうことがあれば。

江上：言っときたいこと。

榎：いやー、べつにないなあ。二人の美人が来てくれて、それが一番うれしい（笑）。

江上：またまた（笑）。

榎：ほなまたやる気になってくるし。「ああ、やらなあかん」と思うし。

池上：では、このへんで。また時間を置いて、5年後、10年後にまたお聞きしたいです。

榎：生きとったらな。

池上：もちろん元気でいてもらわないと。

江上：バリバリやって。

池上：では、本当に長い間ありがとうございました。

江上：ありがとうございました。

榎：どうも、おつかれさんでした。

この冊子は2016年3月31日現在、日本美術オーラル・  
ヒストリー・アーカイブのウェブサイトで公開されてい  
る榎忠オーラル・ヒストリーを印刷したものです。インタ  
ビューをより正確なものにするために、修正あるいは追記  
される可能性があります。最新のバージョンはウェブサ  
イト ([www.oralarthistory.org](http://www.oralarthistory.org)) をご確認ください。

This booklet prints the oral history interview with  
Enoki Chū published on the website of the Oral  
History Archives of Japanese Art as of March 31,  
2016. The interview can be revised or annotated  
for the purpose of accuracy. For the latest version,  
please visit our website at [www.oralhistory.org](http://www.oralhistory.org).

---

榎忠オーラル・ヒストリー

インタビュアー：江上ゆか、池上裕子

デザイン：西岡勉（フォルダ）、青木意芽滋（冊子）

発行：日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ

発行日：2016年3月31日

Oral History Interview with Enoki Chū

Interviewers: Egami Yuka and Ikegami Hiroko

Design: Nishioka Tsutomu (folder) and Aoki Imoji (booklet)

Published by: Oral History Archives of Japanese Art